
ショートとりっぷ！

さくらさくらさくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シヨートとりつぶ！

【Nコード】

N1202T

【作者名】

さくらさくらさくら

【あらすじ】

時折訪れる異世界への問答無用のとりつぶ。そこで必ず出会う金髪碧眼の天使。子供を守りぬくと、元の時間帯へ戻ってこれた。だからありすは、このとりつぶの訪れを楽しみにさえていた。
・・・今までは。

【似合うよ、ありす】

「だから、あたしはわんこじゃないっ！」
首輪をはめられ、帰ることの出来なくなったありすと、ありすを探し続けた代々の金髪天使の、もしかして恋に発展するかもしれない

物語。
・
・
・
多分。

ありすインワンダーランドも楽じゃない

うん、始まりは、中学一年のときかな？

新しい生活にもなれて、毎日が楽しいと感じられるようになった頃、それは起こったの。

すうっと血の気が引いていく感じがして、気がついたら、知らないところにいたんだ。

普通に授業受けてたのに、はっと気付けば森の中。驚いた。

でももつと驚いたのは、目の前に血まみれの剣を振り上げて、びっくりしている男の姿を見たときだった。

すぐに立ち直った相手は、血走った目で「邪魔をするな！」と叫んで、あたし目掛けて剣を振り下ろそうとしたんだ。後ずさったら、後ろに小さな子供がいたことに気がついた。

ちっちゃな子だった。金髪の片側が血で固まって、碧の瞳が涙に濡れてた。

小さなその子が押さえた腕から滴る赤。頭の奥がしんと冷えたのを覚えてる。

あたし目掛けて振り落とされた剣筋に、手をそえて左に払い、手で男のこぶしを打ちつける。普通じゃなかったんだと今なら思う。だって素手で刀に対峙したんだよ？

でも、そいつの血走った目はあたしの後ろの子供に注がれていた

んだ。

あたしを切り捨てて、今度こそ、この子供を切り捨てるつもりなんだろう。そう思ったら。

・・・ふざけんな。

そう思ったね。こっちだって弱い乙女だ。だけど子供に怪我させるような卑怯者に、負けたくないって思った。

どんなに握力があっても親指の付け根を殴打すれば、持ってる獲物を取り落とさせることが出来ると聞いたことがある。

だから、そこを狙って力いっぱい叩いてやった。

そしたら、さ。

なんかすごい音がしたんだよね。ごきっ？　ぐぎよっ？

うわあっなんて悲壮な声を上げて、男が剣を取り落として、あたしを睨んできた。

正直言えば怖かった。でもね、引けるはずなんかないんだ。

弱いものいじめは嫌いだ。強い男が弱い子供を追い詰めるなんて卑怯なまねも許せない。

だから。

ずっと重心を低くして男の懐に入り込んで、男の腕を基点に肩口に担ぎ上げ、投げ飛ばした。投げるために掴んだ男の腕を放さない

まま。

ごりつと低い音が響き、男の無様な悲鳴が響き渡るのを、あたしは冷めた眼差しで見ていた。

髪を止めていたリボンを解き、それで後ろ手に回した男の親指どうしをきつく結ぶ。これも格闘好きの先生のおかげで知ってた豆知識だ。こうして縛ると細い紐でも解けないんだって。

ま、肩も外してあるし、たいした動きは望めないだろうけど、念のためだ。

男は子供の血で濡れた剣を持っていた。

その剣を今度はあたしが持って、男の首に剣先を当て、そのまま斜めに地面に突き立てた。

男は蒼白になった。少し動くだけで首筋の皮が切れるだろう。これで当分動けまい。

あちこち切られて呆然としていた子供を、そこでようやくじつくりと見つめることが出来た。

見慣れない子だ。身なりも綺麗で、こんな風に追い詰められて切りつけられる理由なんか解らない。

外人さんなら、身代金目当てか。

「誘拐か、殺人か・・・どっちにしても、言い訳は出来ないね、あんた」

警察来るまで、このまま両肩外して転がしとこう。

男から興味がうせて、子供を振り返った。

子供は端正な顔立ちの人形みたいに可愛い子だった。

金髪はさらさらで、血で固まったところが残念だ。碧眼は透き通るよう。頬は今は青白いが、いつもはきつとばら色に染まっているんだろう。

可愛そうに。

「君、どこから来たの。・・・わかんないか、わかんないよね、えーと、ホエアアユーフロむ？」

つたないどころか棒読みの習ったばかりの英語は通じなかった。

ただ。

「ウワン、コウ。・・・トリリヤーズ、ウワン、コウ、レス、リ、ヤアアナ」

ウワンコウと言いながらあたしをさした。

トリリヤーズ、ウワンコウ、でまたあたしを指差した。名前を聞いているのか・・・？

「犬ころみしたいな、子だなー。あー。あたしー？　あたしはね、あります。日佐川　あります」

「・・・アリ、あります」

「そー。あたしはあります」

眩いて見上げてきた瞳の色を覚えてる。

魅入られたように、吸い込まれるように、見詰め合ったのはどれくらいの時間だったろうか？

「ウワン、コウ」

見つめる少年は、縋るような眼差しで見上げてきた。

「・・・あたし、わんこじゃないから」

「ウワン、コウ、ジャアナい」

「そうそう。そうだ、君の名前は？」

目線を合わせて尋ねた。

その瞬間、世界がくるりと回転した。

「ーーーー日佐川！　いつまで寝てるつもりだ！」

後頭部をすばこーんと打たれて目を覚ました。

白昼夢を見たのはそれが初めてで、それが始まり。

日佐川　ありすと、金髪碧眼のわんこ属性の天使。

がーるみーつきっずの瞬間だった。

「思えば、遠くに來たもんだー・・・と」

ありすは呟いた。

「あああー、これで何回目だー？」

ふうっと気が遠くなって、気付けば見知らぬ場所と言うのは、何度経験しても慣れやしねえ。

「この三年、ショートとりつぶを何度、繰り返したっけー・・・」
そんでもって、何回歸るたんに先生に怒られたっけかなー・・・

もうじき高校進学なのに・・・。

一回目は森の中。金髪碧眼の天使を助けた。

二度目は体育の授業中、跳び箱飛んで見事着地に失敗してー・・・。

「いや、あれは失敗じゃない。カウントしちゃダメよ、ありす」

跳び箱飛んで、剣を振り回してた男の頭頂部に、華麗に両足そろえて着地したんだ。ある意味ムーンサルトもウルトラCもびっくりだったはずなのに、悲しいかな、採点してくれるはずの先生の姿がなかった。

悔しいのと、これでまた先生に怒られると思ったら、怒りも倍増。群がってくる筋肉剣士をちぎっては投げ、ちぎっては投げ。

・・・あれ、いつからあたしったら、こんなに強くなったのかしら？ 成人男性の筋肉たるまを軽々と持ち上げては投げ飛ばす女子中学生・・・シュールだわー・・・。

ここは、夢の世界だから、重力が違うんだよ、きっとそうよね。そうとでも考えなくちゃ、この突然の筋力、悲しくなるだけよー。

でも、向かってくる奴らはそろそろ必死の形相でさ。命の危険をびしびしと感じたわ。それは背後にかばった金髪天使も。あたしが倒されたら、きっとこの子は殺されちゃうって思ってたがんばった。

こっちだって、玉の素肌に傷なんか付けたくない。必死に防御したよ。

え、でも過剰防衛？・・・そうかもね。

・・・で、気がついたら腰にすがり付いて泣いている、ワンコ属性の金髪少年とまたもや、ふたりきりになるのを繰り返したんだ。

「ワンコウ、ワンコウ、」

「なに、わんこ少年」

きらきらきらと見上げてくる眼差しにまたも吸い込まれるように見詰め合って・・・。

ああ、ほら、また視界が一回転する。

「日佐川っ！ 寝るなと何度言わせるううっ！」

後頭部にバレーボールがぶち当たった。

せんせい、暴力反対です・・・。

三度目はおそらくどっかの室内。やたらきんきらきんだった。

わんこ金髪少年に向かって細身のナイフを振りかざすメイド服姿の女の子と目があって、すかさず鳩尾にこぶしを叩き込み、手ごろなシーツで捕獲。

四度目は寝室のベッドの中。隣で眠るわんこ金髪少年の寝顔にドッキリしたあと、寝込みを襲おうと息を潜める刺客の皆さんにたま持ってたバレーボールのネットをかぶせて（ネット張り作業中だった）、ふるぼっこ。

五度目はまたも森の中、金髪少年の背後に立った、ロープを持った従者を蹴り倒し、再起不能に持ち込み。

六、七、八、九は剣の雨の中、金髪天使を背後にかばいながら善戦し凱旋。

十、十一、十二は毒を混入しようとするところに居合わせて、にっこり笑顔でそいつらののどに流し込んで、戦意喪失を誘った。

十三回目。

「・・・ああ、十三回目か・・・」

足の下に、折り重なって倒れてうめく、男ども（刺客）を尻目に、指折り数えて感慨にふける。

顔を上げてほおっとため息をついた。

ようやくあたしは眉をひそめた。

「これって、やっぱ、ヘンじゃねー？」

刀も、不意打ちも、毒も見逃さない、鷹のような目なんか、知らなかった。

鍛えたことなんかなかったはずなのに、流れるように優雅に動く、好戦的な体。

あたしは、ごく普通の女子中学生だったはずだ。

機敏に動ける体が、嘘のように軽い。

毎度毎度片言しか言葉を交わさず、目を合わせるだけで、分かれてきた少年が手を伸ばした。

「・・・あります！」

金髪の少年が感極まったように声を上げた。

「・・・わんこ属性。なんだかよくよく君とは縁があるみたいだね・・・」

嬉しそうに駆け寄って、抱きついてくれるのは嬉しいんだけど、

そろそろ説明があってもいいんじゃないかと思う今日この頃だった。

ありすインワンダーランドは金髪だらけ

抱きつかれて、やれやれと金髪天使を見つめた。

相変わらず、わんこ少年は可愛いなあ、見えてないけど必死にふつてる尻尾が見えるようだよ、おい。

守って！　と言わんばかりの体全体からあふれ出す可愛いビーム、おねえさんはウラヤマシイヨー。

金髪はさらさらで、今回はどこも血に濡れてなかった。よしよし。碧眼は涙に濡れて、でもうれし泣きだって解る。

ざっと少年の身体を見て、どこも怪我はなさそうなのを確認する。

あー、良かった良かった。

いつもならこれで役目は終わりと、意識が遠のくの身に任せるのが常だった。

ああ、ほら、来た来た。すうっと意識が遠のいていく、この感じ。ああ、今の授業は、数学？だったなー・・・住野先生の怒りを思うと気が重くなるわー・・・。課題倍増は決定だなー・・・。

ーーーだけど今日は、違っていたんだ。

「ーーーりす！　ウワン、コウ、ありす！」

腰に抱きついた少年が、あたしの腕を握ってがくがくと揺らすん

で、一瞬、気がそがれた。

消えそうな、あやふやなあたしの存在感が、ふと場に戻る。

必死にあたしを見上げるその顔に、ああ、この子も、はなれがたいと思ってくれているんだな、と嬉しくなった。

遠のく意識を繋ぎとめ、少年が促すまま腰を折りひざまずいた。目線が重なる。

ぱあっと明るく輝く笑顔に、少しでもこの子と言葉を交わせたら、とそう思ったのはうそじゃない。

短いとりつぶの最中に、出会えるのは殺気立った刺客の皆さんと、この子だけ。言葉を交わしたことも数えるほどで、こうして手を取り合うこともなかった。

毎回ピンチのときに現れる、あたしったらまるでこの子にとっては正義の味方じゃない？

あたしだって、時間が許すならこの天使ともっとお話がしたかった。毎回毎回、泣き顔のような笑顔に見送られて別れるんだよね？ 後ろ髪が引かれるなんてもんじゃない。

刺客は大体片付けるけど、乱戦の後たった一人で残されて、金髪天使は心細いだろう。

無事家に帰りつけたかな。

あの子の味方が探しに来てくれると良いなあ。ぶっちゃけ、良

い人に保護されますように！ と、祈ったりもしてた。

だって、毎回とりっぷする度に、命狙われてますって子なんだよ？

心配じゃーないか！

だから学校帰りに通にかかる神社に、金髪のわんこ少年の無事を祈願するのが日課になりつつあったくらいだ。

・・・まあ、通信簿に「授業中死んだように寝ていることがあります。生活習慣を見直しましょう」って書かれた時は、親にこっぴどく叱られた。

気が遠くなった時に体験する白昼夢が、少し(?) スペクタクルで血湧き肉踊る展開なのが問題なんだよね。

そりゃ、始めはびっくりして悩んだけど、一年に四回程度のとりっぷなら、楽しむかー、楽しんだほうがお得よねー、って、達観しても見た。え、あきらめるのが早いって？

いやだ、人間、あきらめが肝心よ！　だって自分の意思じゃどうにもならないんだもん。

普通に生活してるだけなのに、戦乱に叩き込まれるんだもん。二回目のとりっぷ時なんて、リアルな土ぼこりと血臭漂う戦場に放り出されたんだよ？　屍るいるいで叫んだところで誰が助けてくれるのさ。

多分金髪わんこ少年自体だって、味方が誰もいなくなって、右も左も敵だらけ、にっちもさっちもいかない危険な状態に陥ってて、

誰か、神様！って祈ったと思うのよね。で、現れたのが・・・あたし。

がっかりさせたと思うよ。全力でがっかりさせたと思うとも！

あたしだったら、危険なとき、誰か助けてー！って叫んでさ、あたしみたいな非力な（ここ強調しとく）女子中学生が正義の味方よろしく現れたら、全力で脱力する。

ふざけんな、って思う。

でも、ね。その非力な（ここ重要）か弱い女の子が（ここ大事！）大の大人をちぎっては投げて、助けてくれるわけよ。

それって、ヒーローじゃん。

あたしってこの子にとって、唯一の味方で、絶対の信頼と尊敬と愛を向けられる、天使みたいな存在なんじゃ・・・？

うん。おねえさんは、ここはやはり菩薩の微笑を見せておくべきじゃなかるーか？・・・うん、それってどんなって突っ込みは後で自分にしとくよ。

え、えっと、ふんわりとこう・・・笑って、め、女神様のように（てへ）・・・え、でも、それってどんなかなー。

「怪我は無い？」

女優よ。

女は女優！

「アリ、ス。ウワンコウ、あり、す」

金髪わんこ属性の将来有望株が、腕を伸ばしてくる。その、今にも泣きそうな、顔。

・・・いまだに、あたしはわんこ呼ばわりだったけど、これって今までにない展開よね？　今までは唐突に始まり唐突に終わるショートとりっぷばかりだったもん。

こっちの世界の主役との、十三回目にして初のあたしの意味によるわんこ少年との意思疎通の開始。

あたしは、あたしのとりっぷの意味が少しでもわかれば良いなーなんて、のんきに考えてた。

ぎゅっと首筋に小さな手が回されて、わんこ少年の髪からお花の香りが漂う。

良いシャンプー使ってんだろーなー。

頬に当たる髪のはふわりなれどさらっさら。くー、うらやましー！　次のとりっぷの折には、是非シャンプーのお持ち帰りのご準備をお願いしたい！

すんすんとお花の香りを堪能し、さて感謝の抱擁はこれぐらいで、そろそろお帰りの時間かなー？　って考えていたら、首の後ろでわんこ少年の手のひらが、なでるように動いた。

かちり。

・・・と耳元で音がしたのに気がついて、ぼんやりしていた意識

が嫌にくつきり、はっきりしたな〜と思いはした。

え？ あれれ？ なあに、これ？ ふれぜん？ 何気なく首筋に手をやって、硬くて滑らかな何かが首に巻かれているのに気がついた。

「・・・あれ？ なに、これ・・・」

こてんと首をかしげてわんこ少年を見た。
碧の瞳がまっすぐあたしを見つめていた。
にっこりと、笑う。

釣られてあたしも、へらり、と笑ってみせた。

「似合うよ、ありす」

はっきりした日本語で、そう言って目の前で花のように微笑む金髪天使を見ても、現実が早々実感できなかった。

「あ、れ、言葉・・・」

君、今まで片言だったよね？ いつの間に勉強したのかな？

「ありす、ずっとこの日を待っていたんだ。夢物語に聞きながら、ずっと待っていた」

まっすぐ射抜いてくる眼差しは、澄んだ碧。ぎゅっと離さないとばかりに抱きしめてくる腕の力は、縋るようだ。

「ありす、「僕」を助けてくれてありがとう。君に助けられた「僕」の分も礼を言うよ。そして今、現れてくれてありがとう。僕に

捕まってくれてありがとう。僕の守護天使ありす」
ウワンコウ

目線を合わせて決してそらすことを許さない、力強い碧の瞳。

魅入られるように取り込まれて、気がついたときはもう遅いのだ。

あたしは、異世界に囚われた。

散々助けてあげた、金髪わんこ天使の手によって。

「・・・ねえ、これはずしていいかな？　どうも、こっちの世界のものを身につけてると帰れないみたいなの」

ずるずると、わんこ天使に引きづられ歩きながら、ぎゅうつと目を閉じてはぱちつと開くのを繰り返し続けた。

気が遠くなるあの感じがやってこない。

血の気が引いていくのを感じた。

「これが帰るのを邪魔してるみたいなの・・・その、プレゼントはありがたいんだけど」

「また消えるんでしょう？　だからいやです」

・・・やっぱ、こいつだ。

たぶん、プレゼントのつもりなんだろうけど、でも女性へのプレゼントに首輪はないと思うよ。わんこ天使、お姉さんは君の将来が心配だよ。

原因がわかったから、金髪天使に外すよう懇願するも、却下された。

「んー・・・プレゼントはありがたいんだけど、あたしにも生活があるから、」

なるべく穏便に済ませたかったのになー・・・。
身に染み付いたもったいない精神が、首輪といえども無理やり外すのはご法度と言っている。

でも、あっちでなれた金具の類が指で探ってもわかんないんだ。
きっと目の前の子供しか外し方を知らない事実。

「仕方ない、な・・・。ごめんね、ちゃんと直すから、許してね？」

・・・もって帰れるとは限らないけど、誠意は示した。
おし。

首にはめられた首輪を両手で引きちぎろうと引っ張った。
トリップしたときは、怪力が約束されていたから、こんなの、簡単に引きちぎれて・・・引きちぎれるはずで・・・引きちぎられるべきで・・・。

あれ。

あれ。

くす、と金髪天使の口元が可憐に微笑んだ。

「・・・は・・・外れない・・・」

思わず愕然としてしまった。

そのまま金髪天使を見上げて、はめたのがこの子なら、外せるだろうと詰め寄るも・・・。

「やだ」

一刀両断。

ああ、金髪天使はすねても天使。
なんてほんわかしてる場合じゃない！

「・・・助けてあげたのに、この仕打ちは、なんででしょー？」
えーと。今なら怒らないで許してあげる。おねえさんは懐が広いのだ！

・・・でも、金髪天使はつんと明後日に向いたまま。

「もしもーし」

だんだんと焦りが出てきた。

外してよ、帰らないと大変なことになるんだよ？

おもに、内申書がずたずたのぼろぼろに・・・のおおおおお！

「・・・君が「僕」を助けてくれたからだよ、あります。ちゃんとお礼を言いたいし、御礼をしたいんだ」
怪しく光る碧の瞳。

「いつもいつも、君は消えてしまうからね・・・。消えてしまつたら、御礼が出来ないだろう？」
おぞぞ、と背中に悪寒が走った。

「・・・か・・・帰るー!」

往生際悪く言い募るも、いつもの気が遠くなる感じがやってこない。

絶対この首輪のせいだ。

この金髪わんこ天使がなんかしたんだ。

今までだって、危険と隣り合わせのとりっぷだったのに、戦い以上になんだか、こう、じわじわと、ヤバイわなに嵌った感じがよぎるのは何故でしょ・・・?

しーかーもー。

怪力が約束されていたのに、今じゃすっかり元の女子中学生並みの腕力だ。

金髪のわんこ天使の腕すら振りほどけない。

ずーるずるずる。

首輪に続く縄引く金髪天使は、良い笑顔であたしを引っ張って歩く。

「それに・・・こうでもしないと、またいなくなっちゃうだろう?」

消えたら最後、出会えないなんて愚は冒したくないんだ。

そう呟いて小首を傾げて笑う少年は、イッチャウくらいに可愛かった。

・・・もー、ヘンな事を言う子だ。

こうして何度も会ってるじゃないか。

あたしの世界では、そりゃ、三年は経ってるけど、わんこ天使を

見る限りじゃ、こっちだってそんなに時間経ってないでしょー・・・？

そう言ったら、金髪碧眼のわんこ天使は淡く笑った。

なにがこんなにわんこ天使を歪ませたのかな。

あれかな、刺客に襲われてばかりで疑心暗鬼になってるんだな、きつと。

信じられるのはあたしだけ！　ってな感じに。

だから、まー・・・仕方ないかなー・・・。そんなに時間にタイムラグは無いみたいだし、わんこに付き合っただけで説得して、納得させて首輪を外して貰えば良いかー・・・。

金髪の、わんこ天使には笑っていて欲しいもん。

しかたない。

お姉ちゃんが一肌脱いでやろーっと！

そんな風に考えた。

・・・後でもろ肌脱がされるなんて思いもせず。

・・・えーと。

・・・ええと、こういう時はなんて言うんだっけ・・・？

ああ、そうだ、あいた口がふさがんない、だ。

文字通りぱっかり口をあけた間抜けな顔を晒してしまった。

なのに、誰もそれを見咎めるものはいないようだ。

無礼者め！　とか言いそうな壁に張り付いてる兵士の皆さんも、固まっている。

金髪のわんこ天使に拉致・・・連れられ（引きずられ？）赴いた先は、わんこ天使に良く似合うこれまた絢爛豪華なお城の一角。

石造りの堅固な城門が、大きく開かれ、意気揚々と入城していくわんこ天使。・・・と引きずられていく一般人。

あたしをかわいそうな目で見るくらいなら、子供の情操教育に力を入れろ！

他人を信じられなくなった金髪天使を改心させなさい！

それよりも、見ていくくらいなら、誰かあたしを助けなさい！

ずるずると引きずられていくあたしの背後で、みんな驚いた顔で囁きあった。

「ウワンコッ守護天使が、現れた！」と。

「くっくっ・・・あたしは、わんこじゃないっ！」

首輪されてても、人間だー！

と、連れられる間、左右に突っ込んで、気がついたら、場内の大広間に連行された。

金髪天使に促され顔を上げ・・・。。。

ただいまも絶賛、絶句中であります。ぱっかりあいた口を誰も見咎めてくれなかった。後で気がついて顔面から火噴いたよ。

そろいも揃った金髪碧眼天使たち。・・・ただし、老若男女、大中小揃ってます。

はめられた（もじどおり）首輪のおかげか言葉がわかるのは良いけど、人間の尊厳って奴が警告音を出し続けている。

それすらも一時忘れることが出来るほどの衝撃だった。

「ありす！」

最初に、玉座に座る、たぶん昔金髪だったんだろうなーな感じの白髪の麗しのおじいさまが叫んだ。

玉座の肘掛にがっと手を置いて、身を起こす。

その驚愕の眼差しは、碧。

「・・・は？」

何故、名前を知ってるのですか・・・？　こてんと首をかしげ多分王様を見上げた。

「あります！」

玉座から一步下がった場所に立っていたがっちりマッチョな、おじ様が叫んだ。

蓄えられた髭は髪と同じく、白いものが混ざる色あせた金。

見開かれた瞳は碧。

「・・・はい」

あれ、これ、なんかやばくね？　こんな返事で良いのか、あたし？

「あります！」

「あります！」

「あります！」

玉座から一步ずつ遠のく位置に立つ、金髪どもが叫びだした。

どっしりした風格の、玉座に座るおじいさんに似ている男性。

繊細な美しさを持つ、背の高い美人。

玉座に一步下がった場に立つ叔父さんと似ているマッチョな武人。でもみんな、どことなく似ている。目じりとか、鼻筋とか、眉毛とか。

「は・・・はい。はいっ。はい！」

あ、いかん、いかん、ちゃんと返事をせねば！

「あります！」

・・・叫んだ中には女の人もいた。

きっちり結い上げた金髪は、ストイックな印象を与える金髪美女だった。

「・・・はい」

正直戸惑っていた。

でも、あちこちから感極まったように名前を呼ばれるんだ。

返事をしないわけにはいかないでしょう？

呼ばれる度、名を呼んだ人に目線を合わせると、・・・みんな、泣きそうな顔で、顔をくしゃりと歪めた。

ますます持って、なぞだ。

わんこ少年が家族にあたしのことを話していたって事かな・・・？

「あります！」

わんこ少年より二つ三つ大きい、金髪のお兄ちゃんが最後にあたしの名を叫んだ。

「はいっ！」

わかった。解ったからそんな必死にあたしを呼ばないで。

。。
なんか気が遠くなるから、そろそろ合唱やめてくんないかなー・・・。

年齢各種。

身長各種。

髪型各種。

性別各種取り揃えた、金髪美人が、びっくりした顔でこっちを見ていた。

・・・びっくりする権利はあたしにこそあると思う。

すげーな、遺伝子。

生命の神秘、ここに極まる。

・・・どうしたらこんなに、美形な金髪碧眼を大量製造できるんだろー・

ありすインワンダーランドはマツチヨばかり（前書き）

誰のせいって・・・ねえ。

ありすインワンダーランドはマツチョばかり

さて皆様お立会い。

あたしは三年間、ずっとこれは小旅行だしょうりょこうと思っていた。

旅行先が異世界なのが問題なだけで、言葉も風景も食習慣さえ違う国は、世界中どこにでもある。

同じ日本の中でだって、北と南じゃ言葉も生活習慣も風習さえも違うでしょー？

だから、見知らぬ異国の日常を垣間見て（・・・たとえばそれがものすごくバイオレンスだったとしても）

異国の人と片言でお話をして、意思疎通を楽しんで（・・・それが有無を言わせぬ格闘技ボディートークだったとしても。死んでくれ！嫌だ！な感じで荒みきってたととしても）

街角を散策して、その国の風を肌で感じるのが、実は楽しかった（・・・わんこ天使と一歩二歩よろよろ歩くだけだったり、抱えあげて走り抜けるだったけどさー・・・）

出会う刺客の皆さんは、血走った目であたしを見たけど、その衣装たるやもう！

中世のがっちりマツチョな騎士様（血染めの剣付き）や、ボンネットかぶった淑女（毒塗りナイフ添え）や、レースフリルで飾られたメイド服に身を包んだ可愛い娘さん（実は暗殺者）が沢山なんだ

よ！

まさしく目の保養！ 萌えいなか！

山中に放り出された時だって、見慣れない樹木のもたらす香りと風の心地よさに異国情緒を感じたし、室内にとりつぶした時なんか、もう、もう、至福だったね！

たっぷりとしたカーテンの見事なドレープ（ところどころに血痕あり）、陰影も麗しのアールデコな調度品（の前に蹲って呻いている暗殺者の皆さん）、精緻に織られたじゅうたんの見事さ（吸い込んだ血潮で湿ってた）は、まさしく博物館か美術館収蔵物。

この世の贅を極めてるけど、一本筋の通った品があってね、決してけばけしくないの。

これぞブルジョワ。その場に立って、その空気を吸える幸せ。

・・・一瞬だけだね。

一瞬だってわかってたから、すぐに現実に戻るってわかってたから、目の前の現象を片付ける事に集中できた。

時折訪れる小旅行。それ以上のことはないんだ。

それだけで良かったんだよ！

「ええと・・・えええと」

目の前には、一段上の玉座から身を乗り出したまま感極まって泣いている、白髪のおじいさん。

・・・なんか、この国の一番偉い人っぽい・・・？

「あり、す。ありす・・・」

ひゅうひゅう言いながら手を伸ばして来る。

あたしに向けて伸ばしているその手。

・・・なあんか、いやあな予感がするんだけど。

すると、金髪天使ががちりホールドしてきた。あれよね、お気に入りのおもちゃを取られまいと必死な子供。

けどさ、あたし今、非力なんだよね・・・。

「あり、す？」

「ありす？ どうしたんだい？」

玉座の老人と、玉座の脇のナイスミドルなおじ様が、なんで振りほどかないのかという顔で、あたしを見たんだ。

・・・ふうん。

あたしの怪力知ってるのね？ わあ、ますますもって、まずい。

「ありすは僕のもんです」

金髪天使がホールドしたまま玉座を見上げて言い放った。

「え」

「ジン！ おまえ、」

背後に立つ誰かが警告した。

足元でまつわりついてた金髪わんこ天使が、ちっと舌打ちしたようだけど、えええー、空耳だよねえ？

なんか、周りから、すげーガン見されて・・・いや、見てるのは金髪わんこだ。

みんな、この子を見ている。

厳しい目で、見ている。

「ジン。ありすがつけているのは、拘束の環だな。外しなさい、可愛そうに」

壇上の、王様の後ろに立つおじ様がそう言った。

拘束の環って、この首輪のこと？

「嫌です。これを外したら、ありすがいなくなっちゃうんですよ？」

「それでも、だ。王家の守護精霊を隷属の首輪で繋ぐなど！」

「いなくなつて、出会えるかどうか分からないまま、無為に過ごすのはごめんです」

「ありすは、我らの守護天使だ！」

「いいえ」

金髪わんこ・・・ジンと呼ばれた少年が碧の瞳を細めて笑った。

「ありすは、僕のものです」

・・・。。。

ええ、と。

推定十歳児に、僕のもの認定されてしまったよー。

あは、あははは、と乾いた笑いが口をついて出た。

あーもー、笑うしかないな、これは。笑うしかないよ、ここは。

笑ってごまかせ！

乾いた笑いを張り付け、さあ、どうしようかなーと逡巡していたら。

ぎらぎらした碧を怒らせて、その場にいた成人金髪天使の一人がわんこ少年を睨みつけた。

「たいした度胸だな、ジン！　ありすは、あのありすだぞ！　あの時わたしを救うため、なみいる敵兵の中を駆け抜けた、戦女神だ！」

・・・わー・・・戦女神に昇格したー・・・。

「お前だけじゃない！　俺を助けてくれたときは、刺客を完膚な

きまでぼこぼこにしてくれたぞ！ 目を見張るほどの腕力と脚力！ あれを見て自分の貧弱さに泣けてきたんだ！ いまの俺がここに あるのは、ありすのおかげだぞ！」

筋肉マッチョにあこがられる女子中学生・・・なんか、終わった感じがする・・・主に、女の子としての存在価値が。

「まあ！ わたくしの時は、攫われて手箆めにされなかったところ、さっそうと現れたありす姉さまが、わたくしを救い出してくれましたのよ！ 素敵でしたわ！ ありすねえさまは、わたくしを軽々と抱き上げて下さって、一緒に逃げてくれましたの。飛ぶように変わる景色、時折追いついた追っ手を容赦なくけり倒した雄雄しいお姿！ かわいらしくいらっしやるのに、信じられないくらいお強くて・・・あれからむさくるしい男の下になど嫁ぐ気が失せましたわ！」

わー・・・妹属性のレズっこ製作してたー・・・。

「わたくしの時は！」

「何を！ 俺のときはな！」

「黙れ、私を背にかばいつつ、漆黒の闇の中を駆け抜けたあの脚力！」

「群がる敵兵をちぎっては投げ、ちぎっては投げ、振り下ろされた刀を素手で・・・」

えー・・・えええー・・・。

そりゃあね金髪天使を助けるために、敵をふるぼっこにしたとも。 なんとって怪力が約束されてたから、最初恐る恐るだったのが、 回を重ねるうちに吹っ切れて、ムーンサルトも真っ青な月面宙返り

をしながら、華麗に敵をけり倒したさ。

「相手の獲物を奪い取り、まるで、お手玉をするように弄んで、敵にお返ししてくれた！」

ああ、それもやったな！。

敵の武器を見よう見真似で振り回して、金髪わんこと逃げたとも！武器をお手玉なんて序の口だったさ！

「・・・なにをつ！ 私を救おうとありすは、あの華奢なからだからは考えられない力を発揮して、相手兵士を三人、お手玉よろ、」

「いやああああああっ！ それは言っちゃだめえええっ！」

イメージが！

あたしの可憐なイメージ（いや、ない）ってもんが！

筋肉だるまを文字通り手玉にとっていたなんて（本当のこと）言っちゃだめー！

穴！ 穴はどこっ！ 穴に入って耳をふさいで恥ずかしい出来事が過ぎ去るまで出てきたくないっ！

「ありす、ありす、どうしたの？」

金髪わんこ天使が、あたしの前で、妙におろおろしていた。

声をかけられても見ざる聞かざるで、うずくまり・・・、気がついたら小一時間が過ぎてました！

「ありす、ありすう・・・」

ふと、顔を上げると、金髪わんこが今にも泣きそうな顔であたしを覗き込んでいた。

うわ、可愛い顔が台無しじゃん。

「・・・これ外してくれたら許したげる」

「やだ」

・・・くそ。

敵は頑固だ。

あたしは長期戦になることを、覚悟、した。

ありすインワンダーランドは大騒ぎ

うふ。うふふふ。

遠い目になっちゃうな。

よみがえるのは数々の功績（悪行？）

筋肉だるまを退治するため「しょーりゅー〇！」とか、「〇斗ひやくれつ拳！」とか言いながら大技披露したもんなー・・・。

やってみたかったアクロバティックな大技が決まると、こう・・・なんていうか・・・達成感？

やり遂げた感じが沸きあがって、ものすごく、きもちよかったんだよねー。

両手ついてさ、開脚した足で四方を固めたマツチヨ剣士を倒したこともあったなー・・・。「旋〇脚」だっけ？ あれはなかなかの出来だった・・・目が回ってよろよろしたけど。

オーバーヘッドで、投石してきた大岩を蹴り返したこともあったっけなー・・・。

肉弾戦の一方、直接打撃系じゃない技も試してみた。離れている相手に有効なら嬉しいもんな。

でも、「かめ〇め波っ！」ってやってみて、ぽす☆とも、ぽす☆とも言わない完全空振りだったのには、苦笑いしたっけなー・・・。

ああ、この力は肉弾戦じゃないと通用しないんだなーって分かつ

てから、気功技は封印した。

・・・トリップする度、わんこ天使の護衛の皆さんは、あらかた敵方に倒されてて、そりゃ、もうはじめは、頭が真っ白になった。

あたしだって女の端くれだ。血だって一月に一回は見てる。でもでも、あんな殺伐とした現場は体験したことない。当たり前だ、普通の中学生は、戦わない！

幻想か、現実か、分からないけど血なんか、見たくないんだ。

これ以上滴るものや迸るものは見たくないし、ちっちゃい子に見せたくないから、天使抱えて逃げたさ。

それでも追ってくる相手は、渾身の一撃で昏倒させて回った。

自分の怪力考えると、過剰防衛かもしれないよ？

でもね、できれば気絶したまま、起き上がらないでほしい。

追いかけてきて、剣を振り回さないでほしい。

・・・そのむき出しの剣、あたったら怪我するだろうが！ 花の乙女に傷残す気か！ そっちからかかってきたんだ。しかも女子供だと思って、優越感に満ちた目で、ねずみを甚振るつもりでいたんだろう！

だから、殴り倒すときは、起き上がるなと祈りをこめて。

蹴り倒すときは、再起不能になあれと願いをこめて。

金髪天使を脇に抱え、殴り倒し蹴り倒し踏み倒しながら、人気のないところを探して走った。

何より、生きるために。

腕に抱えた暖かなぬくもりを、一刻も早く安全な場所に送ってやりたかった。

一時のショートとりっぷで出会った金髪天使。

彼を守り抜く事が、唯一の使命で、唯一の帰る道。

だから、脇目もふらずがんばって戦場を駆け抜けたさ。

それが・・・金髪のわんこ天使は実は一人じゃなかったという、この、事実。

今じゃすっかりあたしより成長しきった（身長も肩幅も、胸も腰も、太腿も）美人や、洪めの無骨なおっさんや、お髭がナイスなアールグレイのおじさま達。

極めつけは王様も。

こんなに、助けてたなんて、知らなかったよ・・・。

「金髪わんこは一人じゃなかったんだねー・・・」

まあ、いつもすぐに帰還してたからなー・・・。お互い名を尋ねることもできないことが多かったのに、いつも「ありす！」って金髪わんこに名前を呼んでもらってたつけー・・・。

そうか。おんなじ顔にしか見えなかったから、なんとも思わず同一人物だと思ってたけど。

・・・上目遣いで成長した金髪わんこ達を見上げた。

・・・ああ・・・。

なんだか、じんわりと喜びがこみ上げてくる。

だって、さ。

この子たち（おっさんだったり、おじ様だったり、おねえさまだったりするけど）は、あたしが助けた命なんだ。

あたしは、金髪わんこをちゃんと助けられたんだ。だって、生きてこんなに大きくなってくれてるんだよ！　あたしの胸にも達しなかった小さな小さなわんこ天使が。

こんなに、大きくなってここにいる！

「・・・そっか。よかった。みんな無事だったんだねー」

とたんに周りにいた彼らが、真っ赤な顔をして焦りだし、口々にそれぞれの「危機」の礼を言い出した。

・・・いや、だからその、ぐ・・・具体的な描写はいい！

どこでどのように助け出されて、あたしがどのように敵を倒したかは、もういいから！

・・・これを外せばきつと帰れるのは間違いない。まあ、こっちで長居した分、時間はたっているだろう。

向こうで寝てるはずの自分の体が少し心配になった。

心優しい、けれどお茶目なクラスメートの面々を思い浮かべる。はじめやさしく揺り動かし、その内がつくんがつくん体を揺らし、平手打ちを五往復食らわせて、それでも起きないあたしを前にしたら、みんなはどうするだろう・・・？ みんな、みんな・・・。

「・・・ひ・・・ひたいに肉とかやだからね！」

がばつと顔を上げて虚空に叫んだ。

やりそうだ。

イヤミのとんがりひげとか、ほっぺにぐるぐるとか、閉じたまぶたにパッチリ目とかあ！ あたしのクラスメートの面々なら、笑ってすごくやりそうだああ！

うわあん、早く帰らなきゃ！

首輪外して急いで現実に戻って・・・乙女としての何かを守り抜くために！

・・・そうよ。

わんこ天使が嫌がっても、ジン以外の金髪天使に頼んで、外してもらえばいいじゃん、軽く考えていた。

・・・ああ・・・甘かったなー・・・。

「・・・申し訳ない、あります。それは、その手で嵌めた者しか、外せないんです」

・・・・・・マジですか。

「・・・ジ・・・ジン！　　ありますが困ってるだろう、外しなさい！」

「いやだ！」

金髪わんこはますますあたしにすがり付き、ぎゅううううと腕に

力を入れてくる。

「ありす、ありすう・・・やっと会えたのに、消えちゃうなんていやだ・・・」

すがりつくわんこは可愛い。

はた迷惑なまでに可愛い。

でもだめだ、甘やかしてはいけない！心を鬼にするのよ、あります！ 幼児教育は早期教育！

だめなことはだめだって、今教えなくちゃこの子はいつ覚えるの！すうっと息を吸って、一喝して終わらせようとしたあたしに。

「・・・外したら消えてしまうのだろうか？ ならば、せめてわたしが死ぬ少しの間だけでも、ここにいてくれはせんだろうか・・・」

ごほごほ咳き込みながら、息も絶え絶えな様子でじいちゃんが懇願してきた。

こ、これは・・・困った。

こんな高度な精神攻撃、あたしに回避する能力があるとお思いか！しかも畳み掛けるように「・・・王はもう長くはないのです」と来たもんだ。

「王は、死ぬ前に一度で良いからあなたに会いたいと仰っていたんだ、ありす。どうか、その気持ちを汲んでやってはもらえまいか」

筋肉マッチョな過去天使、今、ヒグマの武官さんが懇願してきた。
流されるな、ありす！

「ありす・・・」

「ねえ、ありす・・・」

「おねがいです、ありす、」

ふ。ふふふ。ふふふふふ。

・・・さて皆様、質問です。

ここまで懇願されて、断れる・・・？

感情じゃ分かってる。

有無を言わず帰るべきだし、帰らなきゃあたしが偉い目にあうんだ。主にお笑い系の何かを寝てる体に施されて、乙女としての何かを失っていくのよ。

でも、ね、断ることはできないことも知っていた。

白髪のご老人は、玉座に腰掛たままあたしを凝視しているままだ。

潤んだ瞳に見つめられて、手を差し伸べられて。

その手がプルプルと小刻みに震えているんだよ？・・・握りしめずにいられよか。

がしっと手を掴んで、両手で包み込んでしまったよ。

そしたらさ。

「ほん、もの、だ・・・」

小さく呟いた声。しわの深い顔の中、落ち窪んだ碧のまなざしが、歓喜で揺れていた。

かさついた唇が一度二度動いて、声を絞り出すように発した。

「・・・あい・・・あい、たかった・・・。わたしの、ウワンコウ」

・・・いや、あたしわんこじゃないし、にんげんだものー。

「あなたに助けてもらったあの時、名前も名乗れず、すぐにあなたは消えてしまったから・・・ずっと、夢だったのだ、と。あれは、わたしの願望に過ぎないと、思ってた・・・」

・・・そだね。いきなりトリップして、いきなり戻されるあたしを、金髪天使は目の前にするんだ。

急に現れて、息つく暇もない内消えてしまうんだ。

幻。夢。正気を疑ったって仕方がないくらいだろう。

・・・あやしいよねー・・・。あたしったら、存在があやしすぎるー。

王様にとって感動のご対面らしいのは肌にびんびん感じます。

しかし・・・周りにいる筋肉マッチョな美形がそれぞれ泣いているのは、どーしたもんかなー・・・。

なんか、もー、周りのウンウンなんでもわかってますよって感じの良い雰囲気、どう受け答えれば良いの・・・？

と、言うより何より。

ぶっちゃけたところ。

「・・・ファーストコンタクトから、今って、その・・・何年たってるの・・・？」

・・・あたしったら、気分はすっかり、浦島太郎よ。

ありすインワンダーランドで昔語り

「あれから、か・・・そうだな、ざっと七十年、近いかな」

白髪のおじいさんが、遠いまなざしをしながら呟いた。

「・・・ほへ？」

七十年。

紡がれた言葉に、あたしは一瞬目を瞬かせた。

え、七十年？ 七十年も、ファーストコンタクトから経ってるってこと？ 元の世界じゃ三年だったのに、七十年！

「そ、んなに？」

気の抜けたような声しか出せなかった。だって、七十年って、七十年って・・・。

「その間、いろいろあった。ありすぎるほどに」

おじいさんは懐かしそうに目を細めてあたしを見つめていた。

「・・・君を探した。探しても見つからず、夢だったのだと、都合のいい夢だったのだと言いついて聞かせて日々をすごしたものだ。・・・あの頃、先の王が悪政をしいたおかげで、民はずいぶんと辛酸をなめていて、私の父は・・・その王の腹違いの兄だった。父は王を諫めようと、ずいぶん駆け回ったものだ。だが、弟を思う戒めの言葉

も、すべてが疑心暗鬼の元となった。・・・謀反など企てるはずもない、実直な人だったのに・・・その人となり、却ってあだになった。・・・父を推す声が高まるに連れ、家族そろって暗殺されかけて・・・。獣のように追い立てられて、山中に逃げ込んだ。たったひとりで、追っ手と向き合って、ここで死ぬのかと思ったとき、君が現れた」

碧眼があたしをまるでまぶしい物を見るように細められた。

「・・・黒髪の、私より少しだけ年上の少女が、剣を持った相手に一歩もひるまず、私をかばって戦ってくれたのだ。

長い黒髪が翻り、踊っているようだった。黒い瞳は怒りに燃え、宝石のようだった。

その姿があまりに美しくて、伝えに聞いた王家の守護天使のようだと思ったものだ。助かってから、あなたを思い返すたびその思いが強くなった。守護天使は、王を見放したのではないか、と」

・・・父もあなたに会いたがっていたな。夢物語が好きな人で、守護天使の話をしてくれたのも父だった。

・・・何度も思い返した。夢だとしても、あなたに会いたくて。

・・・もう一度会いたくて。

「・・・だから、逃げ延びた先で周囲に王家の守護天使は父エンダールウワンコウを支持したと伝えた。その頃には最早叔父の名は地に落ちていたからな。簡単に蜂起することができた」

・・・しみりした良い雰囲気だったけど、なんかきな臭いものを感じたぞ（汗）、おじいちゃん、待ってくれ！

「日々の鍛錬は最早生きる術となった。刀を恐れず、身一つになっても戦えるように、自分を鍛え上げた。・・・命知らずのエンダールと呼ばれたものだ・・・ただ、あなたのようになりたかっただけなのに」

ふふ、とおじいちゃんが笑った。

あたしの背中を冷や汗が伝っていった。い、命知らずって・・・あたし、命放棄してないもん！ 肉弾戦だって生きるためにやったんだもん！

「愚かだろう？ 激戦の只中へ自分を追いやった。窮地に陥れば、また」

息をついて、碧の瞳があたしの瞳を覗き込んだ。

「君に、会えるのではないかと・・・思っていた」

息が、止まるかと思った。

「・・・でも、あなたはこなかった」

おじいさんはまた微笑んで。

「戦に明け暮れた血まみれの私の前には、天使は現れないのだと思いい知っただけだった。だが私には掛け替えのない仲間が出来た。背中を預けられる相棒と、知略を持った友人と、この国の民たちが。彼らと手を携えて、国をひっくり返した。・・・あの男に踏みこじられた尊厳を、取り戻すために、この国を生まれ変わらせるために」

途方もない時間と血が流れたんだろう。でも、静かに微笑むおじいさんからは、過去を振り返り後悔する気持ちは伝わってこない。

ただ、革命をやり遂げた男の、揺るがない自信だけが伺える。

「・・・じゃあ、平和になったんなら、何であたしが呼ばれたの？」
小首を傾げて聞いてみる。だってそうでしょ？ 悪い王様を倒して、苦しんでた人たちが解放されて、メデタシ、メデタシなんじゃないの？

そう。

それなら、はじめの小旅行だけで、二度、三度と続かなくても、いいよね？

「あれは、ありすと会ってから、四十年経ったくらいだったか・・・？ 初恋の人に良く似た妻をもらい、子にも恵まれた。・・・長男と次男は亡くなってしまったが、」

白髪のおじいさんが後ろに立つ、アールグレイでナイスミドルなおじさまに目線を投げた。

渋いおじ様はおじいさんの言葉に深く頷いた。

「父王が即位しておよそ六、七年目頃だったかと思います。先の愚王の息子が、隣国の援助を受けて蜂起しました。我が父を篡奪者呼ばわりした、浅慮極まりない仕掛け戦でしたが・・・兄達は、毒牙にかかりました」

渋めのナイスミドルな叔父様は、おじいちゃんの息子さんなのか。

「血筋を絶やせば、王権復古が叶うと思っていたようだ。隣国はともかく、国内にあの者を推挙する動きなどなかったのに、な」

おじいちゃんが、苦さを残す笑顔を見せた。

「歴史が認める禅譲に、噛み付いたのです。エンダール王朝を費やしてやるとばかりに、兄王子が狙われ始めて」

悲しそうに叔父様が目を伏せた。

「・・・子らには、すまないことをした」

あの時、根絶やしにしておけば、こんな結末にならなかっただろうに。と、おじいちゃんが呟いた。

「・・・ですが、おかげでありすに会えました」

そういつて、渋いおっさんがあたしの前でひざまずいた。制服のチエックのスカートのすそをうやうやしく持って、そっと唇を寄せた。

「追い込まれて、逃げ回っていた私の前に、ありすが舞い降りてくれたのです。・・・守護天使。あの時、伝えられなかった思いを込めて・・・感謝しています。ありす。あなたがいたから私は生きている」

・・・ああ、目を閉じれば今だって浮かびます。

突然空から現れたあなたが、襲撃者の頭を、みごと踏みつけ、ふみ倒したあの勇姿を！

「・・・そこは忘れましょう！」

むしろ覚えてちゃいけないっ！

「・・・おや？　ありすはあの出会いを運命とは感じてくれなかったのですか・・・？　わたしは、あなたの勇姿に、運命を感じましたのに！　父に私を助けてくれた天使の話あなたをしたら、それは間違いなく、守護天使ウランコウありすだと寡黙な父が叫びましたよ。あれから、あなたを何度夢に描いたことか・・・！」

だからあたしはわんこじゃない！　人の話を聞け！

「あなたの白いシャツ！　青いショートパンツ！　胸には大きく呪文が描かれ、たなびく黒髪、黒い瞳！　私を害さんと群がっていた敵兵を一步も引かずに殴り飛ばしたあの勇姿！」

汗で、シャツが体に張り付いて、すけた肌の色の色っぽかったこと！　すらりと伸びた素足の艶めかしかった事！・・・幼心にドキドキしました！

・・・襲われてたつてのに、余裕だな、おじさま。一気に張り詰めていたものが、抜けていったぞ。

・・・ああ、うん。体育の時間だったから、学校指定の運動着だなー。胸にはでっかいゼッケンで日佐川って書かれてるんだ。見ようによっちゃ、呪文だな、まさしく。

しかし、渋めおっさんに変化した、もと金髪天使は、変な方向に特化したようだ。

・・・あれか、おっさん（叔父様格下げ）、体操着フェチか？

「それは少し見たかったな。だが、子供にしか姿を現さないとわかって、実に悔し・・・いや、悲しかった」

・・・言い直したぞ。しかも回りみんなスルーですか？

「・・・私の時は奇妙な服を着込んでいたぞ。その不思議な呪文の服といい、スカート丈がいやに短いのは、天使の制服だからだろう？　そう思い至ってから、天使の肖像を描きかえさせた」

・・・は・・・？

「だれぞ緞帳を」

背後の緞帳があがっていく。

重厚な金の額縁に納められたのは絵画。よくある宗教画なんだけど、決定的に違うものがあつた。

「な・・・なんじゃこりゃあああああっ！！！！」

一人の天使が剣を悪魔の顔の脇に突き立てていた。

見間違いだとおもいたいが、あれはあれは・・・。

「あ、たし・・・」

ありすインワンダーランドで昔語り（後書き）

顎がかくーんと落ちきっている模様。

ありすインワンダーランドで守護天使ごっこ

青い空、戦に踏みにじられて赤い大地。うずくまり嘆く人、絶望する人。

雲がたなびき、土煙があがる中、悪の象徴として描かれている大柄の・・・たぶん悪魔（・・・角があるのさー）

・・・その悪魔と対峙している一人の少女が毅然と顔を上げてこちらを見ていた。髪の一筋まで詳細に描きこまれている。

それは、天使と悪魔の黙示録。

青空に映える、紺色の軍服、翻る紺色のチェックのスカート。右手に剣、左手に旗。

紺色の軍服ブレザーにはところどころに金糸銀糸がちりばめられて、ぱっと見、制服だなんてわからない。

実際あたしだって良く見なきゃわかんなかった。

どっかで見たような（毎朝鏡で見てるわぁっ！）平凡な顔立ちの少女が、センター張ってるんだよ、AKBもまっさおだね！

その少女が悪魔を見据えて長剣を突き立てているんだ。

踏みつけられてる（・・・）悪魔は哀れなくらい怯えきった目で黒髪の少女を見上げてる。

見覚えのある顔の少女は、羽はしよってないけど、後光が射していた。

ふるり。

ふる、ふるる。

背中をむずがゆいものが走り抜けていく。だって、後光だよ!?

なにこれ、なにあれ、ありえねええええええ!!

「・・・は、あうう・・・」

胸の中渦巻く言葉は、がんばっても声にならなかった。

この勘違い天使どもをどうにかしないと・・・主に「あたし」の精神構造がやばいことになる。

あたしのノーマル平坦な日本人顔がかなり美化されていた絵画を見上げた。

「・・・う、あはああ・・・」

・・・良くぞ、ここまで妄想したもんだ。

でも、褒めてなんかやんないぞ!

あたしはあんなに妖艶に笑ったりしないし、何より、制服の胸ボタンはち切れそうなほど胸盛ってない。

よく見なさいよ、どこにあんなたわわなものが存在するの?

ないとは言わないけど、あんなチョモランマじゃないもん。う、う、う・・・悔しくなんか、ないもん！

・・・それから最後にもうひとつ。

絵師様は、むっちりした女性がお好みなんだね、胸も腰もぼんきゅっぽんがお好みなんだろうよ。

しかも限定むっちりした腰から尻、太ももにかけての稜線がベストと思っっているむっつりに違いない！

だがしかし、それはそれ！ 何でさ、何で顔や胸は美化してるのに、足の太さはそのままなんだよ・・・！

真珠の粉をはいたような色彩の、むき出しの太ももは、ほのかに朱が乗せられていてとてもきれいだっただけどさ、どうしてもっと美化修正されてないの？ 色塗る前になんかあるだろ、あるはずだろ、ほかに！

それこそ作者権限発揮して、チョモランマ妄想する前に、小鹿のバシバシ妄想しろよおおっ！

「良く描けてるだろう？」

ニコニコと朗らかなおじいちゃんを恨みがましく見上げた。

「・・・あります？」

じつとりと辛気臭い顔で見つめてやれば、おっさんが、少し引いた。

「おや？ 実にいい出来だと思っていたのだが・・・特に、あの悪魔を踏みつけてる足とか」

すこーんと脳内で小鹿のバンビの後ろ蹴りを食らった気分だった。

・・・・・・元金髪天使、むっつりはあんた達か。

・・・ええと、話題を変えよう。

全力であの絵は見なかったことにするんだ。それで、さっさと首輪外して帰るんだ。

わんこが「捨てないで」とばかりに見上げてくるけど、情に絆されてはいけないのよ、あります！

「えーと、えーと、そ・・・そういえば、おじいちゃん、跡継ぎ沢山いるのに、まだ現役なの？」

玉座にしがみついている様な、権力大好きな俗物には見えないのに。

むしろ足が洗えるなど喜んで王座を明け渡しそうだ。

八十近いのよね？ 隠居してもいい頃よね。
孫やひ孫に囲まれて、円満な老後生活。
レッツエンジョイシルバーらいふ！

「・・・実質、国の実権は、このディノッソが握っているよ」

「人聞きの悪い。傀儡だとも言うつもりですか、」

「ふふ。若い者に任せるのが一番なんだよ。老人は表舞台から去るべきなんだ」

「だが、引きずりおろそうとするやつらが多くてね・・・」

「仕方なく王のままにいるのさ。・・・次期を殺されちゃ叶わんから、指名もしない」

「国璽が、やつらの手にあるんだ。渡せといっても引き下がらなくて。挙句に王位継承順に暗殺されかかった。やつらを炙り出そうと行動しても、臆病なねずみは隣国の神殿の奥深くにもぐりこんで出てこない。・・・しかも出てくるときは狂犬を引き連れて、だ。いい加減いやになるよ」

ほー。ではまだ対立してるんだ？ 相当しぶといんだね。

「ああ。王権の譲渡が出来ずに困っていたんだ。・・・でもありすが現れてくれたから、これでいつでも王位継承式ができる」

「・・・ん？」

ニコニコとうれしそうなおじいちゃんとおっさんふたり。

「王家の守護天使が臨席する式なんて、建国以来初めてだろうなあ、ディノッソ」

「そうですねえ」

おじいちゃんと叔父様の傍目で見ればにこにこと和みのひと時。

しかし、あたしは不穏な空気を感じちゃったぞ。何だ、何だ、この悪寒は！

「やつら、王位継承はありえないと思っているだろうから、くく、慌て様が目に浮かぶようだ」

「まったく！」

「王冠と、王錫は手元にあるし・・・天啓を授ける巫女の役には大神官、審議官・・・これだけ揃えば誰も口が出せなくなる」

「・・・ねえ、ありす。」

目を合わせて微笑むじーちゃんとおっさんから、あたしは必死で目をそらした。

目を合わせるな！

合わせちゃまずい！

なんか、これ以上かかわっちゃ帰れなくなるうう。

「ありす、父は見てのとおりにいつ儂くなっても仕方が無い老人だ。その老人のたつての願いを、どうか受けてやってはくれまいか・・・？」

「・・・ありすに会えた今、私の心残りはこの国の、行く末」

「父上!」

「大叔父上!」

「おじいさま!」

・・・うわ、メロドラマだ。

いつの間にか周りには、元金髪わんこが勢ぞろい。

さめざめと泣く筋肉たるまだったり（にあわねえ）、眉間にしわ寄せる太マツチヨだったり（暑苦しい）、憂いを込めてあたしを見る細マツチヨだったり（捨てられる子犬の目・・・ずきずき）、スレンダーな沈黙の筋肉だったり（そー言えば、さっきから一言も話さないわねあんた）。

・・・筋肉しかないのか、この国あつ!

しかも女性だって、スレンダーな体型をキープするために鍛えているのか、ウエストが恐ろしいほど、くびれてる!

そんな中、厳かに行われた、大家族の中心的人物の病床におけるお願いという名の最終兵器!

「ありす、お願いだ・・・守護天使として、王位継承者に祝福を与えてはくれないか?」

・・・ダメージポイント、計り知れず・・・。

ありすインワンダーランドで守護天使ごっこ（後書き）

おまけ。

・・・いや改めて見返すと実に良く描けとる！ 絵師殿に金一封！
とくにあの、むっちりした足と腰の絶妙なバランスを良く描きき
った！あの時もありすは回し蹴りを敵に食らわせての！惚れ惚れと
したもののじゃ！（じじい・・・）

なんの、叔父上！いとこ殿！ わたくしの一押しは、ありすの、ほ
のかに赤く染まった膝蹴りです！ あの至福の一撃です！ 出来る
ことなら自分で受けてみたかったあの、膝蹴り！ あの時、背後に
守られ、見えそうで見えないスカートの絶対領域に、幼心にはあは
れました！（・・・おやじ・・・）

まあ！ おじいさまったらずるいですわ！ でもでも、わたくしな
んか、ありすねえさまと同衾しましたのよ！（きやつ）とてもいい
香りがしましたの・・・（うっとり）・・・あら。
何を睨んでいますの、ディオったら。

（・・・）

ふん、もう少し言葉にしないと、伝わるものも伝わりませんわよ！
ま、わたくしが美しいのは当たり前ですから、それ以外の贅辞を
お願いしますわね！

（・・・やれやれ）……………ジン、が。

え、？

おや？

うん？

・・・ジン、がありすを連れて行ったぞ。

そ・・・それを早く言いなさいよおおっ！ おねえさま！ あり
すねえさまとのうれしはずかし初めての夜は、^{きやっ}わたくしのものよ！

小娘ごときに同衾させるとでも！？

・・・じ・・・爺の最後の願い・・・（ごーほごーほ）

なんの！われらの切なる願い！

（・・・その前にその筋肉でアウトだと思っ・・・）

ディオオ！言いたいことがあるならはつきり言え！

・・・むつつりすけべ。

ありすインワンダーランドでお食事タイム！

・・・あたしは恨みがましい眼差しで、張本人の旋毛を見つめていた。

金髪天使の将来有望株はジンという名前らしい。

頭二つ分位低いこの子に、半ば引きずられながら、ぐるぐると考えていた。

歴代の金髪わんこはみんな別人で、各種取り揃えた感じの美形の勢ぞろいに、正直開いた口がふさがんなかった。

しかもだ。

何とかが手元にないから、あたしを巻き込んで継承式をやるって言った。まて、この他力本願。

「国璽、だよ。ありす。国の一番重要な印鑑なんだ」

「そうそれ。無くても平気ならさっさと継承すりゃよかったのに」

「ありすがいなきや無理だよ。国璽があっても、出来たかどうか」

暗殺者は、執拗におじいちゃんの身内を狙ったそうだ。つまりは、金髪天使たちを。

「・・・あたしは、ただ力が強いだけの普通の女子中学生だよ」

守護天使と呼ばれるような天使じゃない。

ただ、あたしは、頭に降りかかってきた火の粉を払っただけだ。

「それでも、ありすはやつらに渡った国璽より、影響力がある」

王家の守護天使は、王を補佐し、守護し、祝福を与える存在。子供でも分かる当たり前の御伽噺。

当然だ。

寝物語に毎晩お話されてごらんよ、魂に刻み付けられるね。

そして、それはこの国の人たちにも。

「ありすが居るか居ないかではずいぶん違うんだよ」

金色わんこ天使ジンはそう言って笑った。

「現実にくわして出会えると、感慨もひとしおだよ？ 父や叔父やいとこ殿から、それはもう耳にたこができる位聞かされてきたからね。年が近くなるにつれ、僕の前にだっけいつか現れるかもしれない。本当に空から降りてくるかもしれない、と思っけ。もし、会えたら、捕まえて、一緒に暮らすんだっけと思っけ。見つけたら、離さないっけ」

なんだ、それ。なんだか、妙に背中が寒いんですが。

「その環だっけ、かあさまが作ってくれたんだ。僕が昔、かあさまに、ウワンコウが現れたら、一緒にいたいっけお願いしたの。かあさまは、僕のそばにずっと居れないから、僕を可哀想に思っけ、念を込めた環を作り上げてくれたんだ。かあさまはね、呪いが得意

な魔女だったんだよ」

そーか、魔女ですか。朗らかに暴露してるけど、呪いが得意ってどんな親だ、いったい。そんで誘拐幫助か。ナンテコッタイ。

誰か、止めてくれよ！ 情操教育に悪いじゃないか！ 残念だよ、将来有望株だったのに、大暴落！

そんな言葉を交わしながら、ずるずると引きずられ、連れて行かれた先は、こじんまりとした（さっきの広間よりはね）心地よい空間だった。

長テーブルが置かれてて、いすを引かれて、夢遊病者のようにすっと座った。

ああ、もーなんも考えたくない。

とくにあっちに残された身体がどんな扱いされてるか、考えただけで暗くなった。

意識戻らなかったら、どーしよー……。それよりも、どんないたずら書きされてるんだろー……。 （決定か！？）

・・・正直、疲れていたから、ぐったりと机に顔を預けた。

「ありす、ありす。これおいしいんだよ、はいあーんして？」

全開の笑顔で金髪わんこがフォークに刺したブツを口元に差し出した。

「――だが、断る！」

あたしはフォークをぐっと握り締め、皿上の黄金色のブツにぐっさり突き刺した。

「――はい、いただきます。」

「ありす、ありす、僕があーんってしてあげるのに」

金髪のわんこ天使が眉を下げてあたしを見上げた。可愛い。うん、欲目抜きで可愛いよ、でもこいつ残念だから！
いやだね。

全力でごめんだね。

大体首輪嵌める相手と和やかに食事なんか！ ううう、うらめしそうに見上げるな！ 可愛いじゃないか、こんちくしょー。

天使パワーすげえよ。癒されまくりの乙ゲー路線まっしぐら。乙女の夢だね、間違いなく。

大体ね、こんな状況で、チキンなあたしのピュアハート（ぶふ）が、おとなしく食事なんか受け付けるはずがないでしょう、ええ？ たとえどんなに良い匂いさせていてもだ。彩り良くってもだ。こんがり焼けてておいしそうに誘っていてもだ！

そうさ、こんな、食事なんか、食事なんかあああああっ！・・・
・・・もぐもぐもぐ。

「うぐっ！」

あたしは目をカッと見開いた。わなわなと体中が震えはじめる。

ざわざわと駆け上がる、悪寒。これは……。

「う……旨い」

びっくりした。なんだこれ。なんってうまさだ。あまりの旨さに一瞬違う世界へ飛べたじゃないか！

皿の上のブツは、カスタードクリームを浸み込ませたパンをふわっと揚げてあった。

その食感たるや、さくっ、かりっ、ほわんだ。言葉にならず……ああ！ これ、罨かもしれない！ そうだ、きつと！ 高度な罨！ ……もぐもぐもぐ。

……くうっ！ こんな、こんな、カロリー高そうな、女子に喧嘩売ってんのか、ゴラアな代物を、眼前に晒すとは！ 罨。絶対罨だ！ ……うまうまうま。

金髪わんこジンめっ天使のくせにっ生意気だあ！ ……もぐもぐもぐ。

「ううう、ジャムがまた、ぜ、ぜつみよー」

いやあああ、なにこのスイーツトラップ！ そんで冷たいクリームソース！ 揚げたてほかほかのパンに絡めて食べると、おいしさ万倍！ ……うまうまうま。

はっ！ い、いかん、一瞬、とんでた！

なに嬉々として食ってんのよ、ありす！ いやいや、おいしかったけどね！ おいしいものは正義だけどね！

これで絆されるわけにはいかないのよ！

そうよ！ 気合を入れなさい、ありす！…………もぐもぐもぐ。

うはあっ！ あたしの馬鹿あああああっ！

「気に入った？ じゃあ、もうひとつお勧めを。こっちはね、スパイス詰め込んだ鶏を炭火であぶって、甘辛いたれをかけてあつてね」

はいあーん。

はっ！ 甘い揚げパンにそんなオカズが合うわけないだろ！ 甘辛たれの焼き鳥は、白いご飯にこそ合うんだからっ！

日本人の主食は米よ！ 間違っても甘い揚げパンなんかじゃ、揚げパンなんかじゃ…………もぎゅもぎゅもぎゅ。

「…………あう…………」

いやあああああ、ごめんなさい、白いご飯！ あなたに飽きたわけじゃないの！

ただ、ほんのり甘い揚げパンと、甘辛ソースの焼き鳥って、ベストカップルになれたのねって目からうろこが落ちたのよ。そうそれは、ご飯に漬物お味噌汁で生きてきた日本人には、にわかには信じられない組み合わせだとしても！

ああ、今なら分かる！ 分かるとも！

ビックサイズのアメリカンが、ホットケーキにシロップかけて、
テリヤキチキンとベーコンサラダのトッピングで、山盛りポテトと、
とんでもねーサイズのコーラ持って満面の笑みを見せていた理由が！

合うんだよ！ 甘いのと辛いのが、有りなんだ、うそお！（もぎゅ
もぎゅうまうま）

「こっちはね、野菜の中にスパイスで味付けした米をつめて、ス
ープで煮込んだもので」

うあ、スパイスがなんとなくオリエンタルで、でも米。
もっちり、もちもち。

やはり日本人のソウルフード！ ビバ米！…………もぐもぐ
もぐ。

「…………でも贅沢すぎる。もったいないな、出来立て食べてるの
あたしたちだけじゃない」

ほかの皆さんはどうした。

「んん？ みんなはきつと、今宵誰の居室にありすを迎えるか相
談しているんだと思うよ？ でも、そんなの、僕が許すはずがない
じゃない。だって、ありすは、僕の、」

んんんんん？

金髪わんこ、ジンが鮮やかに笑う。その碧眼に、なんか侮っちゃ
いけない光が浮かんでいたんだけど…………気がついたら、ジンの甲

斐甲斐しいお世話の元、一心不乱にご飯を食べてるあたしがおりました。

――だって・・・だって、おいしいんだもん！

「ありすありす、これもおいしいよ、はいあーん」

にこにこ笑ってジン少年がお皿から一口分フォークに刺して、差し出した。・・・が。

条件反射のように、皿に乗った現物にぐっさりとフォークを突き刺すあたしがいた。

残念そうに眉を寄せ（それでも将来有望株）、その一口を自分の口に入れる。

ちよつと心が痛い、甘やかしはいけない！

ジンのお母さんが甘やかして呪いの首輪を上げちゃうくらいの親ばかなら、なおさら！

甘い顔は見せないぞ！と、誓いも新たにしたら、あたしだった。

だけど。

「このソース、僕が大好きなやつでね、」

「うう。これもおいしー」

「ありす、ありす、ここついてる」

んんー？ どこ？ と、小首をかしげたありすの仕草にふ、と笑った金髪天使ジンが、やらかした。

ちゅっ。

小さな濡れたような音は、後から耳に届くんだ。

唇の端についたソースを舐めとった、ジン少年の唇が、にやりと笑ったのをあたしは、確かに見た。

「・・・へ？」

あれ、なんだ、いまの。
ナンダツタンダ・・・？

「あれ、なんだか、いつもよりおいしい気がする。ありすのおか
げだね」

にこにここと、食事を続けるジン少年に、完全に一步出遅れたあた
しがそこにいた。

「食事が終わったら、今日はもう遅いから、僕の部屋で寝ようね」

「・・・あ、うん」

金髪わんこ。かわいいわんこ。
守らなきゃいけない、あたしの天使。

あれ、でもなんでかな。

どーしてこう、背中がさむいんだろ・・・？

ありすインワンダーランドでセクハラの定義

朝日が差し込んで、瞳をやさしく刺激する。

朝だ。

朝なんだけど・・・。

「あ、ぎゅ、むぎゅ・・・ふがむぐ、うぐう」

あたしは、

・・・圧迫感に負けそうになっていた。

（お・・・起き上がれないっ！）

みごとに固められたあたしは、わずかな隙間から空気を肺に入れることしか出来ずに、もがもがした。

傍目で見れば、まるで断末魔の様相だっただろう。

それぐらい切羽詰ってじたばたした。

なのに、固い拘束を外そうと、手で押しのけようとする。

ふに。って違和感があるんだよ。

（ふに？）

それは、妙に柔らかくて、でも固くって、暖かいの。なんか実に

馴染みのある感触でさー・・・。

頭ひねらせながら、柔な感触のそれに、もう一回腕を伸ばした。
顔に覆いかぶさってるやわやわした「ぶつ」を、んしょと持上げたら「あふん」って。

「あふん」って声が頭の上で、した。

・・・はああ、やっぱ人だー。しかも・・・女性。

で、気を取り直して顔に当たってる「ぶつ」以外の場所を押しにかけてみようとした。・・・だってさ、いくら同性でも乳を素手で押し上げるなんて失礼、あたしにやできない。

なのに、わき腹押し上げようとしたらさ・・・「ああん、おねえさま、だめっもっとっ」って、顔に「ぶつ」が押し付けられたんだよ。そろもう、ぐりぐりっとな。死ぬかと思った。

その危険物ったら、やわらかいのなんのって、極上のマシユマロみたいな感触と香りだね、男だったらいっそ本望の死に方なんだろうけど、ええと、あれだよ、腹上死？ うーん、この場合乳下死かな？

でもあたしったら、ほら、乙女だからさ。

この乳に対して、覚えるのは憧憬よりも殺意。

死因が、巨乳による圧迫死だなんて。

末代までの恥！

でも、そのまま気が遠くなりかけてたあたしは、危うく涅槃に到達しかかったのよねー。

誰かが乳引き剥がしてくれなかったら、確実にトリップするところだった。戻れない世界に。

「ベアトリーチェ、僕のありすを殺す気か！」

主にあたしの口と鼻を塞いでいた凶器（乳）が離れて、がつくんがつくんと肩を揺られて・・・ようやくあたしは現世復帰。

「・・・・・・・・し・・・死ぬかと思った・・・・・・・・」

ああ、空気！ 空気おいしい！

「ジンみたいなおこちゃまに、ありすねえさまは渡しませんわ！」
凶器をばいんばいん揺らしながら、金髪美女が胸を張る。

それで、美女天使の懷に、おし隠すように抱きしめられて、危うくまた窒息しかかったあたしを、ジン少年が引っ張りだしてくれた。
・・・うう、酸素・・・。

「僕のありすから離れろ、この女好きめ！」
よっく見ろ！ 窒息しかかってるじゃないか！

ジン少年の指摘に、美女天使は顔を真っ赤に染めて、
「あふれる思いを抑えることなど出来もしないことなのですわ。」

あたくしの思いを全身全霊で、ありすねえさまに捧げるだけですわ・
・目くるめく官能の世界へご案内申し上げます、ありすねえさま・
・」

・・・潤んだ眼差しで見つめてきた。

肉感的な姿態を惜しげもなく晒して、敷布の中にじり寄ってくる様は、妖艶。

艶やかな金の髪が薔薇の香りを運んでくる。しっとりとした肌にも香油が塗りこめられ、身動きするたび立ち香る芳香。くらくらする。

爪の先まで磨きぬかれた、天使の指先があたしの頤に、そっと触れた。

あわされた碧眼があたしを標的にしたことを悟った。

「あたくしのすべてを、ねえさまに捧げますわ・・・」

赤く塗られた肉感的な、唇がゆっくりと降りてくる・・・。

あああ！　ぼおっとしてる場合じゃないわ、ありすううううっ！

「さ・・・ささげんでいいですっ！（捧げられたらそこで何かが終わってしまうウウ！）」

あたしは思わずジン少年にすがり付いてしまった。

縮こまるあたしを、ちらりと目線だけで確かめたジン少年が、鮮やかに笑ったが・・・あまりにも近くにいたあたしは、見ることは出来なかった。

ぐっと肩を抱かれてジン少年の横顔を見た。

金髪の将来有望株は、堂々と前を向いていた。

「本音が出たな。このレズ」

くっつと碧眼を細めると、ジン少年が鼻で笑う。

その様にかつとなつたのか、美女天使の頬が真っ赤に染まった。

・・・美人はどんな顔しても美人だけど、

「麗しくて可愛いものに惹かれて何がいけないんですの！」

「「存在」」

美女天使の言葉に速攻で答えが返される。

しかも、ぽろっと、ジンの言葉に重なるように、別の誰かの本音が聞こえた。

・・・誰？

「・・・ディィィオオオオッ」

・・・いつの間に、いたんだ、この金髪君。

目くじら立てる美女天使と、寝てるのか起きてるのか分からない様相の金髪天使（男）。

騒がしい美女天使を横目に、金髪君があたしを見下ろして、ぼそぼそとしゃべった。

「・・・めし」

「言葉には気をつけなさい、ディオッ！ お姉さまの前よ！」
目くじら立てて叫ぶ美女に、金髪君はめんどくさそうに眉をしかめて、きびすを返した。口元でもごもご何かを呟いたようだった

が、どうも、行くぞって言ったみたいだった。

「え、あ、ちょ・・・まっ、」

思わずその後姿に続いてしまった。

あっさり切り離すように背を向けるから、追いかけたくなるんだよ。

「あ！　ありすううつ！」

「あ、おねえさまああああ」

まあ、この城内にいる限り、金髪わんこがついて回るのは仕方が無い。

それにしても無口な金髪わんこだなあ。邂逅の合間にこんな無口なわんこいたっけ？　と首をひねってみた。

みんな、可愛くて、瞳がきらきらしてて・・・あ、そういえば、一回だけ。

「眠ったまま起きない時が、あったっけ」

ぐっすりと眠ったままの金髪わんこがいた。

ナイフをかざしたメイドさんを昏倒させた後も、熟睡してた。そのまま、気が遠くなって・・・戻ったんだ。

そしたら、あたしの前を歩いてた金髪君・・・ディオが、淡々とした眼差しで見下ろして、呟いた。

「・・・起きたら、もういなかった」

「・・・よく寝てたもんね」

うんうん頷くあたしと、無口な金髪君の通路の真ん中での、お見

合いだ。

でも金髪君は無言だな。余計な言葉は要らないという感じかな？でも無言で見つめるだけなんで、なんと言うか、居心地が悪いよ。背中や、お尻がうずうずしてしまつて困るじゃないか！

「ディオ、ねえさまが困つてゐるわ。ちゃんと口に出しなさい」
美女天使が口を挟んでくれた。

そこで初めて金髪君は我に帰つたようだった。綺麗な碧眼であたしを見つめ、ああ、と分かつたように頷いた。

整つた顔の一番印象に残るのが眼差しで、次に鼻筋。

唇は動きを忘れたか、色も厚さも薄い。黙つて立ってれば、美貌の剣士という風情なのだが。

その彼の言葉を、ありすはなぜか、神妙な気持ちで待っていた。待つて、いたのだが……。

「……絵、より……ちいさい」

「……は？」

ちいさい？

絵より小さいって、身長のこと？

それとも顔？ 腕かい？ ああ、それとも、顔のパーツかな？

ありすの脳内はしばし、混乱した。

ちいさい・・・ちいさいだってさ・・・あれ、このわんこ、あたしのどこを見て言ったんだ？

どこを、見て・・・・・・・・・・。

あんた今、あたしの胸見ながら言ったなあああああっ！

・・・何で怒っているんだろう。

ディオは目の前で真っ赤になっている守護天使を見つめた。

会いたいと思っていた。なのに、眠っていたおかげでチャンスを逃してしまった。

周りの奴らはみんな、まるで自分だけの天使のようにありすの名を呼ぶ。

話を聞けば聞くほど、会いたいと思った。

ようやくの自分の番。なのに会えなかったときは自分が如何に間抜けかと、ベアトリーチェにとことんせめられたつけ。

でも仕方が無い。

確かに間抜けだった。思い出しても自分に腹が立つ。

あの朝、目が覚めたら、部屋の中に転がっていたメイド服の刺客のぎらついた目線。

ベッドの周りは嵐の後のようなだった。

見慣れた絨毯は、護衛の血を吸って赤く染まっていた。

猿轡をかまされ、グルグルにシートで縛られたままの刺客は、どうも隣国の手だれだったようだが、あの時はそんなことも分からない餓鬼だった。

ぎらぎらした眼差しで、しきりに「守護天使め！」とうなっていた。

その刺客の目を見ながら、

「・・・来たなら、声くらいかけてくれてもいいだろうに・・・」

せめて起こしてくれれば。・・・と、悲しくなったものだ。

ありすを思い返しても、寝ていた自分の記憶の中に、ありすの姿は無いままだ。

だからせめて、と絵を見上げた。

あれがありす。ぼくのありす。

音も無く（気づいてないだけ）僕を守ってくれた、守護天使……。

……そして今、目の前に本物がいる。

記憶の中のありす（絵）と比べて……気がついた。

本物のありすは、絵の中のありすよりも、生き生きとしていて、とても綺麗だ。

近寄ると良い匂いがして、吐息を感じられて、目線が僕を見つけてくれるのが、うれしい。

くるくるときらめく瞳は見ていて飽きない。

ふっくらとした赤い唇は、舐めたら甘そうだし、ほっそりとした肩口に、そこから続く首筋、胸元……と目線を降ろして行って、僕はおや？と首をひねった。

おかしいな。記憶（絵）の中のありすは、健康的でこう、ばーんと弾けそうな感じだったのだけど。

「……絵、より、ちいさい……」

……けれどはっきりしてることがある。

絵なんか比べ物にならないくらい、ありすはかわいい。

ありすインワンダーランドでセクハラの定義（後書き）

デイオにセクハラの概念はありません。

ありすインワンダーランドでシャワータイム

ディオに案内ついでにされた場所は浴室。

なるほどー、ひとつ風呂浴びて、落ち着けてことかー。

でも……。

「つ・い・て・こ・な・い・で・ね」

ひとりではいるから。

後方を睨んで言い切った。

「そんなあつ！　ありすう！」

金髪わんこが泣き声を上げる。

ご丁寧に両手に抱えたお風呂セットが嫌だ。激しく嫌だ。

金髪わんこと言えども男と一緒に、風呂に入る気は無い！

「まああ、お姉さま、あたくしお世話いたしますのに！」

美女天使がドレスのすそをたくし上げたもんだから、護衛の騎士さんの目線がぐわっと見開かれたさ。

だけどベアトリーチェに入ってこられたら、あなたの知らない世界へご案内されそうで怖い。

「ひとりがいい」

そーういい捨ててさっさと入ったは良いんだけど……。

「……………なんであんたがいるのかな？」

「……………護衛」

ジン少年とベアトリーチェは撒けたのに、ディオはあっさりと脱衣所に陣取っていた。

「護衛なんかいないよ、で、で、け」
出口をさして追い返そうとしたけど。

「・・・王、が。・・・危険、だと」
そう言って彼が後ろを向いた。てこでも動かないみたいだ。

話さない、こちらを見ようもしないディオはまるで岩だ。本物の岩なら、無視すりゃいいんだけど、と背中を見たまま、浴室へ通じる扉を開いた。

浴室の中は湯気で何も見えない。

・・・って事はディオも見えないって事だ。

「うむう」

どうする？　ありす。

ディオは多分役目もあるんだと思う。王様に命じられたんだろう。あたしを残して退出する気はなさそうだ。

ディオの背中と浴室の見事な作りを見比べた。ああ、お湯がお湯があたしを呼んでるわ。

背に腹は変えられない。お風呂もしくはお湯を浴びるだけでもお願いしたかったんだもん。

大体ここの世界の人たち、パーソナルスペース近すぎるよ！

日本人ならそんなに顔を寄せないし、そんなに体を密着させない。でもこの状態だと、自分の体の匂いってモンが気になるじゃないか

！ ジン少年はくつついてくるし、ベアトリーチェは抱きついてくるし、そういえば、なんかうやむやのうちに、ジン少年と同じベッドで寝てたぞ、あたし。しかも、熟睡してたとも！

・・・やばいや。

脱衣所には大きな籠があって、その中にこまごまとしたものが入っていた。脱衣所に入る前にジン少年に押し付けられたものだ。分からないことがあったら、僕を呼んでねと最後まで食い下がった金髪わんこ。

その彼はきつと、潜り込もうとするベアトリーチェを抑えるので手一杯なのだろう。

タオルや良い香りの石鹸や、クリームと一緒に、シンプルなミニ丈のワンピースが畳まれて入ってた。

わあ、着替えだ。うれしいなあ。制服のまま寝ちゃったからよれてるんだよ。着替えたかったの。

でも、半眼で考え込んでしまった。ご丁寧にぶらじゃあとパンツと思しき一品が二枚もある。・・・ダレガヨウイシタンダ、コレ。

「・・・う。しかもサイズが合ってる」

責任者、追求決定だな。

・・・しかし、よかったと、思えばきなんだろうけど、なんだ、このレースとフリル。

あきらかに局部を隠すため以外に、装飾的な意味合いを持っている！

思わず「それ」を顔面に出してまじまじと見ていた。

でもこれ可愛いなあ。しかも手作りを見た。

うん、職人の血と汗と涙を感じる渾身の一枚だわー。

あれよね、いわゆるミセパンってやつよねー・・・あらら、こんなところにも刺繍が、ぱんつなのに。

「・・・それは最後にはく」

「うきやあつ！」

ぱんつと思いきらびやかなものを握り締め、背後のディオを振り返った。

鉄面の無表情顔のディオがかごの中の説明を始めた。

「無地のをはじめに穿く。次がそれ。上は胸当てが一枚、無地のを着て、かさねにそれ。帯は・・・いい。後で締めてやる」

そう言って、くると壁のほうを向いた。

腕組みをしたまま微動だにしない。彫像だ。

気にするのも自意識過剰だろうし、あんなに綺麗な剣士が女なれしてないはずも無く。

あたしみたいになつるんぺたんな地平線に丘二つなら、餓鬼も同然、餓鬼にしか見えないだろう。

大体比較対象がベアトリーチェだもんね。

自分を納得させるように頭の中で、つらつらと説明する、あたし。
いいわけ

この様子だとディオはあたしの裸になんか、興味ないね。

・・・だから、あたしは、豪快に服を脱ぎ捨てた。

ばさばさと衣擦れの音がした時、ディオは思わず硬く目を閉じ、こぶしを握り締め、経典の第一章から諳んじ始めた。

（・・・初めに光があった。原初の光は地平を照らし、あまねく映し出したところを「昼」と称し、届かず暗いままの闇を「夜」と称した。輝く巨人が喉を震わせ、流した涙が「海」になり、空に上って「星」になった。左目を抉り出し「海」に投じると「太陽」となり、同じく右目を投じると「月」となった。右の骨を砕いて巨人は「神」によく似た生き物を作り始めた・・・）

ぐっと握り締めた手のひらには、つめが当たって鋭角な痛みをよこしてくる。

だが、そうでもしないと、煩惱に理性を焼き尽くされそうだった。

・・・動いてはいけない。信用してくれたのだろうありすの信頼を、裏切る真似は出来ない。

だが、それでも思わずにいられないのだ。

・・・あの、ありますが。

あのありますが、俺の背後で衣服を脱ぎ捨てている。

・・・のぼせそうだ。（脱衣所で？）

そうこうしている内に、ひたひたと足音が響き、扉が開く音がして、ようやくディオは息を吐いた。

背後の扉の向こうで小さく上がった歓声。

お湯をかけ流す音、小物を使う小さな音が耳を震わせる。

そのたび跳ね上がるやわな心臓に爪を立て、ぐっと奥歯をかみ締めた。

やがて聞こえてきた鼻歌に、ふと微笑を浮かべる。

・・・ありすだけだ。

我らをここまでざわめかせる存在は。昔も今も、ありすだけ。

冷徹なエンダール王。左腕を担い次期王でもあるディノツソ卿。右腕を担う父、ルミナウス。

寡黙なマッスル・・・いや違ったマウスル卿。その三男のライダール。

筋肉美の追求に勤しむ、シャリアキム。その娘、エリオット。

聖神殿の祭祀長、イリリアス。祭儀官となった彼の子、ホーネット。

激烈姫と名高い戦闘狂、ベアトリーチェがあのだまで、魔呪眼の持ち主、ジンが、骨抜きだ。

そして、ディオの従兄弟であるノーティス。

ありすと出会った者は、みな、己の望む道で大成している。

掲げた理想は高かった。

守護天使にふさわしい「剣士」「戦士」になりたくて。分かりえる限りの知力を。心が折れぬように日々、そのための研鑽を怠らなかった。

そして舞い降りた天使。

艶やかな黒髪も、きらめく黒の瞳も鮮やかなありす。

きっとマウスル卿が昔から夢見る瞳で言っていたように、ありすの膝小僧はほんのりピンクで、その破壊力がすさまじいものなんだろう。

いちど！ いちどでいいから！ と叫んでいたのを思う。

エリオットが言っていたように、抱き上げてもらったら甘酸っぱい香りがするんだろう。・・・ベッドに残った香は柑橘系の香りだったから、それは確かだ。だから石鹸は柑橘系のやつがこの城では主流だ。むしろそれ以外ない。

ノーティスがありすの勇姿をうっとり呟いて、その後馬鹿にする

ように「ああ、こんな話ディオにしたところで、君には何の思い出もなかったな」には丁寧な報復しておいた。悔しいが、僕の知るありすは香りだけだ。

・・・毎回修練場での合言葉は「ありすのように」だった。

「ありすのように」軽やかに、「ありすのように」容赦なく、自己の拳をたたきつけ、相手のひざを割り、あごを蹴り上げ、脳天に踵をたたき付けられたら、騎士合格。

身軽に後方宙返りをしつつ、着地するときは一瞬と相手の急所に蹴りを入れるか、もしくは前方宙返り半ひねりで落下する際、敵を巻き込んで再起不能に出来たら近衛隊合格。

だがさすがに大技を決められた者はいない。

ありすが叫んでいたと言う呪文も、みんなで一生懸命唱えてみた。

「しょうりゅうけん」「ほくとぼくれつけん」「なんとすいこけん」「せんぷうきやく」は危険な大技で、使用した後は必ず「お前はもう死んでいる」と言わねばならないらしい。だが何度訓練してもありすのようには行かなかったようだ。

反面「かめはめは」は、ありすと言えども発動しなかった難しい奥義で、いまだにだれもその高みに上った奴はいない。

剣聖と名高い父、ルミナウスがそれらを習得しようと日々鍛錬を怠らないが、今だその高みは望めないままだ。

ディオはこの後に待ち構えているだろう、筋肉馬鹿達を思った。

・・・てぐすね、引いて待っていそうだ。

彼らの夕べの盛り上がりは尋常じゃなかった。今すぐにでも鍛錬場に連れて行って手合わせ、もしくは技をかけて欲しいと、ありすにすがり付いて懇願しそうだった。いや、マウスル卿なら、きつとする。

だからこそ、あの不埒な下着が必要だったのだろう。

魔眼と呼ばれるジンの呪は強力だ。

あの環をつけている限り、ありすのありすとしての力は封じられたままだろう。では、今のありすにあの筋肉が群がったら。・・・ぞっとした。

ありすがつぶされてしまう。

だから、破壊力の大きなあのドレスなのだろう。一見すると何の変哲もない、白いワンピース。しかし恐るべき破壊力を秘めた代物だ。・・・誰がそろえたのかは今は今聞かない。

あのドレスにあの下着は確かに絶妙だった。

オフホワイトのワンピース、見えそうで見えない下着の妙。ありすが握り締めていた、淡いピンクの徐々に染まってサーモンピンクの連なりを見せた一品が目には鮮やかに残っている。あれをありすが身に着け、目の前で動くのだ。・・・。

か・・・、

「・・・かわいいじゃないか・・・」

ディオは思わず、口元を右手で押さえた。背中を言いようのない悪寒（快感）が走る。

白い生成りのワンピースに身を包んだ、黒髪の少女。風に揺れて短めのすそが翻り、ちらりと見えるぴんくの膝小僧。さらにいたずらな風が風を強くすれば自ずと見えるだろう・・・ぴ・・・ぴんくの、ふりる・・・。。。

「う」

一瞬、どっかちがう世界へ確実に旅立てたディオだった。

ありすインワンダーランドで愛で（られ）る。

よだれをたらす勢いで、ガン見する先には、大皿に盛られた。

大量の。

「・・・ほっとけーき・・・」

「ピタだ」

うっとりとはいたたら、すかさずディオの注釈が入ったけど、そんなモン、右から左。

手を伸ばしたかったけど、右手に陣取ったベアトリーチェがせつせと、サンドイッチを整形してくれてるので、じっと我慢する。

左手に陣取ったジン少年が、さまざまな食材の説明をしてくれた。

緑の濃い野菜がシールレタスで、トマトはトマトだった。エッグティという名前らしい。

「はい、おねえさま。あたくしの一押しของフィリングですわ。シールレタスとエッグティと酢漬け野菜、固まり肉の塩スパイス、こんがりじっくり焼きましたのよ」

「・・・び・・・びーえるていつ！」

まさかここに着てこの究極の一品に出会えるとは！

震える両手に収まった、薄パンに挟まれた目にも鮮やかな緑、ちらり垣間見える赤に、肉汁あふれる、これって紛れもないベーコンの香り・・・！

どっしりした重さに、日本じゃ考えられない重量感を感じる。
生睡飲んだんだけど、よだれが止まんないよ。なんて罪作りな一
品・・・！

「召し上がれ」

にっこり笑った金髪美女はやっぱり天使。たとえその背中に黒く
て細くて長くて痛そうな尻尾を見せていても、やっぱり天使。

「イタダキマス！」

ぱくん。

はむはむはむ。

・・・ごくん。

・・・・・・うまい。

あ、いかん。なんか涙が出てきた。

なんだこれ。こんなん食べたら向こうの食生活に戻れなくなるだ
よ、どうしよー、おかあさん。

こんな、こんな・・・。

暴力的に美味しいものをおおおお！
・・・もぐもぐもぐ。

「はい、ありす。絞りたてだよ」

調度良い距離に置かれたグラスには、なみなみと牛乳。

ベアトリーチェもオレンジジュースを差し出してにっこりしてる。
もぐもぐ。んぐんぐ。

「おねえさま、こちらのサラダをお取りしますわ」

「ありす、この果物おいしいんだ。この酸味のあるソースをかけ

るともっとおいしいんだよ」

「あら、あたくしのお勧めはこちらの、クリームソースですわ」

わー、果物にもソースかけるのかー。イチゴに練乳のノリかなあ。でもすっぱいソースとクリームソース迷うなー。

「・・・これもうまい」

ディオが指さしたのは卵色のソースだった。カスタードクリームっぽい。

「ありがとー」

色々試せておもしろそう。

だから、ありがとうとにつこり笑って礼を言った。

そしたら美女天使が目を見開いて悶絶し、ジン少年が頬を染めてプルプルした。ディオは顔色一つ変わらないけど、右手を口元に持っていて、目をそらした。

なんだ？

周りを見渡せば、陣取った元天使たちも無言であたしを見てる。

うむ。だが、それよりも、だ。

「・・・その、皆も食べない？ あたしばかり食べてるよ？」

隣のベアトリーチェにジン少年、正面のおじいちゃんに左右の叔父様。そこから両翼広げるように座ってこっちを見ている「元」金髪天使たち。

なんか、すごく居たたまれないんだけど。

「あ、ああ、そうだな」

おじいちゃんがそう言ってくれたお陰で、なんだか妙な緊張感が払拭された。

・・・そのときの我らの心境を察してくれるだろうか。

王が瞳を和らげてありすを見ている。

剣聖と呼ばれる叔父上の、あんな顔は始めて見た。

神殿の祭祀長である父上も。

將軍職についている猛者たち。

従兄弟殿たちは揃いも揃って腑抜けた面だ。

だが、わかるさ。

目の前に焦がれた存在が座っていて、しかも動くのだ。

その衝撃は計り知れないものがあるう、とホーネットは思った。

おいしそうに幸せそうな笑顔で、ありすが笑う。

小さな口に食材がすごい勢いで消えていくのを目にして、なぜ隣に陣取っているのが戦闘姫と呪眼の主なのかと目を疑った。

守護天使を保護するのなら、神殿だろう？

父は何をしていたんだ！・・・ああ、祈ってたのか、それとも、

鍛えていたのかだな。馬鹿だな私、愚問だった。

早く保護しなければ。そうでなければなんで、あんな危険人物にありすを任せられる！

ホーネットは甲斐甲斐しくお世話をしている二人を睨みつけた。

奴らは気づいているくせにどこ吹く風だ。

さも自分はあるすに気に入られてるんですよとでも言いたいのか、貴様ら。・・・言いたいんだな、貴様ら。

いつもなら自ら動くことなどないものを。

ベアトリーチェ、貴様、食事などに気を使ったことなどなかっただろう。

何が一押しの一品だ。

野外戦で、イノシシ丸ごと焼いて貪り食ってただろう、貴様。

顔と体つきが似通っていて、夜の禊の際に、神殿のものに悲鳴を上げられるのが、つくづく屈辱だ。

私はあんな戦闘狂ではない！

ただ、鍛錬を怠らないだけだ。いつ、いかなる時も己を鍛えることが、神に通じる道だからな。

・・・ありすのように容赦なく、ありすのように華麗に神敵を屠るホーネットが裏で「戦闘狂」のベアトリーチェと並んで、「神戦姫」と呼ばれている事実をホーネットは知らない。

ベアトリーチェを憎憎しげに見た後で、ジンの存在に目をやった。魔呪眼の持ち主と恐れられた子供だった。神殿の祝福などいらんと突っぱねたジンの母親の魔女を思い出す。

だれにも懐かない子供だった。ジン、お前がそんな良い笑顔でここに座っているのを、私はじめて見ましたよ。

その変化を心のどこかでうれしいと感じていたホーネットは、次

の瞬間冷や汗をかく。

ありますがジンの差し出した飲み物を、にっこり笑顔で飲み干した。

ああっ！　　あります！

ジンの差し出したものを毒見もせずに食べるなんて・・・！

ああ、だがありすは知らないんだ。知らないとは幸せだ。

だが、媚薬でも仕込まれていたら大変だ、やめさせなければと思
って、いざ、立ち上がろうとしたのだが・・・。

幸せそうに、とろけそうな笑顔で、ありますがピタサンドに囁り付
いた。

その映像が飛び込んできて、ホーネットの脳に衝撃が走る。

ナイフもフォークも使わずしかも手づかみ。礼儀にうるさい王や
祭祀長が眉をひそめるか、と思ったが彼らもまた、柔らかな眼差し
で見るだけだ。

大丈夫か、王。見えてるのか、叔父上。夢見てるんじゃないだろ
うな、父上。だがだが、その衝撃を補って余りある・・・ありますの
姿だった。

・・・頬袋に食材を詰め込んでもぐもぐしている小動物のようだ。
なんだこのあどけなさ。そしてなんだ、この胸の高鳴り。

幸せそうにもぐもぐしているありすを前に、媚薬が仕込まれてい
るかもしれないと言う杞憂は吹き飛んだが、別な意味で衝撃を受け
ていた。

礼儀作法のまったくない者の食事風景にこんなにも心弾む自分がいることに。

ありすインワンダーランドのはじまりの物語。 (前書き)

はじまりの発端。

ありすインワンダーランドのはじまりの物語。

・・・はじめ、男は身の程を知っていた。

隣国の王がかくまってくれるのは、この身のうちに流れる血の為だと言うことを。

己が、隣国における政権奪取の切り札であると言うことも分かっていた。

「開放」という耳触りのいい言葉の裏に、隷属と服従とが内在するものだということも。

血筋が表すとおり、男は先の王の一粒種で、父王が倒された今、男が頼るよすがはこの国しかなかった。

・・・母はこの国の王の娘だった。血筋だけ見れば申し分ない皇子だ。

だが、父王、母王妃は、善政を敷くことなく、欲望のままに振舞った。

貴族院は耳障りの良い言葉を言う者にしか門戸を開かず、諫言苦言を呈するものは王に嫌われ左遷の憂き目にあった。

貴族院の言うがまま、税を吊り上げ、民を酷使し、贅沢を好み、毎晩のように酒色におぼれた。

灌漑工事の求めがあってもそれをなすことはなく、結果、氾濫を起こした河川が農地を侵し、主力の農作物が取れなくなっても、土砂災害の被害にあって、農地も家畜も被害にあったとしても、誰一人として末端の民の窮状を知ることなく、隣国の救援を頼りに、飽

きずに漁色に耽っていたのだ。

隣国の祖父は淡々と待っていたのだろう。

王を傀儡とし、娘である王妃を立て政権に介入し、民すべてを労働力に変える日を。・・・無給で働く隷属の民を召抱える日を。

だが、祖父の動きを待つこともなく、火は身近であがった。

父王の兄である、エンダール伯父は耳を貸さなくなった父王に、それでも諫言を繰り返し繰り返し伝えた。聡明な伯父を立てる気配は各所であった。軍部しかり、政府しかり、市政の民でさえそうだった。生まれた順を覆すものは血筋だけで、それに縋って王太子位についた父は、しかし民をかえりみる事はなかった。それに憤った者達が伯父上を推挙し、反旗を翻そうとした時も、叔父上は諫めすらしたのだ。話せば分かるはずだ、と。

「それ」を拒んでいたのは、誰であろう伯父上その人だったのに。

馬鹿な父上は、伯父上もろともその子まで狙いはじめた。

伯母上がそれを察して子と共に山中に逃げたと知ったのは、すべてが終わったあとだった。

山中の中腹は、まるで獣に食いちぎられ、踏みにじられたような悲惨な有様だったらしい。

血臭漂う山中で、無残に惨殺された伯母上は、血に濡れても美しかったそうだった。それでも、おそらく命乞いをすればここまでむごい殺され方はしなかっただろう。伯母上を殺せとは父は通達していな

かったのだから。それどころか、生きたまま捕らえよと言っていたほどだ。

父に身を任せるか、母にひざまずいて慈悲を請えばおそらくは助かった命。だが伯母上はしなかった。

ただただ

子供を生かすため。

美しい金の髪、緑の瞳の伯母上は伯父上と結ばれる前から社交界で知らぬ者のない、美姫として有名だったそうだ。父上にとって喉から手が出るほど欲しい相手だったのだろう。事実側室の打診すらあつたそうだ。

母上の矜持がそれを許さず、伯母上はいわれの無い中傷に傷つけられもした。

だが、伯母上は伯父上と恋に落ちる。

伯父上があつさり王位継承権を手放して、伯爵の地位に納まって、終わったかに見えた、恋騒動。

だが、実際には、熾火のように燦っていたのだろう。

父は靡かぬ伯母上を恨み、母は自分の矜持を踏みにじった伯母上を憎んだ。

母上の伯母上嫌い具合を見るでもなく、おのず分かる。

笑顔の美しいひとで、優しい人だ。何より伯父上を、そしてその子を愛していた。

・・・父王の放った刺客か、母上の放った刺客かは分からないが、伯母上を亡き者とした時、父王の行く末は決まったのだろう。

伯父上の怒りは、すさまじかった。

金色の髪が逆立って、碧の瞳が燃えていた。

だから、当初、男は反乱を起こされるのは当たり前とさえ思っていたのだ。

それどころか、速やかに軍を立ち上げていく手腕に舌を巻き、父王が倒れるときは自分の最期なのだろうと漠然と感じてさえいた。

草を隅から焼き払っていくように、容赦なく攻め立てられて負けを意識したとき、伯父の前で笑って見せた。たった一つの強がりだ。

だが、伯父は殺さなかった。

「私怨はある。だがそれは君ではなく、君の父に払ってもらおう。無用な殺生は私も妻も嫌いなんだ」

追放。という形で追い立てられて国を出たとき、父王はすでに亡くなり、母は口汚く伯父上を罵っていた。

恩知らず。恥知らず。誰が今まで引き立ててやったのか。恩知らず、恩知らず、恩知らず・・・。

どの口でそんなことを言うのか、と呆れた。

側を離れず身を呈して守ってくれる騎士も無く、放り出された二人を拾ったのが、隣国の祖父だった。

あるべき場所へ返そうと祖父は言った。

母は喜んでいたが、私はなにを馬鹿な、と思ったものだ。

殺されなかっただけましなのだ。

伯母上を奪い、その子の命まで奪おうとした報いを、父王が一身に受けてくれたから、私たちが生きていられると言うのに。

それ以前に、父王の残虐さと違い、伯父上は殺生を好まないのだから。

それから隣国に匿われて、暮らす日々が始まった。

・・・風に聞く新王は、民の声を聞き善政を敷いているらしいし、母の生国であるこの国以外は、かの新王をたてている様だ。では、この国にとどまり、生国へ戻らぬことが国を捨てた私の役目なのだろう、とすら思っていた。

あの女に出会うまでは。

銀の髪のおやかな、蒼の瞳の美しい女に出会った日のことは今も鮮烈に覚えている。

世話になっている隣国の王城の一角に身を寄せ、息を潜めて生活するのが日課となっていた。

・・・何といっても国に帰ればお尋ね者だ。

母はそんなことなどおくびにも出さず贅の限りを続け、そのわがままの健在ぶりに、この国の貴族院の中にも眉をひそめる者が出始めている。

耳の痛い話から逃れていた。・・・そうだ、逃げていたんだ。

寄る人のない静かな楼閣に腰を落ち着け、蔵書を読み解くしか、することがなかった。

母は毎日やいやいと突いてくる。

いつ帰るのか、いつ玉座に戻るのか。このドレスは古くていやだ、城に残した宝石やドレスや靴がどうなっているのか心配だ。

「心配なさらなくとも、伯父上は新しい王妃を娶るつもりは無いようですから、母上の趣味の悪い宝飾品は宝物庫で眠っているでしょうよ」

・・・いや、もうすでに売られているかもしれないな。と思いなから呟けば。

「ですからわたくしを娶ればよいと言うのに！　そうすれば篡奪者といえども正当な王位継承。いい話ではないか！」

そう胸をはって言い募るのだ。我が母ながら、呆れることに暇が無い。

確かに伯父上は美丈夫だ。父王のたるんだ体と比べ物にならないほどに。だが、まさか、あの伯父上に母が懸想していたとは・・・！笑いたくなるのをぐっと我慢した。

それこそ無理だ。

伯母上の美貌とやさしさに触れていた伯父上が、母を選ぶなんて万に一つもありえない！

「・・・母上。私たちは曲がりなりにも、伯父上の最愛の妻を死に追いやった男の家族なのです。殺されなかっただけましでしょう？」

子供に噛んで含めるように諭してみれば。
ではいつ蜂起するのです、と詰め寄ってくる。

そんな戯言に、つつい「父王の慰霊はなさらないのですか」と
皮肉を言えば、やれ母はこんなに心配しているのに、お前はちつと
も分かってくれないと泣き出す始末。

父はよくこの母を娶ったものだ。とため息をつきながら思ったも
のだ。

「・・・冷静に鑑みて、帰れると思う方がどうかしていますよ。
自国の民を省みず、贅沢を極めたのですから、もう、満足でしょう。
余生は父を偲んで修道院にでも入ったらいかがです」

わたしも、この国にお世話になるのですから、何か少しでも役に
立てるようにと願っているのです。

と告げれば、母はさめざめと泣くばかりだった。

いい加減母のお守りは真っ平だった。

「母上。身辺綺麗になさってください。身を慎まねば、この国す
ら追い出されかねません」

そんな諫言も母には効き目はないのだろう、そう思いながら母に
つげ、その場を後にした。

もう少し静かなところで本を読みたい。せめて母の、祖父の眼の
届かないところはないか、と探していた時だった。

一瞬の間のあと、彼女がそこに立っていたのだ。思えば夢のよう
な一時だった。

・・・今も、その夢の続きを見ているのかもしれない。

美しい女だった。美貌も姿態も申し分ない。

着飾り露骨に誘いをかける、母のような女とは違い、どこかストイックな印象さえ与える女だった。

銀の髪がさらりと揺れる。

青い瞳に切り込まれ、目をそらすことが出来ない。

赤い唇が弓のように撓り、微笑を浮かべると囚われた獲物のように身動きが出来なくなった。

金縛りにあったように動けない私の懷ににじり寄り、しなやかな白い腕が私の胸に触れたとき、天啓が訪れた。

「・・・我が君は、このまま、この地で厄介者のそしりを受け過ごすのですか・・・？」

耳元に注ぎ込まれた毒は甘美で、あまりにも甘美で脳がしびれた。

いつの間にか吐息さえ感じられる距離で抱き合っていた。細い腰を引き寄せれば、たやすく落ちてくる果実。

甘くかぐわしい果実は、毒の実だった。

それでも良いと思えるほどの。

ありすインワンダーランドで崩壊の始まり

女は悪夢のように美しかった。

ああ悪夢だ。いつからそこにいたのか、わからなくなるほどの。

あの女は祖父の寵妃だったはずだ。いや、母の侍女だったはずだ。もっと年老いていたはずだ。いや私と同じ年のはずだ。

耳に注がれる毒は抗いがたく、甘美な誘惑は私だけではなく、母や祖父にも及んだ。

耳に心地よい言葉の羅列。

期待や希望が必ず叶う約束されたものと思われた。

その笑顔で、その繊細な手で、甘言を弄し、眩ませては操った。

・・・ああ、わかっていた。あの女は悪夢だと。

・・・ああ、知っていた。あの女は危険だと。

けれどそれでも、構わないと思った。囚われたかった。彼女の瞳に映る自分を見ていたかった。彼女が私を見て嘲うその微笑ですら。

・・・幸いでしかない。

「国王様、わたくしを前線へお連れくださいませ。正当な王子が

国を取り返す瞬間を見とうございます」

ねっとり甘い声で老いた祖父の耳元で女が囁く。

その姿に、頭のどこかが痺れていった。あの女は危険だ、とどこかが警告するのに、抗えない。からめとられる。

「お后様、お后様の立たれる国を間近で見とうございます。きっと、すばらしい国なのでしょうね」

ひそりと母の耳元で囁かれる言葉。

いつから、そこにいたのだ!?

いつから、祖父と母にまわりついていた!?

女が顔を上げ、面白いものを見るような笑顔で私を見た。その笑顔に。

背筋が凍りついた。

「王子。あなたの国をわたくしに見せてくださいませ・・・」
なのに、しなだれかかる温かい体を拒めないのだ。

胸を撫でるように繊細に動く白い腕。

ふところに身を預け、斜めに見上げるように差し上げた、蒼い眼差し。

闇夜に白く浮かび上がる、女の喉。その儚さに目を取られ、動けなくなる。

女を見ていると、まるで霧の中で息をするように息苦しいのに、それ以上に沸騰する脳。

胸をざわめかせる女だった。抱きしめても落ち着かない。口付けでも物足りない。まるで次の瞬間には消え去ってしまったような、そんな危うさを持つ。

こそりと呟かれた言葉は、耳に届かない。

「絶望を見せてくださいまし」

誰もが嘆き悲しみ地に伏し祈るように。絶望があの子を呼ぶように。ああ、あの子の為に。

それをしないことこそがお前の罪。止められもせず、止めもせず、傍観していたそれこそが罪。一步を踏み出したのなら、止まる事など許さない。

父王のように残虐に徹せないのなら、ならばせめて精一杯の絶望をもたらせよ。

「・・・何か・・・言ったか？」

「いいえ。我が君」

女のつぶやきは、夢と共に消えていく。

「・・・お前に見せてやるから・・・だから私の元を離れるな」
子供のように女にすがり付いて懇願した。

柔らかい胸に顔を押し当て、息を吸い込む。少しでも女とのつながりが欲しかった。

女はまるで我が子を抱くようにやさしく男を抱きしめた。

頭のどこかでおかしいと声を上げる自分がいたのに、思うとおりにならない感情にまたいらだつ。

女を腕に抱いて安心してはるはずなのに、いや増す不安。

きっとこの女は、祖父にも同じ甘言を伝え、同じように身を投げ出しているはずなのだ。

わかっているのに、どうにもならないこの感情。

冷静に見つめれば、おかしいとすぐに分かるほどの異常だった。

見よ。祖父は焦点が合っていない。

見よ。母は以前よりも子供染みてきた。あれではもはや人形だ。

王と呼ばれた歴戦の勇士ではない。王妃と呼ばれた人ではない。

考えを持たない・・・動物だ。

いつからそこにいたのだろう。

この女は、いつからそこに。

・・・そしてなぜ、私はこの永の間気付かなかったのか!!!!

見れば祖父は、最早ミイラと化している。

母は、豊満な体を蛆に食い破られ、眼球を彩る黒は、無数に蠢く虫だった。

「・・・く、」

抗う気持ちは今である。

人ならざるものに支配を許すなど、腐っても王。その血が許さなかった。

今は、いったい何年経っているのだ・・・？

あの頃、伯父の蜂起を喜びその場を譲ったつもりですらいたのに
!!!!

あの伯父ならば、その伯父と伯母との間に生まれたあの子なら、腐り果てたあの国でさえ生き返らせてくれるだろうと思っていた。そのために隣国に逃げ込み、祖父と母を抑え、傀儡を装い逆に祖父を操りながら、遠くから祖国を愛しむつもりだったのに！

「貴様は・・・だれ、だ」

問いかけに女は笑った。

赤い唇を吊り上げて、艶然と笑った。

「・・・王子様はわたくしの望みを叶えてくださいますわね？」

歌うように囁く声、覗きこんで来るその瞳。

「俗物の老いた王や、色と欲に染まりきった女などおもちゃにすらなりませんわ・・・」

抗おうともせず、すぐに悦楽に身を任せるのです。その点王子様は・・・。

「合格ですわ」

抗う最後の意識が鎖に囚われた。

耳に幻聴が聞こえる。ジャラジャラと囚われの鎖の音だ。

わたしもいずれ祖父や母のように、自我すら失い、女の意のままに、動く人形になるのだろうか・・・？

ほら。今宵もまた女がやってくる。

優しい顔で優しい腕で、頭を撫でて、歌を歌って、手を取り囁いて、女の意のままに動く人形を作るため。

ほら、
ほら。

やってくる――――。

「……王子さま？ わたくしの願いをかなえてくださいませ」

「……ああ……お前に、すべてを……お前に、捧ぐ」

言葉を聴いて女は赤い唇をきゅっと吊り上げ、微笑んだ。

耳に残る言葉は、「約束ですよ」と囁いた声。

思考を奪われた男は、あがく。深く深く沈められた自我の檻の中で、男はあがく。

だが、からめとられた思考を取り戻すことは無かった。

伯父が反旗を翻したあの頃から、ゆうに三十年は過ぎていた。

ありすインワンダーランドで崩壊の足音

声高に叫んだ。

屈強の兵士を前にして。

正統な王位継承者の下に主権を返すための戦であると。お前たちは救国の英雄となるだろう、と。

陶酔が染み渡るまで、しばし待つ。

大きな歓喜でもって迎えられるだろう、だが齒向かう者には容赦するな。

篡奪者に絶望と、凄惨な報いを与えよ。

正統な主権を持つ我らを狙い、やつらは襲い掛かってくるだろう。怯まずに奪いつくせ、殺しつつくせ、侵しつつくせ。

われらの残した足跡が、国境線となるのだ。領土を広げよ。かの地は恵み深い土地柄だ、征服すれば我らの国の支えになろう。

家族を飢えさせたくはあるまい？

子等に実り多き祝福を与えてやろうではないか。

・・・恐れるな。如何なる行為も神はすべて許すだろう。

そう叫ぶ己の言葉に呼応する兵士達の意気が上がる。鬨の声は高まっていく。

それを、どこか遠いところで客観的に見つめながら、男は蜂起した。

胸刺す痛みは、もう感じない。

彼らの傍らには、存在感の無い女がいた。

美しい女だ。悪夢のような女だ。

そして、王の女だった。

王の耳元に囁く。

「恐怖を」

王の耳元に囁く。

「恐れを」

ささやく。ささやく。小さな言葉は軍内部の隅々、一兵卒にまで届いた。

「・・・絶望を」

それは誰の言葉だったか。

「・・・辛酸を」

隣のいつも朗らかな若者の？

「・・・恐怖を」

情け深いと評判の領主の？

「・・・悪夢を」

いつもやさしい微笑を浮かべていた、領主だったのに。

「・・・畏怖を」

隣国の民が望んだ施政者の、正統な王位継承権を持つ、隣国にとつてただ一人の、この国と隣国をすべる正統の王。

仰ぎ見る主。

・・・ただ、あくまで隣国にとって、だ。

新たな王を頂いた、この国の民は、エンダール王朝の到来を喜んでいた。

王位継承からすれば末端の、けれど紛れもなく王の子。しかも、人の心の痛みを知る王だった。王位継承に巻き込まれ亡くしてしまった妻を思い、後宮すら開かなかった慈愛の人。人の心に寄り添いたわる事の出来る、得がたい王族。

彼らを要して、およそ三十年、国は見違えるほどに潤った。

無理な納税も無く、医療機関は充実し、市政の隅々まで施された学問と医療に、民は喜んだ。

腐敗した貴族たちが、王の執政に従い、なりを潜めたからだ。

公共工事も広く市民に提示された。幹線道路は整備され商業が盛んになり、貿易による利益も上がった。彼らは、毎日に満足していたのだ。

だが、隣国の侵攻は否応無く始まる。篡奪者に抑圧された民を解放するとの触れ込みで。

・・・端から舐め取るように、街という街、村という村に襲い掛かる彼らは、悪夢の象徴だった。なまじ第一王位継承者を要していたから、なお性質が悪い。

領土を奪う彼らの姿は、もはや追われる者には悪鬼の群れに見えただろう。

理不尽な侵攻は絶望を呼び、演出された恐怖の高まりは救いを求め、奇跡を希^{こいねが}う。

藁にも縋る思いで込められた願いだった。

山中で逃げ惑う獲物を追いかける集団があった。獲物は金色の少年だ。彼を守る騎士たちはすでに事切れたようで、逃げる少年は一人だ。

野卑な男たちが、あとを追ひ、跳ぶようにかけている。

およそ一国の軍人とはいえない、烏合の衆に見えた。野卑極まりないケダモノのように。だが男たちは国に戻れば貴族として傳かれる立場にあったものたちだ。

本来野卑な盗賊まがいの傭兵達は、そんな貴族を冷めた目で見つめていた。

傭兵隊は、彼らの残虐さに辟易していた。

まるで猫がねずみを甚振るように、手のひらで転がすのだ。自分が絶対の安全圏にいるということを熟知しているからこそその行為だった。

傭兵達には己が戦に自負があった。

命のやり取りは崇高なものだ。それは敵の力量にも現れる。戦いの中で、彼らは魂のやり取りを楽しんでいるのだ。

はじめに襲った街では、統率された兵と命がけで戦い、叩きのめした。敵の勇猛さには頭が下がる思いだった。

名乗りの変わりに旗印を揚げ、捕虜として住人を丁重に扱おうと終止徹底させようとしたときだ。

後からおっとり追いついた貴族兵がしたり顔で娘を集め始めたのには反吐が出た。

「・・・もう白旗振ってるんでさ。これ以上いたぶるのはごめん
で」

傭兵を率いる男がそう言って戒めたが、貴族たちは首を振らなかった。

「血の修正を行うのだ」

後一年もしないうちに、正しい血筋の子供が生まれることだろう。彼らの前でそうそぶいた貴族の顔が醜くゆがんで見えた。

王は眉をひそめたが周りの貴族どもは沸き立った。

また、彼らを止めもしない王にも嫌気が差した。

日毎夜毎、娘の悲鳴が響く。

傭兵達は憤った。

「頭！ 俺達、あんな事させる為に占領したのかよ！」

「・・・血の修正とはよく言ったもんだ。強姦だろうが。言葉を
変えたところで意味はかわんねえさ」

言葉を変えただけで、後ろめたさがなくなるのだ。獸性を抑えずともよいとお墨付きを頂いた貴族たちは、枷を外し畜生のように振舞った。

「・・・頭」

「ああ。末期だな」

冷めた眼差しで、傭兵隊の男たちは、貴族の振舞いを見ていた。止めれば不敬罪で首が飛ぶのは明白だった。

だが、悔しい。

そして何度目かの街襲撃をひかえた彼らの目の前に現れた獲物。堪えられない高貴な獲物。

常ならば、壇上はるか彼方。声どころか顔の判別さえつかない高みの彼方にいるはずの、貴人。

・・・エンダール王朝の王子だった。

「おお、王子だ！ あれをエンダールの痴れ者の前に吊るせば、かの男も嘆くであろうな！」

はじめに目にしたのは、好色で名をはせた貴族だった。

「王子を甚振れるなど、滅多にない好機よ。ふふ、手柄は誰のものぞ？」

舌なめずりしながら、同意していく獣達。

「・・・わしら、遠慮しますわ。子供を追い詰める趣味はないんでね」

そんな彼らを見て、傭兵隊は頭を振った。

彼らにとって、戦いとは魂の叫び。歴戦の勇者との、体を張った話し合いなのだ。・・・子供を追い詰めるほど落ちぶれちゃいない。

「ふん！ 腑抜けどもめ！ だがよい。向こうは子供がたった一人。我らだけで、のう」

「おお。姫じゃないのが、ちと、物足りんが・・・くくく」

貴族と呼ばれた下種どもは、ひゃひゃひゃ、と笑いあいながら、優勢なのをいいことに、余裕の顔で後を追った。

後に残るは、苦い顔を隠しもしない傭兵部隊だけだった。

「・・・頭あ。後味悪すぎつす。俺もう抜きたいよお・・・」

筋骨隆々の男が、眉を寄せて嘆く姿は悪夢のようだ。だが、この国の民を襲った幻は、もっともっと悪意に満ちていた。

「・・・今回ばかりは、選んだ国が悪かったなあ・・・。だが、あと少しで任期満了、晴れてごめんだ。もう少しの辛抱だぞ」

・・・そんなことを言い合った傭兵達の、気持ちがつつとするまであと少し。

後日、王族を追っていった貴族の連中がその顔が判別つかないほどの力で、めこめこにされた状態で、山中に転がっていたところを、兵士が見つけ出した。

なにがあつたと聞くと聞くと彼らは一向に口を割らなかった。

霞む記憶のただなかで、王となった男は確かに女の喜色に染まった声を聞いた。

「まあ！ やっと現れてくれたのね！」

・・・しかし、耳を澄まそうにも。意識が擦れてまとまらないのだ。

「さあ、王よ。もっともっと嘆きを与えてくださいませ。絶望を見せてくださいませ。もっともっと声が届くように」

女の青い瞳がうれしそうに微笑んだのを、記憶のどこかで男は認めた。

「楽しそうだな」

「ええ。我が君」

もっと絶望を呼んでくださいね、今度こそあの子を捕まえるの。

（あのことはだれだ）

問いかけは届かない。

銀の女はうれしそうに男の白いものが混ざり始めた髪を撫でる。

（・・・そういえば・・・）

銀の髪蒼の瞳の美貌の女。いつもいつも変わらぬ容貌。その美しさ。

（祖父の影にいた女だった。母の後ろに控えていた女だった）

侍女で寵妃で家庭教師で、母親で恋人で妹で・・・でも妻ではない。妃ではないのだ。

「お前はわたしのなんなのだ・・・？」

その問いかけに、女はゆったりと微笑んだ。

「そろそろお前もおしまいか・・・？」

エンダールの血に連なる者に、植えつけた種が疑心の花を咲かせるまで、もう少し時間がかかる。

次の傀儡がここにやってくるまで、お前にはあがいてもらわねば・・・。

圧倒的な絶望が欲しい。

お前が地獄という地獄を開いてくれねば、あの子がやってこない。

あの子がいなくちゃ、あの子が生きていけない。

「・・・あの子の助けが欲しいのよ。もう、わたくしでは助けにならないから」

「たす、け・・・？」

まどろんでいるのか、記憶を操作されているのか、それすら分からない。

これは自分の意思なのか、この女にあやつられているだけなのか。

これは誰の意思なのか。

「命令を」

囁くように女がいざなう。

「えんだーるの血にツナガルモノドモヲ、
・ ・ ・ センメツセヨ」

指し示した指先は、震えていた。

ありすインワンダーランドで舞う

「鍛錬？」

あたしは真剣な眼差しの騎士たちに囲まれていた。

半分前に出たディオが威嚇しているが、彼らも必死の様相だ。

半分泣きながら言い募る若い・・・見習いくんだな、これきつと・・・。

後ろに控えた金髪天使が腕組みしながら、こちらを見てた。

「ノーティス・・・貴様」

「ふん。いいではないか、こうしてありすが現れたのも何かの縁だ。日々の鍛錬をありすに見てもらいたいと願ってなにが悪い！」

「貴様に惚れる事は万に一つも無いのに？」

ベアトリーチェがぼそつと突っ込んだ。なにになに？

目の前にいた金髪マツチョ君が、ぼつと音立てて真っ赤になったが、なんだ、君、持病もちか？

ノーティス君は、近衛兵団の分団長なんだってさ・・・。

あああ、でもさあ。

「あたし今、非力なんだよねー」

うん。しかも太、細マッチョな君たち相手に、何の鍛錬をしろと？
殺生な。

「・・・別にありますが力無しになったわけじゃないよ。環が抑えているのは、力だけ。業や動きに制限は与えてないよ」

「・・・げ」

で、でもね、あたりや痛いし、打っても蹴っても痛いし！

「反射速度と、機転はかわらない、ということか？」

・・・待てコラ、ディオ。

な、なんでそんな真剣な顔であたしを見るううつ！

なんか、見えない尻尾が見えた。気のせいだと思いたい。

「ウワンコウに手合わせしてもらいたいなああああつ！」

「「「「「おおおおー！」「」「」「」

「足蹴り受けて、気絶したいです！」

「マウスル卿がおっしゃっていた、ぴんくの膝蹴りを、あごにひとつ！」

「じゃんぴんぐにーどろっぷ、受けて勃ちます！」

「やはり、某は呪の齎す大技、「ほくとひゃくれつけん」を・・・」

なんか違うもん混ざってるし！

「なんの、大技といえバ「なんとすいこけん」の麗しさに勝るも

のは無いと、イリリアス殿が！」

「いやいやそれならば、「ペがさすりゅうせいけん」の方が、拳ひとつの大技で！」

「「「「「・・・おお、そうだ、ありす殿。ところで、この呪文、どのような意味があるのです？」」「」」「」

ずっと謎だったのです。

悪鬼殲滅の呪文ですか？

身体回復の呪文ですか？

「・・・き・・・キカナイデクダサイ」

真剣な面持ちで質問してくる騎士さんたちの前で、あたしは真っ白に燃え尽きた。

う、う、過去のあたしに膝蹴り食らわしたい。

やや泣きが入って、たそがれていたら、なんか大声が聞こえてきた。

・・・ベアトリーチェだ。

「・・・この姿のありすを鍛錬場へ引き出せというのか、貴様達、それでも騎士か！」

ベアトリーチェが怒髪天をついていた。

金髪スレンダーな美女マツチヨはどこにいても目立つ。

金髪が陽を浴びてきらきらと輝いて、碧の瞳が怒りに燃え上がる。綺麗だった。

「ベアトリーチェ、どうしたの？」

「どうもこうも、おねえさま！ 非力な女性に組み手を願いたてる愚か者が多すぎます！」

筋肉マツチヨみんなたちはあたしのドレス姿を見て、ぼっとさらに

顔を赤くしてた。
しかもなんか。

「・・・そ、その、あのお姿で、く・・・組み手・・・」
ぜひ寝技を極めたいと思います！
マウントポジションはお任せしますから！

なんかいらん願いが聞こえてきた。ってか、マウントポジション
ってなに！

「あのお姿でじゃんぴんぐにーどろっぷを、食らったら、ス・・・
スカート奥の秘密の花園が・・・」
右翼の一角を構成していたマッチョたちが、前かがみになって鼻
血をふきだした。

「ぴんぐの膝小僧だけでなく、秘められし宝を目に出来るのか・・・
れ、れ、れーすの・・・」

マウスル卿の寡黙なお顔が火を噴いていた。
惜しいな。寡黙な伯父様が実はむっつりスケベな爺だったことが
判明しました！

なんか・・・残念だ。

「・・・・・・・・でも、みせばんだし」

「ディオオオオオ！」

悶えるマッチョたちを見つめていたディオが、ボソツというらん事を
言って、ベアトリーチェとつかみ合いをはじめた。

みんなあたしを見上げては、筋肉をふるふるさせている。仕草が

いやに乙女なのが、果てしなくヤダ。

なんだよ、その、恋する乙女みたいな眼差しはあつ！

あああー。なんだかなー。

魂ざっくり削られた感じだよー。

「ありすう・・・」

あたしの周りを心配そうな顔でちょこまか動くジン少年が、潤んだ瞳で見上げてきた。

今のこの状態の中、ジン少年を思いやるいい大人がいないのが大問題だね。

あたしは金髪わんこの金色の頭をよしよしと撫でてやった。

とたんにうれしそうに頬をばら色に染める、可愛い子。周りが必要な筋肉馬鹿ばかりじゃ、必要な情操教育受けてこれなかっただろうなー。お母さんはいるみたいだけど、いまだに姿見えないし。

「ジン少年。あんたはまっすぐ育ちなさいよ？」

「うん。だって僕、ありすのみせぱんになんか、興味無いもん！」

「うむうむ。・・・この年であつたら困るわー」

うう、癒しだ・・・。ふわっふわの金髪の手触り。このもふつてと言わんばかりのかまって攻撃。碧色の瞳。

愛い愛い。ぎゅうって抱きしめて。しばし。

心洗われそうだよ。

「・・・ふふ。僕が興味あるのは、みせぱんの中身だもん（下着風情に欲情して無駄玉撃つほど馬鹿じゃない）」

・・・あれ、今キミなんか、言った!?

なんか、ジン少年、癒しを覆す発言をしなかった!?

胸に抱いたジン少年をべりっと引き剥がして顔をまじまじと見つけた。冷や汗が出る。

でも、にっこり笑ったジン少年が可愛く小首を傾げて・・・。

「んんん、ねえありす。もっときゅうってして」

ジン少年がねだる様に体を押し付けてきた。

き、ききき、聞き間違いだよね！（汗ダラダラ）

・・・でも、第六感と言うのかな？

そんなある意味、一番危機的状态に陥っていたこの瞬間。頭の隅っこの何時もなら動かないところが、ぴくん、と動いた。

・・・だから、あたしは腕の中で尻尾振ってたジン少年を抱え込んで、とっさに地面に転がった。

間髪いれずジン少年が立っていた場所に、無骨な矢が突き刺さる。

刺さった瞬間の音が耳の奥で響く。同時に神経を研ぎ澄ませ、辺りをうかがった。さすがのマッチョ騎士たちも、厳しい瞳であたりを睨んでいた。

「ありす！」

ディオがすかさずあたし達の前に出た。

「来る！」

「ありす！」

「やだ、ありすうっ！」

ディオにジン少年を放り投げた。ディオはジンを抱え込んで背後に隠し、身を起こしてあたしを見た。

「ありす！」

待て。とディオは言いたかったんだと思う。

でもあたしは、ジン少年を手放すと同時に、地をけった。

身が軽い。力無しでも体は自由に動くのか。今はそれがうれしい。瞳の奥が熱くなって、耳鳴りがするんだ。瞬きすらしないで、ぐんと加速する。

あの、奥。あそこから矢は飛んできた。今なら、間に合う。

だん！と地面を蹴り付けて、天高く舞い上がった。

照準の射程内に、人影。

「にいいがああすかあああああああ！」

空気抵抗をなくした体中をばねにして、半回転を加えながら、右足に渾身の力を込める。着地の瞬間、逃げを打つ奴に、延髄蹴りを食らわせた。

でもいつもより威力が弱い。

蹴られた首筋を庇いながら、男が懷からナイフを持ち出した。

突いてくる剣の鈍い輝きを見据えながら、体を半分ひねって避ける。その際に左手で剣先を押さえ右肘を叩き込んだ。・・・ううん、弱いなあ・・・。何時もならゴギヤって言うのに・・・。

「力なし、か・・・。でも」

嵌められた首輪を思う。でも今更言っても仕方が無い、身動き取

れないようにして、拘束出来ればめっけもんだ！

「まずは、足止め。それから戦意喪失、か」

「こ、この、小娘ええっ！」

敵さんヤル気満々だし。あたしだって、逃がす気は、ない。

拳を握り締めて男が殴りかかってきた。

拳を左手でいなして、右足で相手のすね目掛けて上から・・・。

「斜め45度で打つべし！」

・・・いわゆる、ローキック、だ。

しかしここで手を休めたりなんかしない！だってあたし非力な少女だもん！（↑これ大事）

非力な少女でも相手のすねを、正確に上斜め45度で蹴りつければ、骨にえげつない振動が伝わって、立ってられなくなるって、格闘技好きな先生が言ってた。実際今まではそうだった。うまくいったら骨が折れてくれるんだ。しかし、いつもどおりなら骨砕いた段階で終わりなのになあ・・・。

そう、いつもと勝手が違ってた。

なまじ非力だから、たいしたダメージにならず、相手の戦意喪失に繋がらない。

技はあっても、確たる効き目が無いからなあ・・・。

あ、ほら、上半身が傾いだ。効き足痛めたくらいじゃ、戦意は失わない。

・・・だから、あたしは腰の高さで相手の腹を蹴りつけて、なお

下がったあご目掛けてつま先で蹴り上げた。・・・そんでとどめに振りかぶった足で踵落とし。完璧。

ごふうつとか言いながら男が倒れていくのをスローモーションのように見ていた。

「・・・目、覚まさないでね」

今動いたら、別な意味のとどめ食らわしちやいそうだわー。

縛り上げた奴は、貴族の子飼いだった。隣国の王様と手を繋いでいるらしい、古参の貴族だ。

へえええ、お約束なお家騒動があるのねー。何々、もしかして革新的な王様と、旧態依然のどっぷり利権に浸った奴らのいがみ合い？わあ。

んじゃ、軍部はどっちの味方なの？

へえ、王様。庶民の味方なのー。

貴族のお偉いさんの協力者はいるのー？ 中心人物はもちろんお隣の王様なんだろうけど。

あれれ、いるんだ。へえだあれ？

その質問に、困った顔で淡く笑ったのがディオだった。

「ありすに見えたいと願うのは、この国に住むすべてのものの願いだろう」

たんと話し始めたのは、ディオのお父さんルミナリスさんだった。

「金色の髪に碧眼の、初代エンダールに似通った面影の子供というのが第一関門」

「でもみんな、金髪碧眼で生まれるわけじゃない」

「それでも、年が近づくにつれ、子供たちは期待に胸を焦がした。明日現れるかもしれない守護天使との邂逅を」

「・・・でも、あえない人もいたんだ」

会えないまますごした者はやがて、少しずつ歪んでいった。ねたみ、ひがみ、血筋は同じなのに受け継がれなかった奇跡。甘受できなかった奇跡を羨み、彼は自分の存在意義をこの国の中で見出す事が出来なくなった。

力で台頭しようにも、及ばず。
知恵で名を上げようとしても。

「弟に出し抜かれて、爵位さえ失った。兄が逃げ込んだ先は・・・隣国」

ルミナリスさんが嘆くように諦めるように囁いた。

「私の兄と、マウスの兄。イリリアスの弟に・・・・・・・・ディオの兄だ」

「彼らはきっと、ありすを・・・」

なぜ現れるのか。

なぜ私ではないのか。

彼らはずっと問い続けている。

ありすインワンダーランドで暗躍するもの

神様！

お願いです。あの子を助けて。

神様！

どうして答えて下さらないの？

助けて。

叫んでいるのに、泣いているのに、届かない。

伝わらないのは、なぜ。

・・・おねがいです。

・・・もううごけないの。ゆびいっぱんすらうごかない。あの子がよんでいるのに。

・・・たすけをよんでいるのに、うごけない、の。

・・・でも、こえがきこえる。

こえがきこえるの。

荒い息遣い、逃げ回るあの子の足音。

・・・ききまちがえたりしない、だってじぶんのこだもの。

かみさま！

自慢の息子なんです。足が速くて、機転が利いて、ああ、あの人にそっくりなきれいな碧の瞳も。

知恵も勇気も申し分ない。長じればきっと国のため、王のため、身を粉にして働くでしょう。

剣が鞘走る音。刀身がかち合って、ぎいんと鳴った。荒い息遣い、逃げ場を探して踏みしめる草の音。

「――母上！」

焦ったようにわたしを呼ぶ声が、だんだんと泣くのを我慢するようになくなっていく。

・・・ああ、だいじょうぶとひとことだけでもつたえたいのに。

それだけであの子の気持ちも高揚するだろうに、情けないこの体。

・・・こえがでないの。にげなさいと、いけど、たったひとことすら。

私のあの子が「ははうえ、」と吐き出した。その顔すらもう見えない。

暗闇だ。

・・・銀色の悪魔と呼ばれる者がいた。

姿を見たものはいない。女だとも、男だとも、老人だとも、若者だとも言われている。

疫病をはやらせ、人心を弄び、操っては悪意の種を植え付け、開花するのを高みで見つめてあざ笑う。

・・・最早生きた疫病だ。

その訪れは人々を不幸にし、その行いは凄惨にして陰湿。

目を付けられた国は一週間で滅んでしまうと評判だ。

姿を見たものはおらず、だが確かに悪意は存在する。

・・・厄介な相手だ。およそ、相手にしてはいけない類の妖怪だった。

・・・そんな、魔呪の持ち主が、すぐ近くで眠っていたのは、僥倖なのか不幸だったのか。

ざわざわと、声がする。怒声、嘆願、悲鳴。

・・・それをわずらわしいと「ワタシ」は思った。まどろみから無理やり揺り起こされて「ワタシ」は憤っていたのだろう。

おねがいです、かみさま！

・・・神に祈っても仕方がないだろうに。

このからだをささげます。

・・・おや、おや、でもとても足りないな。

このたましいだってささげます。

・・・へえ。

おねがいです。

・・・わたしは神じゃないよ。それでも望むのかい？

願いをきいてくれるのなら、だれでもいい！

うででもあしでもめでもすきなところをもっていつて！

だから、おねがい。

・・・あのこを、たすけて！

・・・その願い。銀の魔女がしかと聞いた。請け負おう！

その瞬間、魔女の視界が赤く染まった。

ごとん。と落ちた首から、血潮が吹き出している。子供の悲鳴が響き渡った。それを、おんは見えていた。

『馬鹿！ 連れて帰れば褒美は思いの通りだろうに！』

『寝首をかかれるさ。何せ、俺たちは旦那と子供の敵になるんだからな！』

『・・・まあ、な。だが、良い女だったのに・・・』

『負わなくていいものは負わないほうが良いさ。・・・さて、あとは・・・餓鬼一人だ』

『貴様らあああああつ！！！！ よくも、よくもおおつっ！！！！』

子供の声を背中に聞きながら、魔女は事切れた女の元に歩いていた。った。

血だまりに手を浸し、赤く染まった指先を舐める。

血に刻まれた、生の記録が脳裏に次々と浮かんでいく。

事切れた女は、娘であり恋人であり妻であり母だった。

血潮の中、息絶えたおんなを見下ろしながら、黒衣の女はフードを脱いだ。

銀色の髪が一筋さらりと落ちる。見下ろす瞳は蒼。

「・・・お前の、あの子とやらは、お前によく似たきれいな子供だね。おお、お前の敵を討つ気だよ。刀を構えている。・・・まるで小鬼だ」

しかも力強い魂だ。王者の風格を持っている・・・が、ここを切り抜けられなければ仕方がないか。

・・・ほら、刀をはじかれた。

ああ、あちこち切られて・・・あの男達、遊んでいるつもりか？

だが銀の魔女が生還を約束をしたのだ。約定は果たさねばなるまい。

この「わたし」を揺さぶり起こした、母の願いを叶えるために。その血を代償に叶えて見せよう。

この土地が夢見る守護精霊^{ウワンゴウ}を呼び出そう。あの子供を守ってくれる、絶対の守護天使を！

満足そうに微笑んだ銀色の女の目の前で、金色の少年が今にも息の根を止められそうになっていた。

・・・させないよ。

約束したんだ。永の眠りを妨げるほどの魂の揺らぎをもたらしたあの女と。その子を守るのだ、と。

さあ。土地の魔力よ。守護天使を連れてきておくれ。この地に流された、命を代価に、銀の魔女が願うよ。

やがて空中から現れた黒髪の少女が、目を白黒させながらも敵兵を撃退し、何とか金色の子供を抱き上げて走り出した。

追っ手がそれを追いかける。

だがあの娘は強かった。

吃驚しながらも身を盾にして子供を守り、敵兵をなぎ倒して不能にし、土地の魔力の不文律にしたがってまた還されていった。

後に残るは金色の少年一人だけ。

『・・・アリ、ス。ウワンコウ・・・』

呆然と呟いて、いまさらながら駆けつけた近衛兵士に無事を確認されている少年。・・・彼は少年らしからぬ熱いまなざしで消えた黒髪の少女を探していた。

・・・そして、事切れた母親の遺骸を前に、透明な悲しみが押し寄せるままに、涙をこぼした。

その顔を見ていると、胸のどこかが痛み出す。魔女だった女は頭を一つ振りながら、霞む記憶に思いをはせた。

走り抜けていった記憶の渦。

「この女の、記憶、か」

夫らしき男と、子供との他愛のない生活の記憶だった。目を合わせ微笑みあう、何気ないシーン。

抱きしめられた逞しい腕。

抱きしめた小さな命。

あふれる思いをなんと言う？

「・・・毒されたか。ばかな」

だが、胸撃つ痛みはいまや自分の感情だ。

なぜだかあの子の前に駆け出して、その身を抱きしめたい。無事を喜び、怪我を癒して、それから……。

「……らちもない」

ワタシは、魔女だ。災厄の銀の魔女。

だが、指先からひたひたと浸み込んだ記憶の渦が、胸を焼く。

逃げたあの子の行く末が……気になって仕方がなかった。

「……見るだけだ……そう、ただ……助けた命の行く末が、見ただけだ」

そう言い訳しないと泣き出してしまいそうな感情に、魔女は恐怖を抱き、だが抗えない誘惑に山を登った。山に身を潜めてから、もう何年たったのか、魔女にすら分からなかった。

……それから、遠くから金色の子供を見つめることが銀の魔女の日常になった。

女が愛した金色の髪、碧の瞳。その夫だった男を眩しげに見てしまった。……他人のものなのに。だが、金色の夫が、妻を悼み遠い目で山麓を眺めていると、胸がうずいた。

……傍に、行きたかった。だが、叶えられるはずもない願いだ。何せ金色の女でもなければ、自分は銀の魔女。見つければ有無を言わず抹殺されるだろう。

だから遠くから見ているしかなかった。

金の子供が病気になれば他の何も手につかず、人知れず看病の真

似事までしてしまった。伸ばされた手を思わず取ったときは、自分をののしった。でも、うなされるように子が「ははうえ、」と呼ぶのだ。

手を取らずにはいられなかった。

金の子供が怪我をすれば、どんなに遠く離れていても駆けつけて、癒しの呪いを施した。それからその足で悪意ある呪いの類を潰して回った。・・・昔、自分がかけた、傷の治りを遅くする呪いも、綺麗に消した。

金色の髪に碧の眼のエンダールが、先の王を退け王位を継承したときは、自分のつかえるだけの破邪、破魔の呪いを国中にばら撒いた。

あちこちに刻み込んだ呪いのおかげか、疫病が激減し悪意ある人間が寄り付けない国になった。

いつしか、女の最後の願いは魔女の尊厳を覆す脅威となった。彼らの幸せを祈るのならば、この国にまいた邪な呪いをすべて、なかったことにしなければならぬ。それは自分の存在意義を覆すことだ。銀の魔女が破邪に動こうとは！

面白がって呪をかけて回ってた昔の自分をあざ笑う。

思えば魔女に、守るものなどなかったと、ここに来て銀の魔女は気がついた。

いつしか銀の魔女と恐れられていた魔女にとって、金色の王様とその王子は守るべき者となっていた。

エンダール王の善政は続いた。

穏やかな人柄で争うことが嫌いな彼だったが、国を脅かす相手にとっては鬼にもなった。彼は、優しいだけの元首が決して幸せをも

たらしえないことを知っていた。毅然とした採決は時に反発を生んだが、彼はよくやっている。

たった一人残された息子である金色の少年も、いつまでも少年ではなかった。父王について政治を志、戦が始まれば臆することなく前線に立った。今までの王族では考えられない出来事だ。王も王子も前線で一步も引かぬのだから。

だが、彼らはこう言うのだ。

「兵士は消耗品じゃない」と。

・・・遠くで指揮をしていれば、前線で戦っているものが人間であることを忘れてしまう。

戦を怖がって、物音に首をすくめて、敵が攻めてきたらがたがた震えるのが人だ。

敵も味方も前線に送られる兵士が人間だということを忘れているんじゃないか？

そしてわたしは王だ。

わたしがそれを思い知らなければ、戦など到底収めようがない。怖がらなければ妥協点など見つからないし、何より殺しあうより話し合いのほうがよほど良いだろう？

：だが、皮肉なことにそういう彼が誰よりも戦上手だった。

前線で兵士と共に戦う王。

それは、味方には何よりの戦意の鼓舞となった。

そして、人知れず施されていた銀の魔女の破邪の呪いが、エンダール初代王を「不死身のエンダール」と呼ばせることになる。

父王が不死身のエンダールなら、息子のほうは「命知らずのエンダール」と呼ばれた。

人知れず魔女が施した呪いは、かけられた本人が知るはずもなく、だがそれでも臆することなく戦場を駆ける彼ら親子の勇猛さは語り草となった。

・・・群れなす軍人の只中で、黒衣に身を包んだ（一説によると亡くした妻のための喪章だった）エンダール王が鬨の声を上げると、その威風に驚いた敵兵が、戦意喪失し捕虜となるほどに。

エンダールの第一子も勇猛果敢で名をはせた。

黒衣に身を包んだ、金色の髪、碧の眼は、理知的で、決して彼らが力押しだけで台頭してきたわけではないことを、敵方は知ることだ。そしてそれを知ったときはもうすでに遅いのだ。畏怖と敬意を持って見上げられる二人の姿に、銀の魔女は胸を篤くした。この二人を守り抜こう。魔女は思いを新たにす。

戦場で、城内で、銀色の魔女は人知れず王と王子のためにしばしば破邪の呪を行った。

・・・この頃には金色の少年の面影はなく、一人の凜とした若者だ。魔女は感慨深く彼の姿を遠くから見ていた。

金色の少年は長じれば、恋仲の女と結婚し、子をなした。その子がまたかわいらしい。

「・・・ほほ、父にそっくりではないか・・・」

眠る赤子を目にした魔女は、一つの考えにたどり着く。

愛しい子。だがまだまだ、きな臭いこの国の内外。

特にきな臭く、うるさい隣国の・・・。

・・・戦はまだ収まらないだろう。あの親子がいる限り。

・・・この子にも守護天使の加護を与えたい。でもそれには、沢山の悲劇が必要になる。

そう。

あの母親のように、大地を震わせ、魂を揺さぶる嘆きが。

その考えに至ったとき、魔女は身を一つ震わせた。

認めてしまえ。ワタシは彼らが愛しいのだ。はじめの感情はあの女が植えつけたかもしれないが、この胸に去来する感情はまさしく。

無上の愛。

叶うはずもない思いだった。何せ相手はワタシの存在にすら気付いていない。

だけど、彼らは紛れもなく、銀の魔女の天使だった。

愛しい夫で、愛しい「ワタシ」の子だった。

「・・・そうだ。あなたたちの幸せがいつまでも続くよう、この国に恒久衰えぬ破邪の呪いを施さねばならない。たとえば、あなたたちがワタシを知らなくとも、あなたたちはワタシの愛しい人なのだから」

・・・では、嘆きを集めればよいのだ。

見知らぬワタシが、幾程の嘆きをかき集めても、あなた達の負担にはならない。

・・・魔女だった女は、呪の種を一つ、隣国の王に植え付けた。
疑心、疑惑、錯乱。

・・・魔女だった女は呪の種を一つ、隣国に渡った女に植え付けた。
慢心、疑心暗鬼。

・・・魔女だった女は、動き出す。

嘆きを。願いを。祈りを。

いま、呪の花が咲く。

ありすインワンダーランドの影（前書き）

・・・このページちょっと痛い内容です。

ご遺体の描写や、死後出産などです。あんまり凄惨にならないよう注意しましたが苦手な方は、ご注意を。

ありすインワンダーランドの影

存在感のない女は、そこにいたが、だれも気付かないままだった。謀をくみ上げながら、呪の縦糸を操り、邪の横糸を張り巡らせた。

それは壮大な蜘蛛の糸。

隣国の王はすでに絡め取られて自我すらない。

隣国にわたった王妃も妖に魅入られて意のままだ。

もう少しで、叶うはずだった、呪の成立。

けれど、駒は時に思いがけない動きを見せるのだ。

浅いまどろみの中、銀の女は魂を揺さぶる衝撃で、隣国の王の腕の中、目覚めた。

「・・・どう、したのだ××××、よ」

王の応えに答えもせず、銀の女は掻き消えた。・・・残された王は、女が消えた事実に眉一筋も動かさず、日常に戻っていった。

・・・呪は、完璧だったはず。もうあと少しもしないうちに、あの高慢な高飛車女が王位を欲しがり息子を立てて父と争うはずだった。父と骨肉の争いを続け、女の息子が立つころには、この国は滅亡の一途をたどるはずだったのに。

国の断末魔の悲鳴を糧に、守護天使を誘い込むための呪いも施した。

すべてはエンダールの御世が、恙無く花開くのを見るために。

一緒に笑いあえなくても、その幸せを祈ることは出来ると思っていた。永く生きた魔女になら、造作もないことだと。

・・・それなのに。

あの子の慟哭が聞こえる。
嘆いて怒って祈っている。

「・・・なにが、あった」

城中にかけていた破邪の呪いが、壊れている。時折訪れてはかけ直しておいたのに。あらゆる悪意を纏った者が駆け抜けたのだと伺えた。

震える足を叱咤して、悪意の向かう先に進んだ。

頭から血の気が下がっていくのを感じていた。体温が低くなっていく。いやな予感を振り払い、振り払いながら駆けつけた先で。

血溜まりの中、絶望の咆哮を上げる金色の獅子の背中を見た。

金獅子がかき抱く「それ」は、小さな人形のようにだった。血に濡れてぐにやりと曲がった幼い足が揺れていた。

もうすでに息絶えた、二人の子供を抱きしめて、泣く彼の、目線の先に。

「・・・なんて、こと」

栗色の髪の子が倒れていた。瞳開けば碧の眼の、かわいらしい娘だった。エンダールの隣に立つにふさわしい、淑女。

笑顔の可愛い、呼ぶ声のかわいらしい、自慢の『嫁』だ。

さびしかったあの子が、『嫁』にだけ見せる笑顔がくすぐったく

て、うれしかったのに。

エンダールの血に連なる、いとし子が、彼らの足元を走り回るのを見ては胸が熱くなったのに。

・・・誰も彼もが、ワタシのいとし子から幸せを奪い去る。

『・・・×××、め。よくも、母だけでは飽き足らないか・・・』

いとし子は、隣国の王の名を叫んだ。

だが、違う。

あの王は最早ワタシの手の中だ。自我すらない。では誰が？ あの女狐か？ いや、いや、あの女にそんな知恵はない。あ

魔女は恐るべき思いにかられた。

この城内に、この子を害しようとする者がいるのでは・・・？
いや、それならば、妻子は人質にするはずだ。

殺して、憎悪をかきたて、戦火を切らせようとしているのか、愚かな！

では貴族院のばか者だ。

戦時中安全なところで惰眠をむさぼり、美味い汁だけ飲もうとしていた奴らであろう。おそらくは、最近の破邪の呪がけで、経営する荘園の実入りが滞るようになって焦ったのだろう。・・・なんせ、荘園とは名ばかりの売春所だったからな。領民の娘を買い取って、ひどい扱いをしていた。

この国の中でもその荘園は、邪がはびこって、なかなか浄化できずにいたのだ。

消滅させてやったのは・・・もうすでに半年も前のことだ。

だが、人の気持ちの濁りが、たまりたまって、情念と化したのだろう。使われていた女たちの嘆きも深かった。

利潤をめぐる対立も深まっていた。人の上に立つ者としてやってはいけないことをしていた貴族たちは、この前揃ってエンダールに蟄居命じられ、家名剥奪の罰を受けたばかりだったはず……。

逆恨みによる復讐劇、か。

だが、そこは腐っても狸。不死身のエンダール。先陣を切って出れば負け知らずの、常勝將軍、命知らずのエンダール。

……彼らの憎悪を誘い、戦端を切らせるつもりなのだ。稚拙なわなは、稚拙ゆえに残酷だった。

考えめぐらせる魔女の耳に微かな声が聞こえた。良く耳を澄ましていても聞き逃すだろうほど小さな声だ。

銀の魔女は蒼い瞳を極限まで見開いた。

「ま、さか」

声は『嫁』の体内から聞こえるのだ。

生きたい、と。ここにいて、と。小さな声が訴えかけてくるのだ。

一刻の猶予もなかった。

『嫁』は妊娠しているのだ！ 『嫁』の残り少ない命が消えれば、中の子供まで死に絶えてしまう！

銀の魔女は腹をくくると、黒衣の魔女としてエンダール二世の元へ身を表した。

『エンダールよ、嘆くがいい。喚くがいい！ 貴様の命こそ、とりそこなったが、今ここにある命、四つ。確かに銀の魔女が頂いた！』

『・・・四つ・・・？』

泣き濡れた碧の眼が、徐々に力を取り戻していく。エンダールは息絶えた妻をの顔を見た。きゅつと唇をかみ締めて、眉がよる。

そのいとし子の姿を銀の魔女は祈る気持ちで見守った。・・・気付け。お願いだ、気付いてくれ。

エンダールは腰に刺したままの小刀を抜いた。白くなった妻の頬を撫で、首筋を愛しげになぞり、腰を撫で。下腹部を撫でた。死んでいるかもしれない。だが、可能性があるのなら。

『ユリアナ、我慢してくれ』

エンダールは、己が妻の亡骸に刀を入れた。

慎重に切り進むエンダールの姿は鬼気迫って見えた。でも人の子だ。人の親だ。誰より愛しいものを知っていて、やらねばいけないことを知っている。

『・・・命三つはもう、帰らない。でも、最後の一つきつとユリアナは守っているはずだ。・・・貴様なんかに渡すものか、』

切り裂いた腹の中にエンダールが手を入れた。臓腑を探るように手を入れて、暖かな膜に手が触れた。その膜に覆われて、小さく蠢く胎動も。

『ここ、か』

エンダールは唇をかみ締めながら、愛しい妻の臓腑から、ずるりと赤子を取り出した。

母の体液に塗れて赤い、小さな命を抱え上げ、エンダールは銀の魔女を睨みつけた。

『・・・残念だったな、魔女。四人目は生きているぞ!』

びくんっと小さな体が震撼し、けほ、と羊水を吐き出すと、小さな手足を動かして赤子が泣き声を上げた。

『・・・その、ようだ、な。エンダール・・・』

この気持ちをなんと言おう？

銀の魔女はあかい唇を吊り上げて、酷薄そうに笑った。そうしないと泣き出してしまいそうだった。

『・・・し・・・仕方がないな、ではその子供はお前に返そう。

だが、この国の足元にお前を疎ましく思う輩がいる事を忘れるな。大国にばかり目をやると、』

『・・・貴様、隣国の手のものではないのか?』

エンダールがいぶかしげな声を上げた。それに構わず魔女は続ける。

『隣国など知らぬよ。努々忘れることなかれ、足元を掬われぬよう・・・』

待て! と上げた声は、赤子の声に遮られる。

魔女は魔女らしく顔をしかめると、エンダールの顔を指し示した。

『おお、うるさい。赤子の鳴き声ほど耳に響くものはない・・・』
そう呟いて、消えたのだ。

残されたエンダールは険しい顔のまま、取り上げたばかりの赤子を抱きしめて、事切れた妻の腕に赤子を抱かせた。それから、事切れた子供を抱き上げて、ゆっくりと妻の隣に並べていく。

金色の髪が綺麗な、碧の眼の長男と、栗色の髪、碧の眼の次男と。栗色の髪、碧の眼の愛しい人と。

泣きながら母を捜す、生まれたばかりのわが子。

・・・涙が、止まらなかった。

『・・・泣いておるのか、××××、よ』

隣国の王の腕に抱かれた、銀の髪の女は、王の言葉に頭をふった。

『いいえ。泣いてなどおりません。これは、そう、』

・・・鎮魂、だ。

子を残し逝かねばならなかった『嫁』の思い。

もっと生きたかったであろう子等の思い。

そして、死した母の胎内から父の手で取り上げられた子の思い。
生まれてきたあの子に幸あれと、ただ祈る。

今度こそ邪な呪いに打ち勝てるように、エンダールの地に幸多からんことを願って。

『・・・王よ、ワタクシ隣国の、×××地方の莊園が欲しゅうございます』

ワタクシから奪った奴ら。
代償は高くつくと思え。

ありすインワンダーランドの幻影

生を謳歌する声を聞いた。

小さな体が身動いて、精一杯自分を主張するのを見た。瞳も開かない幼な子は、生命力にあふれていた。

・・・時折、父が子の名前を呼んでいた。

「ディノッソ、お前は生きるんだ。母の分も、兄の分も」

赤子の名前はディノッソと言うらしい。

その頃、衰え始めたエンダール初代王が、身を引き、エンダール二世が即位した。

隣国はいまだにうるさくて、この即位を認めようとししない。

相変わらず篡奪者呼ばわりで、ほえていた。

ひるがえって、国内では、貴族院の力の均衡が危うくなっていた。新王となったエンダールの名声が高まるにつれ、肩身狭くなる古参貴族の連中。古参貴族を抑え、エンダールの信が篤い者達が台頭しました。新旧交代劇は、ちかい。

フフ、と魔女はしたり顔で笑う。

流れに抗う古参貴族は、隣国の王を煽って、この国の貴族と手を組ませ、内通者の地位確約と次代の王の後宮へ娘を招くことを、約束していた。

残り少ない地位に縋って浅ましい奴ら。

馬鹿な貴族たちは二国間でうまく立ち回っているつもりなのだろ

うが、そうはさせない。

・・・ワタシの可愛い『嫁』とかわいい子を殺した奴らに、なんの見返りを与えようか。

裏切り者の屈辱と、売国奴のそしりと怒号、それでも足りない。足りないのだ。

およそ考え付く限りのありとあらゆる屈辱と苦痛を与えたい。

罵られて、憎まれて、悪鬼のように追われなければいけない。

老若男女誰もが、嫌悪して、罵って、踏みにじっても、後悔しないほどの悪役に仕立てるのだ。

憐憫の情など抱かせず、泣いて懇願する姿さえ唾棄に値すると思われしめ、人としての尊厳を根こそぎ剥奪して、野垂れ死にさせるのだ。

・・・そして、この国に残された膿を出し切る。

ワタシのいとし子の御世に、腐った奸物はいらない。

・・・ああ、それにしても。

銀色の魔女は目線を下に下げると、滅多に見せない笑顔を浮かべた。

魔女の視線の先には、ベビーベッドの中で毛布と格闘する赤子が一人。んうーんんー、とうめきながら毛布を引っ張っては足で蹴り上げようとしていた。

「・・・これ、風邪を引くではないか」

思わず伸ばした指先を、赤子がぎゅっと握り締めた。そのまま、珍しいものを見るかのように目がきゅるきゅると動く。

・・・赤子とはなんと柔らかくてこうもいい香りがするのだろうか。赤子のさせるままに指を遊ばせながら、銀の魔女は一人ごちた。

小さな手や足にちゃんと指が揃っていて、その指先には小さな爪まで揃っているのだ。

きつと。小さな手は、いつか何でも掴めるだろう。小さな足は、望むモノを手にするために、どこまでも歩いていけるだろう。

希望に満ちた、塊だ。

腹が減ると、ほあほあ泣いて、庇護を叫ぶのも可愛い。

一生懸命、毛布を足で蹴りながら、少しでも自分の見える世界を変えたいと身動くのだ。

・・・そして時折見えてないはずの瞳で、ワタシを捕らえる。

赤子の瞳に必死の色を認めて、魔女は自分が必要とされている幻想に陥った。・・・そんなはずはないと知っているのに。

「・・・心配せずとも、また、くる」

それでも、そう呟くのは、魔女の方が離れがたいと感じているからだ。

次は何か土産を持ってこよう。ここにあってもおかしくない、誰も気付かないもの。

柔らかかなりネンでも探してみるか。ここにあるのと同色の、白か青の肌触りの良いタオル。

「タオルで何か形作るのも良いかもしれんな」
赤子の退屈を紛らわすにふさわしいものを。

銀の魔女は銀の髪を揺らすと、消え去った。

・・・後日、赤ん坊のベッドの中に、奇妙な形に畳まれた、タオル人形の姿があった。客観的に見て、可愛らしいとは言えない出来だ。

『・・・乳母、か・・・？』

父エンダール二世王が思わずつまみ上げ、目の前にぶら下げて、首をひねったものだが、赤子にはお気に入りのおもちゃだったようだ。

・・・すぐに泣き出した。

『・・・あ、ああ、すまん、ディノッソ』

父親は、慌てて人形を子に返した。

奇妙な形のタオル人形は、それから永い間、エンダール王の子守部屋に鎮座していた。不思議なことに目を離すと新しい人形が増えている。奇妙に思いながらも、乳母が始めの人形を模して作ったのだろう、と誰もが思っていた。

ディノッソがその部屋を出た後、他の王族の子守部屋となった時も、いつか、人形はそこにあった。

人形はエンダールの血に連なる子らの成長を、ずっと見つめてい

たのだ。

「奸物も極まったな。今まで我らを騙したぶんも購わせるとしよう」

近衛、騎士、兵士が列を作り並ぶその前で、壮年の王となったエンダールは鬨の声を上げた。

二世王の代になり、治水、教育、貿易に力を入れた彼の国は、肥沃な大地を復活させ、国の隅々まで潤う、作物豊富な農業と、その作物を輸出する主要大国になっていた。

また人材育成に暇をかけず、熱心に教育を施したお陰で、商工業人の活躍が目覚しかった。

そして、王位継承一位のディノッソももう幼いだけの少年ではない。

父王の厳しくも温かい眼差しに後押しされながら、知者について知を磨き、騎士について礼儀と技を磨いた。着実に力を磨き、確実に階段をのぼる、幼かった彼も、もう、十三歳、立派な騎士だった。

「ディノッソ。堅くなるなよ、私が初陣を体験したのも十三歳だ。お前なら大丈夫だ」

父エンダールの力強い声が聞こえる。

「・・・守護天使ウワンゴウの加護がありますように。・・・ふ、あの時も、父が私にそう言ったな、・・・懐かしい」

「ウワンコウ・・・アリスですか。父上」

何かの折に、父王がウワンコウの話をしてくれた事を、ディノツソは覚えていた。

「・・・ああ。だが、奇跡は起こらんよ。自分の身は自分で守れ。不味い、と思えば退散してもいい。逃げて来い」

「・・・そ、れは承服しかねます、父上。初陣なのですから、卑怯者にはなりたくありません」

「馬鹿だな。生きてこそ道は開ける、生きていればこそ、だ」
逃げることは卑怯でもなんでもないさ。かえって、勝ち目もないのにそこに留まって戦を仕掛けるなんて、馬鹿のすることだ。

「なにが何でも生きて帰れ。それが出来ない奴に王位なんかやれん」

明日死ぬかもしれない血気盛んな王に、誰が喜んで付いて行くんだ？

それに釈然としないものを感じながらも、ディノツソ少年は頷いたのだ。

彼らの従軍する先に、隣国との国境近い領地がある。

古参貴族の領地だった。先の王家とのつながりも深く、そのため先々代の王族に顔が聞いたことも災いした。

彼らは表向きエンダールに忠誠を誓いながら、先の王に文を送り、姦計企て、城内に敵兵を引き入れようとしていたのだ。・・・十三年前の悲劇と同じように、うまくいくと思っていたのだろう。

生れ落ちたその日、母と兄二人は彼らに殺された。父は身籠っていた母の胎内から私を引きずり出したと言う。

のらりくらりと糾弾を交わす狸を相手に、父は消耗戦だと思っ
てかかったそうだ。

だが、逃れられない決定的な証拠を、ひょんなところで見つけた
り、死んだと思われていた証人を見つけたり、と色んなことが沢山
あって、気がついたら狸は自分で自分の首を絞めていた。

「・・・運がよかったでは済まされない程、運がよかったんだ」
と、あの父に言わしめた程、とんとん拍子の捕り物劇だったようだ。

だが、民に与えた衝撃は計り知れなかった。母は民にとっても慕わ
れていた。母を殺したものが隣国の王の手のものであれば、戦端が
開かれるはずだったほどに。

だが、古参貴族はそれをこそ願っていたのだ。
戦は、武器や兵士を抱えている地方領主にとっては、割の良い商
売だった。

獣のように、相手を沢山殺せば英雄に、進軍して勝てば領土を広
げられ、奴隷を増やすにも調度良い。
そして万が一負けを悟ったならば。

エンダール王の背後から、王の首を取れば良い。

そう言って笑ったのだと言う！

その事実を知ったときの父と祖父の怒りは果てがなかった。自国
の貴族に足元を救われたのだ。あまつさえ、若い皇太子妃とその次
代を担う子まで黄泉路へ追いやられたのだ。

地道に集めた情報と証拠の品は、子を庇う母を、その幼い息子を
手にかけて、悪辣の徒として民の目には映ったのだろう。処刑台に

送られた狸を擁護する声は皆無で、罵りと怒号が飛び交い、厳しいまでの眼差しに満ちた場になったと言う。

いまさらながらに己が仕出かした事柄に首をすくめる狸の前で、かわった者達が惨たらしく旅立っていくのを狸は見せられ、気絶できても水をかけられ起こされる。

延々と断末魔を聞かされて、ようやく自分の番だと安心したとき、父エンダールは厳かに告げたと言う。

「・・・まだ、だ。貴様の姦計に乗せられたこやつ等も愚かだが、乗せた貴様の罪はさらに重い。まず、処刑した奴らを墓に収めねばなるまい。明日より墓穴を掘り、貴様一人で埋葬せよ。急がねば、仲間が化けて出るぞ」

・・・そうして、狸は処刑されたかつての仲間の遺体を一人残さず埋葬するまで処刑はされず、毎日毎晩遺体と共に寝起きたそう

だ。

最後の仕事・・・自分の墓穴を掘ることの許可をもらえた時、狸は泣いて喜んだそうだが・・・定かではない。

・・・だがそれほどの怒りで迎えられれば、萎縮して二度と同じ過ちはすまいと思うだろうに、その息子がまた同じ事をしようとしたのだ。城内に入り込んだ賊は、あっさりと近衛に抑えられたが、聞き出した情報は、聞いていた父の顔色が白くなるほど、恐ろしい内容だった。

・・・中央を追われた貴族階級の男達が、揃って反旗を翻したのだ。

その領地の民は、人足や、戦う訓練を強制的に受けさせられ、女は売買され、資金確保に使われているという。

どこまでも、卑怯な奴らだった。

ディノッソは少年らしい潔癖さで彼らを嫌悪した。なにせ、母の姿を絵姿でしか見れないのは、奴らのせいだ。母の声も眼差しも、手触りも匂いもすべて・・・知らない。

生きていたら兄とだって喧嘩をしたり、仲直りをしたり出来ただろうに。

だから見えたときは正々堂々戦って、敵に後ろを見せたりしない
と
思
っ
て
い
た。

でもそれは戦を知らない少年だから言える言葉だったのだ。

はあ、はあ、と意気が耳元で聞こえていた。自分に聞こえるのと
同じほど、相手に聞こえていたら、と恐ろしくなる。何とか息を整
えて、周りを見渡す。

足元には、自分を守ってくれた最後の護衛兵。
守ってくれる相手はもう、いない。

絶望が襲い掛かってくる。

相手の貴族たちは、貴族とは思えないほど下劣な顔で、藪を切り
裂いては獲物を探していた。

獲物。

自分、だ。

「でてこいよ、おぼっちゃん！」

「かわいがってやるからさー！」

そう嘯いては、ぎゃはははと笑うのだ。甚振られているのは明白だった。

地方へ追いやられた貴族の日ごろの鬱憤晴らしと、皇太子だと言う明らかな容姿が目に残まってしまったらしい。

周りを固めていた四人の護衛もすべて息絶えてしまった。

心細くはあるが、それでも無様な最後は見せたくない。

・・・一人でも多く道連れにしてやる。

ディノッソは刀を握り締めた。

目の前を踏みしめて歩く、足をやり過ぎ、草むらの中で息を殺してチャンス伺った。

細身の剣を突き立て、すぐに引き抜く。そしてまた草むらに身を隠す。

男達の焦りは目に見えている。子供だと思って侮っていたのだろう。

慌てる奴らの視線をかいくぐり、一人、また一人と倒していった。

だが・・・数が多すぎたのだ。

追い立てられ、切り付けられ、命乞いをしろと嬲られ、それでも口をつぐんでいると可愛くない餓鬼だと罵られる。

蹴られ殴られ、切りつけられて、痛む体を支えて、それでも立った。

ディノッソを奮い立たせるのは、父の勇姿だ。決して怯まず、前を向く背中だ。

あんなふうになりたかった。

その、父の言葉が脳裏に浮かんた。

『なにが何でも生きて帰れ』

それにクス、と小さく笑って顔を上げた。目線の先には数にものを言う卑怯者が、獲物を嬲る眼差しでディノッソを見ていた。

・・・すいません、父上。わたしまで、親不孝をしてしまいそうです。

奴らをギンッと睨み付ける。剣呑な眼差しに少し引いたようだが、それでも下劣な笑いは止まない。

数に安心しているのだろう。

あと何人、道連れに出来るかな、と思いながらディノッソは刀を持つ手を動かした。利き腕に鋭い痛みが走る。

・・・でも最後まで、醜い命乞いはしたくなかった。

「うあつ！　そこ！　ど・・・どいてええええええ！！！」

・・・だから、

奴らに切りかかろうとした瞬間、

空から天使が降って来るなんて、

思ってもいなかったのだ。

・・・どう言い表せばいいのだろうか？

「あ・・・あ、あゝゝゝ・・・退いてって言ったのに・・・」

奇妙な着物を着た天使が、敵方中心人物の脳天を見事踏み抜いて立っていた。

父エンダールを助けてくれた守護天使が、もう一度姿を現してくれた瞬間だった。

ありすインワンダーランドの過渡

・・・父エンダールは、忙しい合間を縫って、私に色んな話をしてくれた。

会ったことのない母のこと、一緒にいられなかった兄弟のこと。

思いつくままに父の話は時代を駆けた。父の中で彼らの姿は鮮明で、今も焼きついているのだろう。

初めての子・・・一の兄が笑った日のこと。

二の兄が立った日のこと、歩いた事。

一の兄が差し出した綺麗な花、二の兄がかじった棚板の跡。

一の兄の初めての靴。二の兄の初めての靴。二人揃って落っこちた中庭の噴水。

「ディロッソは花が好きで生き物が大好きなんだ。大事に手の中に収めてよく走ってきた」

目の前で開いた手の中で、甲虫が蠢くんだ、おどろいたな。

「ディロッシは歌う事が好きで、楽器をいじるのが好きで、よく歌ってた」

城中探していない時は、王宮お抱えの楽団で楽器を奏でていた。

筋がいいと褒められて、本人その気になっていた。

取りとめもなく、話は続いた。話の中で彼らは生き生きと生きていた。父は母が好きで、ディロッソ兄もディロッシ兄も大好きなんだと伺えた。

彼らの話は数あるけれど、中でも好きな話は母との初対面の時の話だった。強請れば父は相好を崩して、うれしそうに聞かせてくれ

た。

母がいやみな貴族娘に虐められていた事。でも本人けろっとしていた事。

「生家があまり裕福な貴族じゃなかったからね、しかも媚びることを知らないんだ。敬って傳いて顔色を伺うのが当たり前だと思っていた上級貴族の娘には、目障りだったのだろうな」

・・・なんせ、母はおっとりした美人で、その姿は清楚で可憐。まさか食って掛かるような女には見えなかった事も災いした。

家名はさして高くもない、けれどおとなしそうな美女。・・・それは鼻持ちならない貴族娘にとって、ライバルになるはずのない格好の「生贄」で、高慢な貴族の後継者にとっては、態のいい性欲処理の相手・・・妾候補だ。虐められた娘を庇って恩を売るのも良い。皆で笑いものにして、貴族娘の関心を買うのも良い。そんな打算が見え隠れした場面だった。

「ユリアナは格好の餌食だったんだ。その時まででは、ね」

貴族娘がわざとかけたワインの赤が、白のドレスを汚していくのを目で追って周りの貴族が笑っていた。

彼女のエスコートを勤めていた相手が、汚されたドレス姿の彼女のエスコートを拒否したこと。それを周りの貴族たちが嫌な目つきで笑ってみていた事。

好色で名をはせた貴族が、そんな彼女に近寄ろうと手を差し伸べていた事。

「彼女は困っているように見えなかったけどね、でも彼女を、一人にしては男が廃る。・・・そうだろう？」

父は私にウインクした。

そして、彼女を救うヒーローになるべく一步前へ出た王子様が、彼女にひざまずく瞬間が訪れる・・・誰だって、そう思うはずだ。私だって最初はそう思っていた。絵に描いたような王子との出会いを想像したんだ。

でも、実際は違うんだ。

母は、まっすぐな眼差しで周りを取り囲んでいた貴族連中を見たそうだ。

父はそのときの母の姿を鮮明に思い出せるそうで、まるで夢見るように父は笑うんだ。

そのときの母は、白いドレスの肩口は真っ赤なワインで彩られ、大振りのバラのコサージュをつけているように見えたそうだ。しなやかな腕が優雅に動いて、右頬に手を添えて小首をかしげ、碧の瞳に憂いと陰りを添えて、父の目には美の女神に見えたそうだ。

美の女神がまずしたことは、大きなため息だった。それからやれやれと言わんばかりに頭を振ったらしい。

「・・・バイスフォード公爵家の姫君と存じます。お初に御目文字いたします、スタンリー子爵家のユリアナでございます」
完璧な淑女の礼だったそうだ。当の公爵家の姫が気後れするほどの。

「さて、姫君。弱小貴族と言えどスタンリー子爵家はエンダール王の名の下、当主は外交の尖兵を勤めております。姫君、私は父の威光を笠に着ようとは思いません。思いませんが、外交手腕で王に

召抱えられた父を敵に回す事の愚かしさを、お考えになられた事はございますか？ それとも、すべては公爵が握り潰してくださると思っただけじゃある？・・・先ほどお帰りになれたリーヴァイア男爵令嬢、サバイアス子爵家の令嬢、ドレスを破られて急遽お帰りになったヴァイス侯爵令嬢・・・彼女たちのように、私も泣いて帰ると思いましたが？」

高飛車な姫君にとって思わぬ反撃だったらしい。目を白黒させて周りに傳く男達を見た公爵家の姫を見て母はまたため息をついたそうだ。

「・・・幼い。幼すぎる。耳障りの良い御伽噺の中から出てらっしゃい、姫君。そしてご自分で考えて御覧なさい。淑女にあるまじきこの行為、そして諫めもしない騎士にあるまじき行為の数々。恥ずかしいとは思いませんか？ このような行いを許すエンダール王だと思えば、即刻お帰りなさい。彼の君はこのような行為こそお厭いで在らせられます。前王が如何にしてその地位を追われたか、姫君の父上は教育なさるんだか。そして諫めねばならぬ立場にありながら、諫めようともせず迎合する愚か者達、姫君の傍に在る騎士として恥を知れ！ 妃の地位が欲しいのなら、器量を磨くより前に教養を磨きなさい。その前にいっそ幼児教育を修めなすか。幼子の方がよほど善悪を心得ておりますぞ」

「な・・・！」

「姫に向かってよくもそんな戯言を！」

「能無しはお黙り。・・・敵はよく吟味して作るものです、姫君。それすら出来ん幼子が、国の要の国母となれる、と・・・？ 馬鹿な！それこそ、一大事！」

母の言葉は、いっそ天晴れな啖呵だった。

「さて、姫君。私の父はこのたび幼児教育の館を設立いたしましたし

た。栄えある第一期生として姫の名を連ねたく思い、願います」

なに、私が責任もって一から教育しなおしてあげます。

どこに出しても恥ずかしくない、淑女、一国の妃として申し分ない乙女に！

「な、なにをおっしゃっているの、無礼な！」

半ば怒りで震えながらお付の騎士に支えられたわがまま娘は、こわばった顔で母ユリアナを見たそうだ。

「・・・おかしなことを。無礼とは、あなた方のなさり様でしょう。社交界デビューの洗礼としてはいささか幼稚ですがね」

そう言い切って、母は彼らを見据えたそうだ。碧の瞳がじつくりと切り込んで、彼らを飲み込んでいった。

「情けない。・・・この程度の切り返しにおどするようじゃ、器が知れる。びしびし指導しなければなりませんね、こんなのが妃候補筆頭じゃ、隣国の海千山千の王妃に太刀打ちなど出来ません。足元見られて蹴落とされます。

大体。

妃候補と言う肩書きが本当なら、国母という立場にいずれなるお方。

妃となり国の母となるお方が、自分の美貌にしか興味ない馬鹿・・・ああ、言いすぎでしたか？・・・でも事實は動きませんね！正直申し上げて、こんなのが国母になったら、恥ずかしくて隣国に赴けませんわ！」

お爺様の外交手腕を間近で見ていた母は辛辣だったと言う。

妃争いに角突き合わす女を、呆れた目つきで眺め、国益の何たるかを論ずように説教し始めたと言うのだ。

「父上、それで？」

「……いきり立った貴族娘に扇で滅多打ちにされそうになって
ねえ……」

咄嗟に前に出て彼女を庇ったんだ。

しみじみと語る父の眼差しは穏やかで、うれしそうだった。

女性教育に力注ぐ母の姿勢に引かれ、義父譲りの政治見識とその
目の付け所が面白く見えたそうさ。一度見詰め始めたら、これ以上
面白い女はいないと思うようになった。

一時などは、本当に貴族の娘を集めて「打倒！国母への道！エン
ダール様の落とし方！」と銘うって、淑女教育に血道を上げていた
よ……。

「……なんですか、そのフレーズは」

「なんなんだろうねえ」

そのときはもう私の心は彼女に囚われていたのにね、切なかった
な。真に受けてくれないんだよ。

倒しちゃいけないと思う、その道を、踏み倒して突き進もうとす
る母ユリアナを、苦勞して獲得した父だった。

父は夢見るように母を語り、ふたりの兄を語った。

ぽっかり空いた溝を埋めるように、刷り込むように何度も。

母は栗色の髪で碧の瞳の、かーなーり、お茶目で可愛い人だった
ことや、父にそっくりな金髪碧眼の一の兄の事、母の面影そっくり

な二の兄の事。

私のいない四人家族の情景は、とても美しく、温かい。完成された家族像。「それ」に混ざれなかった事が悲しい。

父のような寂寥感は、正直なかった。漠然とした寂靜があるだけだ。

父が求めるように、母を求める事はなかったし、兄を恋しがる事もなかった。

はじめから私には父しかなかったからだ。

ただ、父と分かち合えただろう悲しみを、私は父ほどに返せなかったのが歯痒い。時折、母子連れを見ると胸が痛んだが、どちらかと言うと、父を四人家族の時の父のように笑わせられない自分が、悔しかった。

だが、それだって仕方がない事だ。

私は母の代わりになれないし、兄の代わりになれない。

そんな父が、あるとき守護天使ウワンコウの話聞かせてくれた。

夢見る瞳で、でもどこか痛みをこらえる様な面で、空から降ってきた天使の話をしてくれた。

・・・きつと、守護天使は父の初恋の少女なのだろう。

「ユリアナも、同じことを言って笑ったよ」

そう言って微笑んだ父は、瞳ににじむような愛を込め、母の肖像

を見つめている。

初恋の甘いうずきは守護天使に。

愛情の全ては母ユリアナに捧げたのだと、父は笑った。

もう二度と会えない母の面影と、守護天使。

父の記憶の中の女神達。

まさか会えると思ってもいなかった。

追い込まれて、死を覚悟したあの時。空から降ってきた天使は、
なんと言うか・・・強かった。

およそ戦いと無縁そうな少女が、私に向かって剣を振り上げてい
た男の横っ面を張り倒すんだ。・・・ものすごい勢いで男が飛んで
いった。

本当なんだ、まるで風に飛ばされる帽子のように、飛んだんだ。
見間違いじゃない。

・・・驚いた。

だが、天使一人、しかも少女だ。

なにを考えているのか丸判りの顔で、男たちが少女を取り囲んだ。

「・・・女、だぞ」

「餓鬼はあとで殺すとして、」

「・・・おい！　だが、こいつ、見ただろう、あの力」

「なに、全員で押さえ込んでしまえば良いさ。あとは・・・」

・・・下衆なやからはどこまでも下劣になれるらしい。

隣国の貴族もこの戦に加担していて、一緒に民族浄化と称しては、集落を襲っているらしい。年端もいかない少女まで乱暴されていると聞いて、父エンダールが唾棄していたのを思い出した。

「あります！」

獣のような奴らだ、油断するな、と注意を促すと、ありますが一歩前に出た。

『うん。わんこ少年、ちょっと下がっててくれる？』

なにを言っているのか判らないのが残念だ。でも腕をつかまれ、少女の後ろに庇われた。・・・情けない。

「あります！　私も一緒に！」

『んー、ごめん、なにいつてるか、わかんない、やつ！』

気合の入った言葉と共に、ありますの拳が襲い掛かってきた男の鳩尾にめり込んだ。・・・そう、めり込んだ。その瞬間、男の体内から、ごぎつと言う音が聞こえた。骨が、折れたのだろう。

背後に守られながら、ありますが次々と男達を再起不能にしていく。

肘で相手のあごを潰し、振り返りざま裏拳を叩き込む。

膝で腹を蹴り上げ、拳で背中を叩きのめし、同時に蹴り上げた足でもう一人を地に静めた。

切りかかってきた奴をつま先で蹴り上げ、かえす踵で脳天に蹴り

落とす。

次から次へと襲い掛かる男達を、蹴り上げ、殴り倒し、張り倒しながらありすが叫ぶ。

『恥を知れ！ 大の大人が寄って集って、ちっさいわんこを甚振ってんじゃないわよ、この、いじめっ子めええええ！』

・・・今だに言葉はわからないが、ありすの言葉は詩のようだ。

焦って大振りになった相手の剣を片手で受け止め、ありすが軽く拳を当てた様に見えた。

「ーっーなっ、馬鹿なっ！」

男が慌てて手元を見ている。それも道理。・・・ぽっきり刀身が折れていた。

剣を持っていた男も驚いていたが、私も驚いた。刀身は確か鉄製だったはずだ。それを、素手で・・・？

数を嵩にかかっていった男達の剣が、ことごとく交わされ、押さえつけられては根元から叩き折られ・・・男達の顔色が変わって行った。

やがて、一人の男がへっぴり腰になりながら背後の部隊へ声を限りに叫んだ。

「で・・・であえ！ エンダールの王子だ！ 取り押さえた奴には、金でも地位でも思いのままだぞ！」

その声を聞いて私は、ありすの白いシャツを引っ張った。・・・ぐにん、とよく伸びる不思議なシャツだ。振り向いたありすに、身振りで逃げることを進めた。腐っても王子、女性にこれ以上庇って

もらったら、男が廃る。

・・・それに、だ。

ありすの白いシャツは汗で肌に張り付いていて、空けた肌色が垣間見えていた。

背中を横切る白いラインが、何かわからないけど胸をざわめかせたし、胸元には大きく呪文が描かれていて、動くたびに腰の辺りの素肌がちらり見えて動悸が激しくなった。（守護天使とはかくも、鼓動を跳ねさせる生き物なのか）

・・・さらに不埒なことにすらりとした足はむき出しだった。男でもそんな心もとない格好はしない。躍動する青い尻^{パンツ}が目の前で動く。

見事な足技を繰り出すたび、白いシャツが、青いパンツが体のラインをくつきりと浮かべるものだから、私でさえ目のやり場に困ったのに、敵方の男たちは一層目をぎらつかせた。

そんな格好で男の劣情を煽ってどうするんだ、と焦ってしまった。

呼び声に答え集まるだろう敵兵を避けるため、私は、敵陣を走り抜けるつもりでありすの腕を取った。・・・それがいけなかった。

『三十六計逃げるに如かず!』

「うあ、ああありすううつつ?」

声が裏返ってしまった。

だって仕方がないだろう?

振り返りざま、ありすが身を低くした、と思ったら。

ひょいと腕に抱き上げられて、ありすが走っていたんだ。

・・・父上、この場合、男性は女性のどのあたりを掴めば宜しい

んでしょうか・・・？

いや待て。そもそも私は抱き上げられるほど幼くはない。だが口を挟む余地もなく、軽いパニックに陥ったまま、恥ずかしいが抱えられたまま逃げたのだ。

逃がすな、追え、と声が遠くで聞こえる。

景色がどんどん背後に流れていって・・・気がついたときは敵陣から抜け出せるところまで来ていた。

『わんこ少年、痛くない？ 痛いよね、もう少しだから、我慢してね、』

心配そうな顔で私の顔を覗いてくるありすの肩のはるか向こうに、父王の旗印が見えた。

その旗を見て喜色を浮かべたのだろう、私の顔を見ていたありすが、あの旗を指さし、首をかしげた。

それに頷けば、ありすは判ったと言うように頷いてくれる。

そっちに足に向けたとき。

ありすの纏う雰囲気に変化した。

ざっと見渡すだけで、十数人。身なりも野卑な男達だ。・・・傭兵、か。

ありすに抱きかかえられたまま険しい眼差しで見やると、中の男が一人、肩をひよいとすくめた。

「・・・なんだ、うさぎか」

そう言ってきびすを返す。

周りにいた野卑な男達も、さっさときびすを返した。

そのまま、ずんずん進んでいった男達を見ていたら、残ってた男に行け、と背中を後押しされた。

言葉のわからないありすも、私だって突然のことで気が動転していた。敵のはずだった。

その時、向こうから誰何する声がした。

慌ててありすが身を低くする。息を殺して声の主を探した。

「うさぎ」と証した男と、傷を負ったあの、嫌な目をした男達だった。

「いたか！」

「いいえー。いませんでしたよー」

「出てくるのは野鼠とうさぎばかりでさあ、こっちに来てないんじゃないんですかー」

貴族に飄々と答えている。

「くっ！　では、さっきの分かれ道で向こうへ行ったか！」

「せっかく小僧を追い詰めたのに、貴様たちがもっと早く駆けつけていれば！」

「あー、はいはい。あっちですねー」

ぼこぼこにされても貴族の男は優位だと思い込みたらしい。残っていた男が、慎重に貴族たちの行く道を見つめていた。

それから、こちらの藪を見て、にっと意味深に笑うと、わいわい言いながら貴族のあとを追いかけていった。

一人残っていた男が辺りを見渡し、またありすの背中を押した。

『・・・ええと、なんか、助けてくれたっぽい・・・？』
「ええ」

ありすの呟きは言葉が通じなくとも、こころ通じる不思議な言葉だ。

それからなるべく聞き耳を立てながら、旗印目指して山中を走った。

目の前に見覚えのある騎士の姿を見つけて、柄にもなくほっと力が抜けてしまった。

それに気付いたのか、ありすが腕から下ろしてくれた。

『もう大丈夫ね・・・？』
さらりと。

黒髪が肩口から落ちていった。さらさらと、静かな流れだ。
その髪の動きに目を奪われて、黒い艶々した瞳に吸い込まれるような気分になった。

それから、急にありすの質感が薄れていって、慌てて手を伸ばしたが間に合わなかった。

「ありす！」

ありすが目を合わせ、ふわりと笑って手を振り・・・消えた。

夢のような、邂逅だった。

ありすインワンダーランドの影向

せっかくあらわれた守護天使は、ワタシのいとし子を守りきると姿を消したそうだ。

まだ、まだ、呪が足りないのか。

呼び込めるだけの呪は確立できた。幾多の集落の消滅と、数多の悲鳴が土地の魔呪となりえた。

では次は？

・・・呼び込んだこちらで、守護天使を繋げば良い。

・・・捕らえて離さぬように。

呪を紡ごう。

呼びこんだ天使を逃がさぬよう。

呪で繋ごう。

ワタシのいとし子に更なる栄華を約束するために。

いとし子はワタシを残して年を取っていく。幼子は青年となり、夢の中の少女と異なる娘に恋をした。

エンダールが力を入れていた騎士団の、団長の娘だった。

貴族が名を連ねる近衛騎士団ではなく、広く一般子弟に門戸を開いた自警の意義が強い団だった。

下級貴族や農民でも力量があれば入団が叶うよう、貴族の意見を聞かず整備したのは初代エンダール王。手を貸したのは隣国で名をはせた傭兵。

貴族の子弟が名を連ねる近衛騎士団は王城や貴族は守れども、平民を守ろうとはしなかった事が発端。

それを憂いたエンダール王が、民を守ろうと集めたのが、傭兵集団、狼牙だった。

一介の貴族が、粗野な傭兵を忌避するのは仕方のないことだったが、エンダール王は彼らを擁護し、日々教育を施した。

教育を受けてこなかった粗野な傭兵や農民に一般教育を施し、その後騎士道を叩き込んだ。

その厳しさは貴族騎士団の子弟が、尻込みするようなものだったと言う。

エンダール王は彼らに問いかけ続けた。何のために剣を持つのか。何のために戦うのか。富か、名誉か、権力か？

こうなりたいと願う自分に近づくために、剣を振るうと男が言え、それすら他者を蹴落とすための自己顕示欲ではないかと言いつ返される。

強くなりたいからだと言えば、鼻で笑って打ちのめされた。

国のために、たとえば王は眉をひそめて毒づいた。

模範的な回答を返せば返すほど、打ちのめされ、冷たい眼差しで見据えられた。

徹底的に彼らは鍛えられた。そしてそんな彼らにエンダールは説いた。

『・・・弱者を思う心がなければ、それはただの凶刃の集まり。災厄を呼ぶ忌まわしきモノでしかない』

他者を想う心がなければ、背を預けるに足りるだけの信頼を築かねば、それはただの凶刃に過ぎない。

信頼無くては、剣を持つ意義すらない、と。

人を磨け、と王は言った。

体を鍛えるように心も鍛えよ、と王は言ったのだ。

・・・妙な王だ、と彼らには認識されたようだが、言動行動すべてが目を引くエンダール王だった。

そして、その王にたった一人残された王子が、狼牙騎士団にやってきたのだ。

目の覚めるような麗しの王子に、はじめ騎士団の男たちは眉をひそめた。

入るなら近衛騎士団だと思っていたのだろう。

貴族の長である王の実子。しかもたった一人残された、王子だ。

そんな王子が掃き溜めとうわさされる狼牙騎士団に、入団する。

なんの冗談だ、と彼らは憤った。

だが、齒向かった男たちは、問題の王子に完膚なきまでに叩きのめされる。

ワタシの愛しい子、ディノッソ、二十の春だった。

＊

・・・あれから五年経つのか。

中堅どころの使い手になっていたディノッソの元には連日縁談が舞い込んでいるようだ。いとし子の周りは華やかで姦しい。

何しろ目の覚めるような美丈夫ぶりなのだ。女も男も惚れる駄々漏れの色気はある意味、凶器だ。さすがワタシのいとし子だ。

だが、本人至ってストイックに剣の道に精進しているので、誰も言い寄れないし、そんな隙は見出せない。

守護天使に庇われたふがない自分を恥じていたのだろう、根本から自己を叩きなおす勢いで、日々いとし子は鍛錬を重ねていた。

『・・・ねえ、強くなりたいの？ それとも自分を痛めつけてるの？』

鬼気迫るように強さを求めていたディノッソが、小さな娘のやわらかな眼差しに射抜かれるとは、きっと誰も思わなかっただろう。

『ねえ、そんなんじゃない駄目だよ。強くなりたいなら、守るものを持たなきゃいけないんだって、とうさん言ってたよ』

ワタシだってその瞬間を見ていなかったら思いもしなかった。

だが、ワタシのいとし子の眼差しに、身を震わせるような疼きを感じたのは間違いない。

ディノッソの、恋に陥る瞬間を、ワタシもまた見納めた。

いつ見ても、我がいとし子の、恋の奇跡は胸うずく。

『……父上……団長と一緒にいるのは、誰なんですか、』

エンダール二世に問いかけた、いとし子の眼差しは真剣だった。そして彼らの見やる先に、鬼の団長と恐れられる騎士団団長が、女の子と手を繋いで歩く、ほほえましい光景があった。

いとし子の眼差しは物騒だ。まさかと思うが、いとし子よ、娘の隣に立つ男を抹殺しようと思っではいまいな？

『……あれは親子だぞ。殺気を殺せディノ』

あごに手をやり、エンダールが呟いた。

王子様といえど団内では呼び捨てが基本だ。

しかも階級が歴然としているため、団長と王の会話に入る事は叶わない。

『・・・呼ぶんならその女殺しをどっかにやってからにしてください。俺の可愛いノエルが孕ませられたらどうするんですかー』
団をすべる団長の言葉にディノッソは目を白黒させて、女なんか殺してない孕ませてもいない、と慌てて付け足していた。

そんなディノッソを見て、少女が笑った。

その笑顔を見て、ディノッソが固まった。はねる心音に戸惑っているのが手に取るように判った。

金茶の髪、蒼い瞳の可愛い娘だった。

父団長の手伝いで洗濯や掃除に明け暮れる、およそ貴族の娘と言うよりも、下働きの娘のようだった。

だが明るい笑顔で男達を鍛錬場へ送り出し、疲れて戻る彼らのために、くるくるとよく立ち回っている。

ディノッソも始めは恋愛の対象とは見ていなかったようだ。

さもあらん。八つも離れている子供で、色恋沙汰に晩生な様子が見て取れる娘だ。宮廷の花との戦いで百戦百勝のディノッソの恋の相手だなんて、それはもう、玉の輿と言うよりは、

・・・虐め以外に他ならない。

『・・・ディノッソ様、お早く王城へお帰りください』

ある日、騎士団団長が顔をしかめ囁いた。

常なら呼び捨ての名を、わざとらしくも様付けして、その顔には大きく邪魔だ、と書いてある。

『・・・ここが気に入っている』

鍛錬の最中でも洗濯ものを干しているノエルを見れる、ベストポジションだった。

ノエルを狙う男は多く、ディノッソはいつの間にもやら護衛よろしく娘に張り付き、鍛錬していた。

・・・他人の機微には聡いくせに、自分の心となると不可解なのが、見ていて歯痒い。

『風当たりがきついんです。なまじ女は娘しかいないから、嫌がらせなんかも増えてきてましてね』

難しい顔をしながら団長が囁いた言葉に、ディノッソは振り向いた。

『ノエルに何かあったのか』

『何かあったら遅いから申し上げているんです！』

騎士団団長は肩をすくめて見せた。

『だいたい、脅迫状もらったってけろりとしてるんですから・・・我が娘ながら、』

『・・・もらったのか』

『えーえ。真っ赤なインクで大書きにされた『殺』『死』『滅』の文字がね！・・・問題はそれを見た娘が、眉ひそめてですねえ・・・』

そう言って騎士団団長である男が話し始めたノエルと言う娘・・・ワタシのいとし子が、心奪われた娘もまた、在る意味規格外の娘だった。

もらった脅迫状の恐ろしさに真っ青になって震えたのか、泣いたのかと思いきや。

ふふふ、とワタシはこらえきれない笑みを浮かべた。

赤いインクで書かれた脅迫状に、娘はすらすらと添削をいれ始め

ただと言う。

言い回しの間違い、誤字脱字、文章上の不適切な接続詞の指摘など。

真っ赤な血文字のような脅迫状が、青いインクで添削されて、なんとも間抜けな代物になっていた。

それを見て満足そうにため息をついた娘が、今度は頭をひねり始めた。

『・・・とうさん、差出人不明で、どなたにお返しすればいいのかわかんないの。しかも誤字脱字でんこ盛りで、書き間違いなのかそう思い込んでいるのか、痛々しい内容で・・・。まさか、こんなお手紙をほかの方にも出してらっしゃると思えないんだけど、ここまで酷いと貴族のお姫様のはずなのに、教養なしの馬鹿だと笑われちゃうんじゃないかな・・・』

本気で相手の女を心配しているのが、有りだった。この娘にワタシのような悪意は無い。・・・正直こんな純粋で大丈夫なのかと本気で心配した位だ。

そして、それを知っていながら素直な娘の心配事に、乗り気で乗るこの親の方が問題だった。この娘にこの父は邪悪すぎる。この父に育てられてまっすぐ育った娘は偉い。

『・・・しかたがない、騎士団前に掲示板を作ってやるよ。張っておけば気付くだろう』

『えっ！ 貼っちゃだめよ、とうさま！』

『アハハハ、ま、すべてこの父に任せな』

『ちよっ！！！ まっ！！！ まって！ とうさんッ！』

いっそいい笑顔で騎士団団長である娘の父が笑う。あの男の尻には黒くて細長くて先のとがった尻尾がついているに違いない。

団長の笑う声はほがらかに響く。

心底楽しんでる声は心躍らせるはずなのだが、なぜか心がしんと冷えていく。

・・・どのような楽しみの質なのか問題だけで、むしろ、いとし子とその思い人に咎が無いのが救いだ。呼び込んだのは貴族やつらのほうだから。

『文句をつけてきた娘にも良い薬になっただろうよ。馬鹿さ加減を放置していた親にも、良い薬になっただろうし、札をいわれてこそ、だろう？・・・悪意を向けられるなんてお門違いも甚だしい・・・』

・・・子を守ろうとする気概のこもった眼差しだった。

あの男もまた、狂気の端に片足を入れていたのだなあ・・・。娘といるところしか見ていなかったから、暗くよどんだ執着に気付かなかった。

娘に危害を加えようと悪事を企んでいた者共を、蹴落とし踏みつけながら、騎士団団長は見せなくなっていた傭兵としての片鱗を垣間見せ、冷めた微笑を浮かべながら、眉一つ動かさず、剣を振るった。

下層の傭兵上がりの男だと、たかを括っていた貴族どもは恐慌に陥った。

逃げようとも逃げられず、周到に追い詰められて、首筋につめた金属の刃がすべる。

足元は血と肉の破片。ニゲラレナイ。

『・・・どっちにしろ、俺の可愛いお姫様を、遊び女扱いしてくれた代償は高くつくぜ？』

・・・ノエルの父親は、かつて敵国・・・隣国で傭兵を率いていた男だった。すこぶる悪い口も最近では大人しくなっていたのに、この男の本質を見誤った貴族どもは、頭も悪ければ、運も悪い。

自業、自得。

この言葉を噛み締めて、いる事だろう・・・死んだものはあの世で、生き残ったものは、恐れおののきながら屋敷の奥で。

そんな水面下でのやり取りを、知ってか知らずか・・・いや、知らぬはずはないか。我がいとし子は知恵が回る。・・・その知恵の大半は悪知恵だが・・・。

そして、腹を決めたディノッソは容赦なく娘を追いつめ始めた。

＊

外堀から埋め立て、古参貴族の利害を見抜き、容易にことが運ぶよう懐柔し、階級の低い娘でも輿入れが叶うよう普請した。いつの間にか古参貴族の後押しが決まっていた。

娘がおかしいと思い始めた頃には反対するものなど皆無だった。傭兵だった父親以外は。

『ノエルッ！ 逃げるぞ！』

『とうさん！？』

『このままじゃなし崩し的に輿入れ、王子妃就任だ！』

そしたら、娘といえど会うのが難しくなるうううっっ！ 俺の生きがいは、お前なのに、お前を俺から取り上げるなんてっ！

ぐるぐるうなりながら、父親は目ぼしい物を鞆に突っ込み始めた。

お前と当座の資金。それから母さんの形見・・・と次々突っ込んでいくその手際のよさ。・・・夜逃げは何もこれが初めてではない。仕方がないなあ、とノエルも荷物をまとめようと腰を上げたときだった。

『・・・大丈夫ですよ王子妃の仕事には騎士団の慰問が組み込まれてますから』

涼やかな声が響いた。

『・・・ディノッソ、様・・・』

ノエルは信じられない思いで名をつむいだ。

父娘二人に、王子本人の現れは衝撃だったのだろう。だが、やはり父親。衝撃から立ち直るのは早かった。

『慰問じゃヤダって言ってんだろーが！ 毎日ノエルのご飯食べてノエルの整えたベッドで寝るんだ！結婚なんか早すぎる！ ノエルが足りなくなるなんてヤダ！』

『餓鬼ですか、あなた・・・いい加減子離れの時期なんですよ』
ほれ。と手渡されたのが、騎士団団長のさらに上いく王国国軍軍団長の証。

慌てて投げつけようとした父団長を、どっから沸いてきたのか左右を固めた屈強のマッチョが抱え上げた。

『いやだあああああああ！ ノエルうううううう！』

『と・・・とうさんッ!？』

叫びながら自宅から引きずり出されていく団長・・・もといいたった今から王国軍団長閣下。・・・しかし捕縛された熊のようだ。

思わず後を追いつつになった娘を引き止めたのは、他でもない、ワタシのいと子だった。

『ディノッソさま！ ち、父は何か悪い事をしたんですか!？』

連行。という文字しか思い浮かばないのだろうか……。だが、ワタシでもそう思うぞ（うんうん）

おそらく投獄という文字しか脳裏に浮かんでいないのだろうか娘は、いとし子の腕の中で青くなっていた。

『……栄達です』

何か問題が？　と言わんばかりのいとし子の眼差しに、（すまん、娘。）少しだけ娘に憐憫の情を傾けたワタシだった。

……そして、気がついたときは、娘はディノッソの褥に追い込まれていたのだ。

さすが我がいとし子。そつがない。

それでも娘はかたくなに王子妃の地位を返上しようとしていたが・
・ディノッソはここぞと言うところで泣き落とした。

絵に描いたような王子様の涙だ。娘は息を呑み、目を白黒させていた。

もとより聡明な、国が誇るどこに出しても恥ずかしくない王子だ。娘とて憎からず思っていたのであろう。ただ、相手を思っただけ身を引こうとしていた娘にとって、ディノッソ渾身の泣き落としては衝撃が強かったらしい。

うむ。さすがだ。あれでほだされぬ娘はおるまい。

だがワタシは見たぞ。

ディノッソのやつ、きつく胸に抱いた娘が顔を上げずにいたから安心したのか『してやった』と言わんばかりの笑顔を見せていた事

を。

既成事実を成立させればこっちのmondと言わんばかりのラスト
スパートにも舌を巻いた。本当に、柔なベッドでなくて良かった。

ディノツソが娘を妃にすると周囲に明言してからきっかり一年後
に、娘は双子の赤ん坊を生んだ。

・・・いとし子よ、仕込み具合も完璧だ。

ありすインワンダーランドの影向（後書き）

うん．．．なんだか、家政婦は見た！的なノリ．．．。

ありすインワンダーランドの影の花

双子は二卵性だった。

兄はいとし子にそっくりな金髪碧眼、妹は母に似て金茶の髪に蒼の瞳だった。

いつものように手製のぬいぐるみを手にやって来て、ベビーベツドの中を覗いた。

「・・・かわいらしい・・・」

身震いするほどの歓喜に襲われる。いつ見ても、いとし子の小さな命は、力強く輝いている。

稀有な碧が魔女を映した。エンダールの面影を色濃く残し、ディノツソの愛嬌を写し取ったようだ。

愛らしい蒼が、魔女に手を伸ばした。可愛い「嫁」の面影に、エンダールの血を添えた愛らしい姫となるだろう。幼子のその手に指を絡めて魔女は微笑んだ。

祝福を。

更なる栄華を約束しよう。

お前とお前の為に必ずや。

金髪碧眼のディノツソに良く似た兄には、青い人形を、金茶に蒼い瞳のノエルに良く似た娘には、ピンクの人形を、そっと握らせた。

赤子の頬に手を当て髪をかきあげ、常に無い優しい微笑を浮かべた魔女は、聖母のように見えた。

離れがたいと感じていた手を離し、去ろうとした魔女の指を、兄の指が追った。ぎゅっと握られて息が詰まる。

「・・・これ、いたずらはいかんぞ」

優しく指を抜きさって、シーツを引き上げ、ぽんぽんと撫でて、今度こそ銀の魔女は踵を返した。

・・・碧眼が、その背を追っていたのにも気付かずに。

それから、魔女は大きくなったいさかいを鎮めに走った。

互いに互いの国に戦いを仕掛けないよう、内政に目を向けさせようと、エンダールが持っていた国璽も奪った。

国璽を差し出してきた腹黒貴族はその後、証拠と共にエンダールへ引き渡した。エンダールの地は騒然となったようだが、これでしばらく時間も稼げよう。

せめて、幼子が自分で自分を守れるようになるまでは、戦端を開かないつもりだった。

「・・・次に守護天使を呼びこむときは、拘束の布陣を取った時

だな……。さて次の生贄は誰を？」

隣国の王は最早生ける屍だ。

そしてエンダール二世とディノッソは善政を敷いている。

唯一の綻びは旧王家に属する古参貴族。

「姦計企てそうな奴はおったかな……。？」

だがそれも、少し心情をあおれば、牙を剥く事だろう。

「だが、まだ、だ」

……。思えば、このころが一番安定していたのかもしれない。

幼い子等の枕元で、母となった可愛い「嫁」が御伽噺を聞かせている。祖父が出会い父が出会った守護天使の話だ。

瞳をきらきらと輝かせて、妹姫は話をせがむ。ありすが現れて敵を倒していく件になると、ぐっと身をせり出して聞き入っていた。

兄王子もそうなのだろうと見ていれば、もの言いたげに小首をかしげる。

『……。ははうえ、ウワンコウは黒髪なのですか？』

『ええそうよ。お爺様も、お父様も、口をそろえて仰るわ。あります綺麗な黒髪に、黒瞳だったそうよ』

『……いつもそうなのですか？』

腑に落ちないと言いたげな眼差しが、刹那ワタシを射った。

見えているはずなど無いのに、瞬間心の臓が跳ね上がった。

……偶然だ。今までだってあったではないか。

彼ら家族の幸いを、垣間見て微笑むだけの毎日に、こうして偶に目線が重なる事は。

眼を伏せ考え込んだ幼い少年の呟きは、魔女の耳には届かなかった。

『……おかしいな……』

日々は恙無く過ぎていく。

愛しいワタシの子らが健やかでありますように、朗らかでありますようにと祈る毎日は過ぎていく。

時折重なる碧の視線に息詰まる思いを抱きながら、それでも魔女はこの国を訪れる。

あっという間に彼らは成長するのだ、念を入れて呪を施す。

邪心がはびこらない様に、慢心に囚われないように、彼らに幸いが約束されるように。

……もう、双子が少年少女でなくなった頃には、巷ではもっぱ

ら『守護天使』が御伽噺として確立されていた。

長い黒髪に黒い瞳の不思議な衣を身に纏った天使は、子供達の味方で、戦女神・・・勝利の女神だ（事実彼女が味方したエンダール王朝の飛躍的な躍進は、史実にもまれた）

いつしか守護天使は子供の神様で騎士、兵士の女神となっていた。

市井の子供たちまでが期待に胸を躍らせ、夢を抱くようになった。

いつか、目の前に守護天使ウワンコウが現れて、危機から救い出してくれるのだ。

それは雄大な御伽噺。

・・・だが、胸に抱いた暖かな夢は、成長と共に覆されるものだ。

妹姫が眩しげに悲しげに兄を見る。その真摯な眼差しに、銀の魔女は眉をひそめた。

その蒼の瞳が陰るのを、いぶかしく思った。

「いとし子よ・・・？」

どうしたのだ。

もっと屈託無く笑っていたはずだ。

もっと、ほがらかだった筈だ。

金の髪に碧の瞳の優美な兄を見やる妹の、諦めきった眼差しに、ディノッソが心配そうな眼差しを送っている。ノエルの眼差しは心配にゆれ、それでも大きな海のように彼女を抱いていた。

己が髪を一房手に取り、ため息をついた王女の横顔。

銀の魔女は初めて焦燥を感じた。

可愛い私のいとし子だ。

兄は聡明で文武に秀で、妹は風雅明媚でどこに出しても誇れるほどの美男美女。どちらも自慢のいとし子だ。

父譲りの美貌を誇る兄の明晰、母譲りの繊細な美の妹は艶やかで芳しい。

けれども、それこそが絶望の源になってしまふとは。

『この色合いでは、にいさまとは違って守護天使の加護は得られないの』と嘆く娘の姿を垣間見た。

輝かんばかりの戦女神に相応しく在れる様、さまざまな事を学んだ一の姫。その真摯さが、己が限界を知ら示す。

与えられるモノが一握りの者の僥倖に過ぎない事実。

望んで望んで、努力を重ねて、それでも・・・あたえられなかったら。

その努力は、その時間は、消えるのだろうか？

『選ばれる者は判りきっているのにね、諦めきれないなんて、馬鹿よね』

父母に淡く微笑んだ妹姫は、それでも努力を怠らなかった。
一国の姫に課せられた修練は、兄王子と変わらない量で、それでも淡々と彼女はこなしていく。

精錬で美しいその姿に魅了された男が、彼女を求める眼差しで見つめても、遙か先を行く兄の背中を見てしまうのだ。

焦燥に胸を焼き、打ち間違えた一手に臍を噛む。

どちらも愛しい私の子だ。等しく栄華を与えたい、愛し子だ。

エンダールの血に連なる彼らのために、守護天使を呼び寄せることを決め、そのために育んだ絶望だった。

して来たことが、ここに来て、ことごとく裏目に出ていた。その絶望にやはりワタシは魔女なのだと思い知る。

妹姫の努力は、切ないまでの願望だ。

求めて求めて、叶わない事を知ったのだ。

だがそれを彼女自身が認めなければ・・・兄王子の影に隠れた彼女の存在を、日の光の下に示しても、彼女の抱く劣等感はかわらない。

もがくように、空の星に手を伸ばすのだ。

まるで太陽と月のようだ。輝く太陽の光で光る淡い月。

だが、ひるがえり見てみれば、お前こそを眩しく見つめる眼差し

に気付くだろうに。

お前にとって絶対の太陽が父であり兄であるならば、お前を見つめるあの男にとって、お前こそが太陽なのに。

歯痒い。歯痒い。

「ーーぬあああ、男が不甲斐ないッ！　なぜそこでもう一押ししないのだっ！」

がらびしゃ　どどんっ！

『きゃあぁッ！』

『姫ッ！』

「・・・あ。しまった・・・」

・・・いかん。おもわず雷を落としてしまったではないか・・・。

む。だが、これは・・・良い感じではないか？

目の前ではいとし子の細い腰を抱き寄せて、雷から身をもって守ろうとする例の男。よし良い。よくやった！

・・・男は公爵家の次男で、金髪緑眼の真面目な奴だった。

血筋で言えば遙かな過去に王家の姫が降嫁した、由緒正しい家柄という奴だ。だが、先のエンダールの乱の折、祖父が先の王家に組みしようとした愚か者だった。

彼らの父は聡明な学者肌の男で、そんな父公爵を諫めたようだ。

民意を失った放蕩するだけの王家に忠誠を誓うだけの価値は無いと言いつつ切ったと言う。

・・・だが、聞く耳持たず会戦を叫ぶ祖父に見切りをつけ、彼を幽閉し、さっさと公爵位についた父親はすばらしかった。

あの戦の折、エンダールに味方する古参貴族は皆無だったからなあ・・・。

その公爵が育て上げた兄の政治の腕もさることながら、騎士団に所属させ下層からたたき上げて来たこの弟の聡明さには眼を見張るものがある。

兄は次期公爵として参謀副官の任を担い、弟は冴えた頭脳と卓越した剣技で王族の護衛に当たっていた。

社交界の注目を浴びる将来有望な若手貴族。彼らの周りは華やかだ。

しかも先ごろ兄の方が、侯爵家の一の姫と婚姻を結ぶことが判ってしまった。

残された次男。家紋を背負うことが無いから見向きもされないのかと思いきや、成り上がりとする新興貴族にとって最高の婿がねだ。

何せ公爵家は安泰。兄は参謀として将来国の中枢を担うことが証明されているのだ・・・。

だが、弟の目線はいつも揺るがない。

彼の向かう目線の先にいつも金茶の髪した娘がいる。護衛だから当たり前だと、果敢に攻め込む婦人はいるが、ワタシのいとし子以外の娘には目もくれない。

・・・そしてひそかにディノッソが姫の婿がねと目をつけていた男だった。たしか、現在は近衛隊一番隊の隊長だったはずだ。

ディノッソとノエルが変装しては近衛隊に忍んで行くので、後をつけたことがある（・・・ディノッソは美味く変装していたがノエルは普段通りだった）

勤務態度は真面目。酒はざるだが女癖も無く、賭け事もしない。そして何より、王女に忠誠を誓った騎士だった。

父母のめがねに適った理想の婿殿・・・が、しかし。

「うぬう・・・」

見つめ合って頬を染めている場合か！ 少しはいとし子を見習って、口説かんかっ！ ええい、この朴念仁めっ！

・・・こんな時、エンダール二世ならすかさず耳元で、甘い言葉を吐いていたぞ。・・・あの王妃にはあまり効き目はなかったがな。ディノッソなら艶麗な微笑でノエルを誑し込んでいたぞ。・・・腰砕けになったところをすかさずお持ち帰りする事も忘れなかった。

エンダールに忠節を示すなら、頼りなげな一の姫を、男らしくお守りする事だと、ワタシ自ら夢枕にも立った。

滅多にないこの好機、逃してどうする。妹姫の目線、意識が注がれている今、存在を示さずして、何時示すのだ、貴様っ!!

ぎりぎりと睨みつける眼差し。ワタシだけではない。まあ、ワタシの殺気は消してあるから厳密には覗いているやからは二人だ。

ワタシの対岸では大木に隠れながらノエルが固唾を吞んで見守っていた。・・・その足元にはディノッソ。踏みつけて止めているのはノエルだ。

『俺の・・・俺のお姫様が・・・クロス。やっぱり、あいつコロス！ 公爵が何と言ってもかまわない!』

・・・やれやれ、ディノッソ。婿がねと定めたのは自分だろうに・・・。

しかしこれでノエルの父も溜飲が下がる事だろうな!

『そしたら、分かれるわ、あなた』

『奥さん!?!』

衝撃を隠しきれないディノッソの情けない顔。・・・やれやれ、いとしごよ・・・。

父親の娘に対する偏った愛情を垣間見た瞬間だった。

妹姫の動向が、父母もろとも目を離せない、そんな時。

『・・・姫。ずっと、お慕い申しておりました・・・』

切ない眼差しで妹姫の心に切り込んだ。

（（よしっっ!!））

父母もろともに拳を握り締めた。

眼を見開いて呆然としていた妹姫が、握り締められた手と、近衛騎士を見た。

真剣な眼差しに射抜かれて、姫の頬に朱がのぼる。小さく震える唇が、何事かを言ったようだ。

『・・・わたくし、何のとりえも無い、女です。剣以外上手く扱えません。およそ淑女と申される女性のする事は、さっぱりです』

『誰よりも努力している事を、存じ上げております』

男はそう言って妹姫の腕を取った。

剣だこに紛れて、刺繍針で突いた跡が残っている指だ。

針で突いた後、男がその指こそを、舐めて癒して上げたいと願っていたのを知っている。

『・・・父のように俊敏でもなければ、母のように穏やかにもなれません。ましてや、兄のような明晰さは皆無です』

『姫の安らぎになりたいのです』

追いかけて追いかけて、理想とする人たちは遥か彼方。

焦れていたのを知っていた。

理想の結果が出せなくて泣いて悔しがっている事も。

そしてそんな彼女の後姿に、手を伸ばそうとしては何度もためらっていた男の事も。

『何れ戦が始まります。その時、わたくしは民のために剣を取り、戦うと決めております。戦場にしか、活路を見出せない女が、どうしてあなたの手を取れましょう』

『・・・あなたを守るのは私の命を守る事と同意義です。そして

姫なら、わたしに守られているばかりではないでしょう？・・・一緒に、戦ってくださいませんか？』

『・・・一番隊長の・・・』

『ええ。わたしの背を任せて良いと思える相手はあなただけです』
あなたを守って、あなたに守られて、そしてこの国のすべてを守り抜いて見せます。

『ですから、姫。

わたしの妻に、なって下さい』

『・・・はい』

泣き笑いの笑顔は、すぐに男の唇に塞がれて、赤く染まる夕日の中でとても幻想的だった。

いつも、いつ見ても、いとし子の恋の奇跡は胸が躍る。

・・・うむ。眼の端に見える、今にも剣を抜いて切りかかろうとするディノッソを除いてな。ノエルが抑えているから大事無いと思うが。

満足のため息をつき、さて帰るか、と、踵を返す。

・
・
・
・
・
・
そして、真摯な碧の眼差しに、囚われたのだ。

ありすインワンダーランドの花陰

『あの子の力になってあげて。・・・おそらく私ではなんの助けにもならないから』

そう言って笑ったわたしを、驚愕の顔で見た公爵家の次男。

ああ、やはり、妹を任せるにはこの男がいい。

宰相補佐の兄のような狡猾さは無いが、寡黙な眼差しが妹を見る瞬間だけ甘く蕩ける。

きっとあの男は、妹が姫でなくともあんな眼差しで見つめるのだろう。あの子があの子であればそれでいいと如実に表す瞳を持った男だ。

わたしは望んでもあんなふうに誰か一人のために盲目になれないと、思っていた。

潔く妹の瞳に切り込んだあの男が少し羨ましい。

だが、これであの子も幸せになれるだろう。

どこかほっとした思いで、辺りを見渡せば、母が父を引きずって帰る姿を見つけてしまった。

苦笑いが浮かぶ。

心配性の父と母のことだ。花嫁修業の一つも行わない娘を心配し

て、婿がねを探していたのも知っている。

心配せずともそのうちあの男が動くと思っていたが、それでも心配は尽きないのだろう。

悔しそうにしかし楽しそうに去っていく両親を微笑んで見送り、さて、自分も帰るかと思返したとき、その存在に気がついた。脆弱な気配だ。空気のようにさり気なく溶け込んで、気づくことが難しい。注意して見ていないと、取りこぼしてしまうのだ。

銀の髪に青の瞳の美しい女だ。あれが誰なのか知りたくて、いろんな人に聞いて回った。

銀の髪に青の瞳の小柄な女だと言うとみんながみんな、眉をひそめ口をそろえて悪態をつく。

『それは、災厄の魔女に違いない』、と・・・。

なにを馬鹿なことを、と憤ったものだ。

彼女はそんな禍々しい存在ではない。もっと温かくてやさしい、春の風のように柔らかな存在だ。

なぜ、皆は彼女の事を悪し様に言うのだろうか？・・・納得がいかなかった。

『王子、災厄の魔女に会ったのですか』

家庭教師は恐る恐る問いかけてきた。その彼にっこり笑って、いや違うと打ち消した。

『魔女が、子供を好きなわけあるまい？ 小さな子供の怪我を癒して、痛くないよ、と慰めて、あやすのかい？』

問いかけに家庭教師も目を白黒させた。

そうだ。彼女はいつも人目を憚んでやって来た。

見つければ糾弾されると知っていたのだろう。

今より遥かに幼かった頃、こんな幼児なら姿を現し言葉をかけても安全だと思っていたのかもしれない。

・・・わたしはよく怪我をする子供だった。

痛みに顔をしかめ、あがった熱に魘されて夢うつつでいると、妖精がやって来る。

ひとりと冷たい手のひらが、熱で熱い額に押し当てられる。心配そうに覗き込む青い瞳を覚えている。

『ただ銀の髪をしているだけの、優しい人なんだ。階段から落ちたわたしを助けてくれたし、病気のときにも現れて、癒しの風を送ってくれたんだ。・・・わたしにとって、黒髪のありすより、銀髪の彼女のほうが、よほど守護天使だと思える』

戦場で一度しか会えない天使と、ふと気付けばそこにいる天使。

銀の妖精に心酔するのは、自然な事だった。

・・・記憶の中の彼女と、現在目の前にいる彼女を照らし合わせる。

・・・間違いない。

『やっと、見つけた私のウワンコウ・・・』

金の髪した王子は、ふわりと微笑んだ。

『待って!』

慌てて風をまどって逃げても、いとし子は追いかけてきた。

目くらましも何もかも、効いていないのだ、なんてこと!

見えていないのだと思っていた。目くらましはちゃんと起動していると思い込んでいた。まさかワタシの術を破れる人間が居ようとは。

姿を消して風に乗っているのに、迷いも無く、いとし子は追いかけてくる。

「呪、眼か・・・」

万人に一人の確立で、稀に呪の効かない者が生まれ来る。まさか、それ、なのか。

「馬鹿な・・・」

（本物の守護天使って黒髪じゃないんだよ）

まだ幼いとし子が、遠目にワタシを見ながら言ったのは、何時だった？

（僕の守護天使はね、黒髪じゃなくて、月光みたいな色をしてるんだ。お目は青いんだよ）

（そこにいるよ。何時だって守護天使の気配を感じるもの。優しく、温かくて、蕩けそうなんだ。おかしいな、何でみんなには見えないんだろう？）

ずっと、見えていたというのか、いとし子よ。

「馬鹿な」

なんて愚かな事をしたのだろう。

注意深く観察していれば、気付けた事なのに。いとし子の姿を見たいばかりに自分に都合の良いように考えて、また取るべき手を間違えた。

そつと壊れ物を抱くように抱き寄せられた。

ワタシの目の前には、焦がれて止まない碧の瞳があった。

「あの時」も「あの時」も「あの時」も。愛しさに蕩けた瞳だった。愛しくてたまらないと物憂げに揺れた瞳だった。

「わたし」を見つめた、あの瞳。

「・・・いいや、違う。あれはワタシに向けたモノじゃない・・・」
はじまりの女は夫を思いつつ、子供のために身を投げ出した。その血の記憶がもたらすだけの混乱だ。

死者の思いに長らく身をなぞらえ過ぎた。それだけだ。

血のつながりも、心のつながりも何もない。

あるのはただ 愛しいと嘆く心だけ。

だから、この邂逅も切って捨てて見せる。

災厄をもたらした災いの女神だ。いとし子の守護天使などあるわけが無い。

あらゆる災厄の源だ。呪詛と憤怒と怨嗟の魔女。

ワタシが根こそぎこの国とお前の上に降るはずの怨嗟を、吸い上げて、糧にする。

だから、この邂逅はワタシだけの記憶に刻み込もう。

いとし子は、いつの間にかワタシを追い抜き大きくなっていた。首も胸も腕も腰も、すべてにおいてたくましい。

その胸板に両手をついて、押しのけた。

『・・・世迷いごとを、エンダールの血は腑抜けを生んだのか？』
あざ笑おう。

酷薄の魔女と見えるように、慎重に。

『私の守護天使は、なぜそんな恨み言を言う？』
金髪碧眼のいとし子が、納得出来ないといわんばかりに顔をしかめた。

『毫碌したか、たわけ』
きつい眼差しを装って。

一歩では捕まえられないように、距離をとった。
まっすぐ見返す事は、難しい。その眼差しの力に押されてしまう。
だが、こんな間違いは正さねば。

『運命の相手に出会ったら、その手を離してはダメだと、祖父からも父からも言い渡されているんです』

ああ、そうだったな。いとし子よ。

お前の祖父もお前の父も、心に決めた相手にはとことん食い下がったものだ。

だから、お前もいずれ、心に決めた娘を見定めて、追い込んでいくものだと思っていた。

・・・だが、今回ばかりは相手が悪い。

その思いはまやかashed。

「幼い夢の出現に過ぎない。刷り込みという物だ。

夢は夢。

ワタシのいとし子にふさわしい姫は他にいる。

『ふ。呪を撒き散らしに來た姿を垣間見て、守護天使と間違うなど、エンダールの血もおしまいかな？』

目を細めて、蛇蝎を見る心積もりで行え。

唇に呪詛を、眼差しに蔑みを、指先まで神経を凝らせ。

みかぎ
見限れ。

『・・・なぜ、そんな呪詛を上らせる。あなたの心が悲鳴を上げているのがわかります』

眉をしかめて、痛みをこらえるようにいとし子が囁く。

なぜだ！

なぜ、効かない。

言葉に憎しみを乗せたはずだ。

蔑視されて、塵芥のように見られてもいいものを！

『・・・効きません。あなたの呪詛には、嘘が在る。私は意図や思惑に縛られることが嫌いなんです』

いとし子が手を伸ばす。

金の髪が揺れる。碧の瞳が眇められ、ワタシを真正面から見据えた。

駄目だ。囚われてしまう。

それだけは駄目だ。

唇が震えた。

ためらいが指先をしびれさせるが、それすら振り切る。

腹に力を入れて、前を見据えた。

始めてワタシからいとし子に目線を合わせた。

『では、祖父に言え。お前の愛しい妻を呪い殺した魔女に会ったと。父に言え。恋しい母と二人の兄を奪った魔女に出会ったと！・・・ふ、ふふ・・・運命、か。あながち、間違っではおらんようだ！』

嘲るように吐き捨てた。

祈るように、罵った。

呆然と見開かれた、碧の瞳を見ていたくなくて、風を纏い空へとんだ。

・・・いいや、逃げた。

まっすぐな、いとし子の眼差しから逃げたのだ。

追いかけるな。ワタシは魔女だ。災厄の魔女。

お前の御世に一欠けらの陰りさえ許されない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1202t/>

ショートとりっぷ！

2011年8月27日17時23分発行